

# 日本風俗史

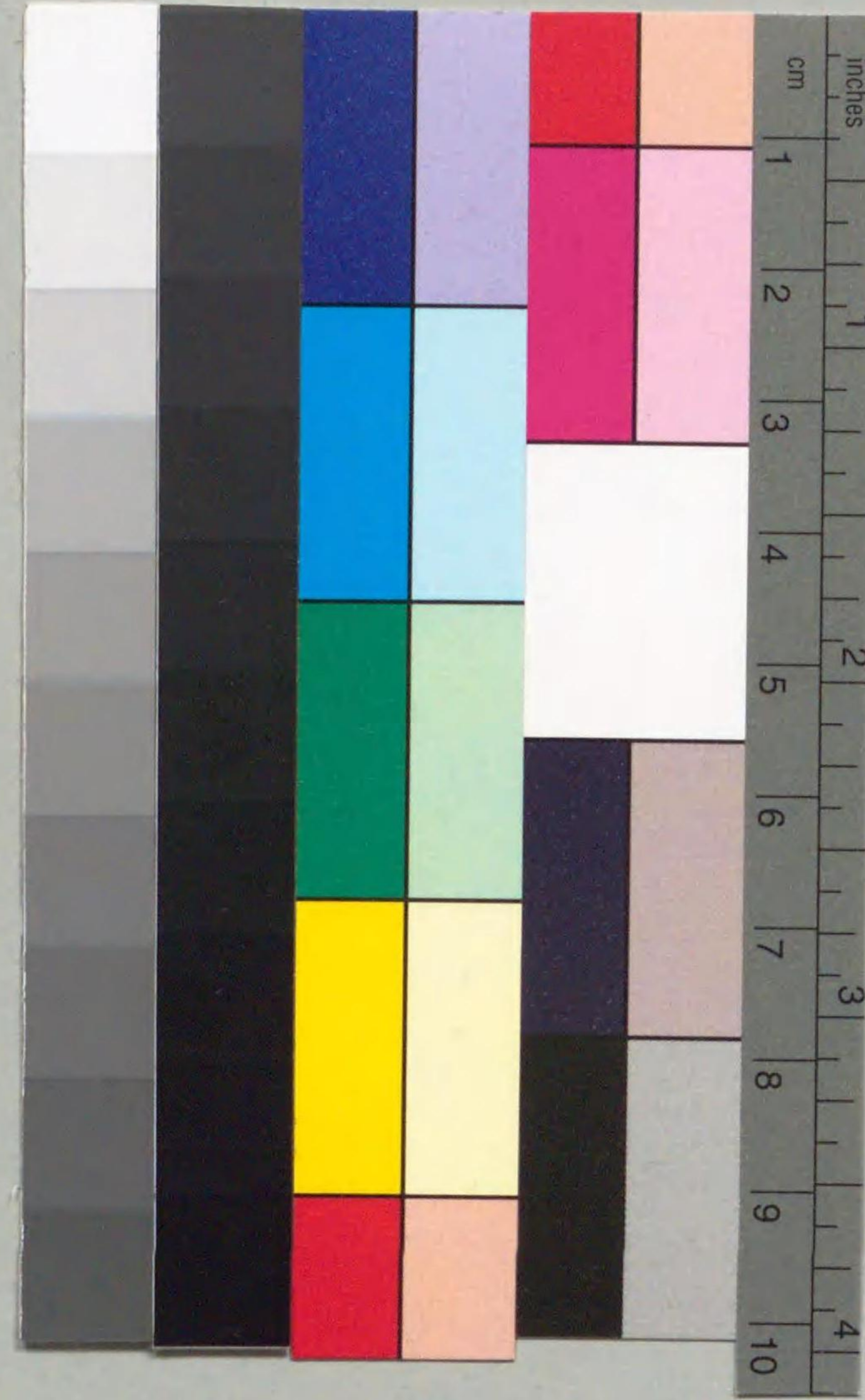
著 上里朝秀

552



## 先祖の生活

三月書局出版









# 史俗風本日

活生の先祖



書叢館書圖童兒

著秀朝里上

部版出園學川玉

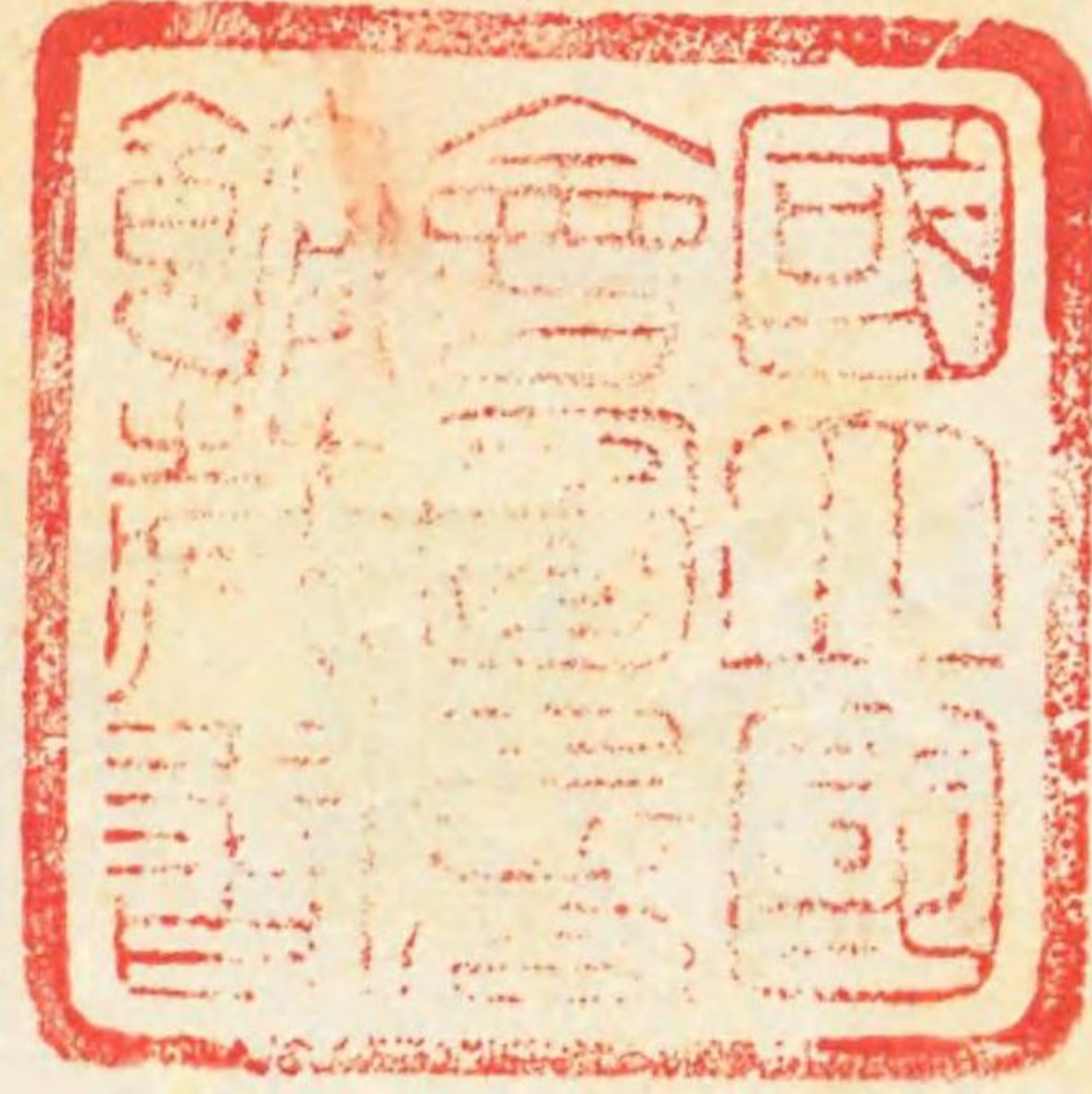






室町時代の風俗

29  
K-13



151114





はしがき

これまでの歴史は多く政治と戦争の歴史であつた。ところが近年歴史の見方が進んで来て、文化史、風俗史、経済史、社会史といったやうなものが、だん／＼と研究され、しかもこれらのものは前のにもまして重んぜられるやうになつて来た。まことに喜ばしいことである。

しかしこれらの研究も、その多くは大人のための研究であつて、われ／＼少青年のためになされたものはほとんど見ることが出来ない。私はそれを遺憾に思ひ、不肖をかへりみず、こゝにこの書を公にしたのである。

本書は主として衣食住を中心とした祖先の生活を書いたものである。もとより準備のものであるが、これによつて皆さんは、皆さんの祖先の日々の生活をしのぶことが出来ると共に、今のわれ／＼の生活についても、これまでより一そう深く又面



白く知ることが出来ようと思ふ。更に進んでこの方面の深い研究に入るよすががともなれば非常な喜びである。

なほ本書の不備な點は、今後の研究と皆さんの鞭撻叱正によつて訂正したい。

大正十三年春

著者

改訂にあたつて

不備の本書が、幾分でも皆さんの勉強の相手となり得たことは、著者の非常な喜びである。同時に私はこれを一そうよくして行かなければならぬ責任を感じた。それで出来るだけの力をつくし、漸く五年をたつた今日改訂を見ることが出来た。もとよりこれで充分だとは思はないが、前よりはたしかに良くなつてゐると言へる。それがせめてもの慰みである。なほ不備の點は今後さらに五年を期して三たび改めることにしたい。皆さんの一そうの鞭撻を仰いでやまない次第である。

昭和三年新春

## 日本風俗史 目次

祖先の生活	一
我々の祖先	二
一 傳説の大人小人	四
二 アイヌと熊襲	九
三 日本民族	一五
住居	二六
一 穴住ひ	二八
二 太古の家	三四
三 青丹よし奈良の都	四〇
四 寢殿造	四二
五 武家造から書院造へ	四六
着物と飾り	五一



一 太古の着物と飾り……………五二

二 文物傳來後の服装……………五九

三 平安時代華美の服装……………六二

四 武家時代の服装……………六九

飲食物……………八六

一 太古の飲食物……………八六

二 外國と交通後の飲食……………九七

三 平安時代以後の飲食物……………一〇二

祖先の産業……………一一二

一 太古の産業……………一一三

二 氏と職業……………一二一

三 支那朝鮮と交通後の産業……………一二四

四 平安朝以後の産業……………一三四

五 江戸時代の産業……………一三九

うれしいお祝と楽しいお祭り……………一五〇

一 太古のお祝とお祭り……………一五一

二 正月のお祝ひ……………一五六

三 雛祭り……………一六五

四 端午の節句……………一六九

五 七夕祭と盂蘭盆……………一七二

六 重陽の宴……………一八〇

七 年の暮……………一八二

とむらひ……………一八五

一 太古のとむらひと墓……………一八五

二 佛教傳來後のとむらひ……………一九〇

好きな遊……………一九六

一 太古の子供の遊……………一九六

二 平安朝以後の子供の遊……………二〇〇

昔の旅……………二二〇

一 昔の旅館……………二二一

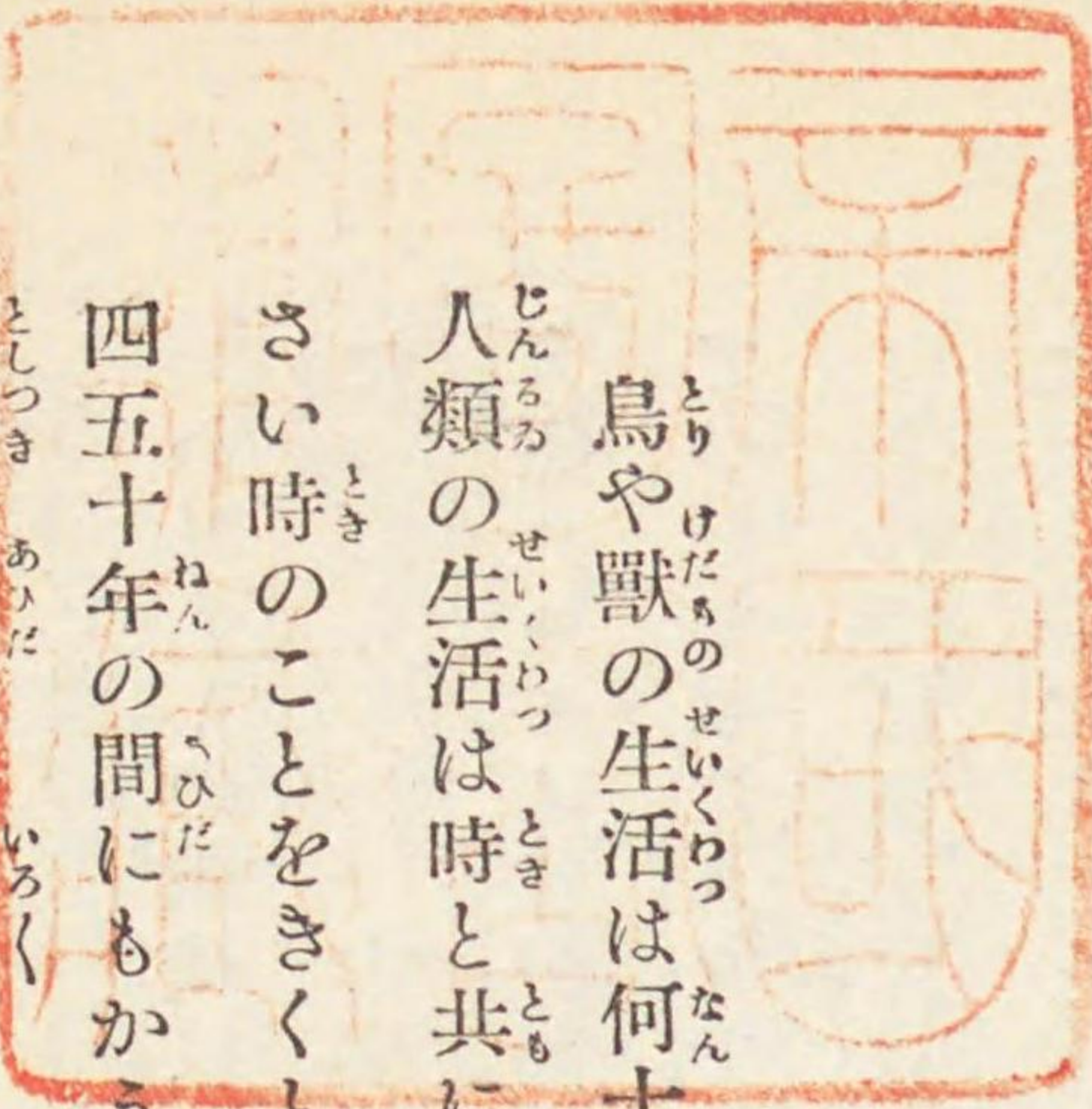


二	昔の道路……………	二二六
三	やつかいな關所……………	二三〇
四	何のための旅行か……………	二三七
五	海の往來……………	二四〇
	不便だつた昔の郵便……………	二四六
一	汽車代りの飛脚……………	二四七
二	公衆のための飛脚……………	二五三
三	時間と賃錢……………	二五四

日本風俗史 祖先の活

鳥や獸の生活は何十年何百年たつてもほとんど變りないものであるが、われわれ人類の生活は時と共にすん／＼變つて行く。私たちがおぢいさんやおばあさんの幼さい時のことをきくと、まるで大昔のことでもきいてゐるやうな氣がする。わづか四五十年の間にもかうした大きな變化があるのを見ると、何百年何千年といふ長い年月の間には色々のものがずる／＼變つたことであらう。

これから私は、我々の祖先がその昔どんな生活をしたか、またその生活は次から次へどう變つて行つたかを述べるつもりである。成可く分りやすいやうに。





## 我々の祖先

われ々の祖先ははじめから日本に住んでゐたのか、それとも外國から移つて來たのだらうか。古事記や日本書紀といふ古い歴史の本によると、我々の祖先は大昔天孫ニギノ尊が高天原から日向の高千穂の峯にお降りなされた時、尊のお供をしてついて來た人々であると言はれてゐる。

それでは高天原はどこにあるか、また我々の祖先が高天原から來ない前は、日本には人間はちつともゐなかつたのだらうか。昔の人は高天原は天にあると考へてゐたが、今日の人々はそれだけでは満足せず、いろいろの方面から研究を進めてゐる。或は各民族の歴史、言語の上から、あるひは人種の上から、或は貝塚や古墳などから出る種々の遺物によつてしらべて見たが、やつぱりはつきりしない。が大體かう

云はれてゐる。我々の祖先の大部分は今日の蒙古若しくは滿洲方面から朝鮮半島を通り、壹岐對馬の島々をつたひ、つひに九州へ渡つて來たものである。けれども一方朝鮮方面から直ちに日本海の荒波を乗りきつて出雲地方に移住したのもあり、また遠くシベリアや南洋諸島あたりから來たものもあると。

これによつて我々は、高天原がどこであるかははつきり知ることが出來ないにしても、われ々の祖先の大部分すなはち天孫民族といはれてゐる人々は、蒙古、滿洲方面から來たものであることを知り得る。同時にわが國には大昔から天孫民族以外多くの民族がいたり交つて住んでゐたことをも知ることが出来る。

これら諸民族は最初のうちは、どの國でも見るやうに、攻めたり取つたりしたものであるが、だん／＼と時がたつにつれて弱い者は強い者に征服され、またはお互に仲よしになつてとう／＼天孫民族を中心とする大きな一國民となつた。これが所謂日本民族である。「我々の祖先」といへば普通この日本民族をさすのであるが、時にはせまい意味にとつて、單に天孫民族だけをさすこともある。この本でいふ



「祖先」もひろく見た日本民族のことであるが、時に天孫民族だけをさしてゐることもある。どつちを指してゐるかはその言葉の前後を見れば分るから、不安なしにすん／＼讀んでもらひたい。

まづ私は日本民族及びこれと關係の深かつたアイヌや熊襲の様子をのべようと思ふが、その前に傳説上の大人小人について少しく書いて見よう。

## 一 傳説の大人小人

アイヌ人の言ひ傳へによると、北海道の先住民は穴居をしてゐた小人だといふことである。この小人についてアイヌは次のやうに語つてゐる。私たちが日本々州を追はれて北海道の地に移つた頃は、露の葉の下に隠れ住む「コロポツクル」といふちがつた種族が居た。彼等は身長がひく／＼、鑿穴に住んでゐた。土器を作ることが

非常に上手であつた。しば／＼我々の家に来てその作品と食物とを交換したが、その時はいつも窓から手を入れるだけで、どうしても顔を見せなかつた。ところが或日のこと、いつものとほりコロポツクルの小人がきた時、アイヌが無理に引き入れて見たところが、それは女で、口のまはりと手の甲とに入墨をしてゐた。

コロポツクルはアイヌのこの仕打をいかつて、それから以後そこを引きはらつてわれ／＼とは近づかないやうになつた。今日アイヌの女子に行はれてゐる入墨はこの小人の風をまねたものであると。

又この人種は身體が非常に小さくて、一本の葦を運ぶに數十人あるひは數百人を要し、イケマ（莖が緑に少し紫がかつたつる草で、夏の末に小さい白い花をひらき、小指ほどの實なる。）の實を二つに割つて、その一つを船として漁りしたとさへ言はれ、或は一枚の露の葉の下に數百人立つたとも言はれてゐる。

今も北海道函館山のふもとに、大昔この小人が住んだといふ跡が残つてゐる。近頃までそこから、つばやわん、石斧や石づち等が出てきたが、これをアイヌの老人



にきくと、これらはいづれも大昔の小人が使つたものであると答へたさうだ。

支那の三才圖繪といふ本にも、この小人に似たやうな話を書いてある。「東方に小人の國がある。名を聾といふ。小人は長さ九寸。海鶴が過つて之を吞んでしまつた。それからこの小人どもは外へ出るときにはきつと群をなして歩く。」と。

もしこんな小人が事實居たしたらどんなにかはいゝものであつたらう。

ところが不思議なことには、我々の祖先に言ひ傳へられてある先住民は、アイヌに傳へられてゐるものとはまるで反對に、ひじやうに大きな人であつたやうだ。手長明神の話もその一つである。

皆さんは手長明神とはどんなものか知つてゐますか。この人はなんでも體がひじやうに大きく、山に腰をかけたまゝ、長い手をのばして大海から貝を拾うて食べたさうだ。そしてその殻が積りつもつてとう／＼貝塚となつて、後世まで傳はるやうになつたといふことである。今日所々で發掘する貝塚は、やはり大昔の人が貝を食べてその殻をすてた遺跡であるが、殻をすてた人が皆手長明神のやうな大きな人で



手長明神大海の貝を拾ふ



あつたかどうかはうたがはしい。

また今から千八百年ほど前に出来た日本の古い地理書で、常陸風土記といふ本があるが、その中にも蛤を食べる大人の傳説が載せてある。「平津(常陸國)の驛の西一二里ばかりの所に、大櫛と名づける岡がある。そこに大昔のこと一人の男が住んでゐたが、その人は體が非常に大きく、いつでも丘の上に坐つて大蛤をとつて食物としてゐた。ところがいつの間にかその食べた貝の殻が集つて一つの丘をなすやうになつた。時の人はその丘を大櫛の岡と呼んだ。その大人の足あとには長さ三十歩あまり廣さ二十歩あまりあつた。」としてある。

この外東京の代田橋に残つてゐる大多良法師の傳説や福島縣相馬郡の家老山の傳説、九州の所々に傳へられてゐる百合若丸の話などいづれも大力の大男であつたやうである。はたしてそんな大きな人が日本の大昔にたくさん居つたでせうか。

アイヌの傳説によると小人があつたといはれ、我々の祖先の言ひ傳へでは大人が居たといふことになるが、さてわれ／＼はこれをどう考へたら良いでせう。人類學者

や考古學者のしらべによると、日本に未だ天孫民族やアイヌ人種が來ない前、堅穴を掘つて家となし、貝を食べてその日を送つてゐた人間が住んでゐたといふことである。たゞしこれはコロポックルといふ全く別の種族であるとも言はれ、或はアイヌの一派であるとも言はれて、議論まち／＼である。しかしどちらにしても體は話ほどさう大きくもなければ、又そんなに小さくもなかつたやうである。

かうしてだん／＼考へて來ると、我々の祖先の言ふ大人と、アイヌのいふ小人は同じく學者のしらべた先住民をさしてゐるのか、それとも話どほりに全くちがつた大小の種族が居つたものか、いよ／＼分らなくなつて來る。これについては皆さんの研究を待つことにして、次の問題に移つて行かう。

## 二 アイヌと熊襲



アイヌは御承知のとほり我々の祖先と歴史上深い關係をもつてゐた種族で、昔は蝦夷といつた。今はわづかに北海道や樺太の一部に残つてゐるだけで、氣質もおとなしく人口からいつてもわづか二萬人足らずであるが、昔はなかく勢力のある人種であつた。北は樺太北海道はもちろん、奥羽から關東に及び、南は中部から近畿地方までもはびこつてゐた。それだから我々の祖先はしばしばこれらアイヌと衝突しなければならなかつた。神武天皇が大和御平定するとき手強くていかうしたのもこの人種の一派であつたと言はれてゐる。日本武尊を始め阿倍比羅夫、坂上田村麿等の蝦夷征伐、降つては源賴義、義家の奥羽平定等いづれもこのアイヌと關係した事柄である。かやうにしじゆう我々の祖先をなやましてゐたこの蝦夷は一たいどんな人間であつたらう。

皆さんは蝦夷の繪を見たことがあるでせう。ひげ猛者で眉が太くて目はくぼみ、手も足も毛だらけであるのを。それが槍を片手に目をきよろくさせて居る様は見ただけでもぞつとする。日本書紀といふ本にこの蝦夷の風俗が書かれてあるが、そ



我々の祖先

アイヌの祝宴(現今)

れは景行天皇が蝦夷を討たうとお考へになつて、まづ武内宿禰にその様子をおしらせになつた時、宿禰が答へした言葉である。

『東の夷の中で蝦夷がもつとも強うございます。男女一しよに住んで居りますが親子の禮儀作法もありません。冬は穴にこもつて夏は木の上に住んでゐます。毛の衣を着獸の血をすひ兄弟も疑ひあつてなかく親しみません。山に登ることは飛ぶ鳥のやうに、草の間を行くことは獸のやうにすばしこくあります。恩をうけてもすぐに忘れてしまひますが、一度自分の身内の者が殺



されでもしたらきつとしかへしをします。いつでも矢を頭髮の間にかくし、刀をふところところに佩はいてゐます。よく組くみをつくつて近くちかの村むらに攻め入り、畑はたけを荒あしたり人ひとを奪うばつたりします。撃うてば草くさむらの中なかにかくれ追おうて行ゆけば山やま深く逃にげこむ、なかなか仕し末まつにをへない者ものでございませう。かやうな様子やうすでありますから、今いままで一度ひとも我わが朝廷てうていの仰おほせをきいたことがありません。』と。

どんなに彼等かれらがねいまいで又厄またやく介かいな者ものであつたかが想像さうざう出来る。しかもこんな人ひとたちが日本にほんの半はん分以上じやうを占領せんりやうしてゐたこともあつたのだから、我々われらの祖先そせんの苦心くしんも一通りひととはではなかつたらう。

熊襲くまそはどんな人種じんしゆであつたか。

クマツは九州地方しゅうちうに住すんでゐた人種じんしゆの一ひとである。私わたくしたちは、景行天皇けいかうてんわうや日本武尊やまとたけのみことをなやました八十やそタケル、川上かはかみタケル、仲哀ちゆうあい天皇てんわう、神功皇后じんぐうくわうごうをお苦くるしめ申まうした北きたクマツを思おもふとき、彼等かれらが蝦夷えみにも劣おとらぬ強暴きやうぼうな者ものであつたらうと想像さうざうする。はたし

て彼等かれらは左様さやうに荒々あらくしい者ものであつたか。われ々の歴史れきしは、彼等かれらについての風俗ふうぞく習慣じゆんぐわんまた人情にんじやうの特別とくべつな記事きじを載のせてゐない。思おもふに彼等かれらは天孫てんそん民族みんぞくとごく縁えんの近ちかい者もので、體からだの様子やうすも平生へいぜいの生活せいかうも我々われらの祖先そせんとたいした異ちがひがなかつたのではなからうか。日本武尊やまとたけのみことがいきなり彼等かれらの宴會えんかいの席せきにいらつしやつても別べつに不思議ふしぎがらず、美うつくしい給仕人ききしにんが來きたといつて喜よろこんだ様子やうすから見みてもさう考かんがへられる。

朝鮮ちゆうせんの歴史れきしによると、彼等かれらは三韓さんわん(昔むかしの朝鮮ちゆうせん)と盛さかんに交通かうたうしてゐたやうである。とりわけ新羅しんらとはもつとも近いのでしじゆう往來わうらいしてゐたらしい。新羅しんらの歴史れきしに、倭わ王わうが來きたといふことを幾度いくどとなく書いてあるが、それは何れもこの熊襲くまその酋長しゆうぢやうをさしてゐるものなさうである。また彼等かれらの中には新羅國しんらこくの大だい臣しんになつた者もの、或あるひはさらに遠とほく支那しなと交通かうたうした者ものもあつた。

支那しなの歴史れきしには、「熊襲くまそは男女だんぢよともいれずみし、女をんなは頭あたまに物ものをいたゞく風ふうがある。多おほくの酋長しゆうぢやうが居みるが、その中なかには女をんなの酋長しゆうぢやうも澤山たくさんある。中なかにもカミカシ姫ひめといふ者ものはもつとも勢力せかりやくのある者もので、側そばにお仕つかへしてゐる女をんなだけでも千人にんみ居みる。だから日本にほん



の朝廷はもちろん遠く支那までもその名が知られてゐる。」としてある。  
かうしたいろくの事柄から考へて、熊襲は蝦夷と同じやうに全くの野蠻であつたとはどうしても思へない。ずるぶんと進んだ者もゐたに異ひない。クマンの住んでゐた地方の古墳から、當時使つた器物の立派なものが出て来たことは人々のよくきくところである。

かやうに強いしかも文明の程度の進んだ人種が、割に早くわれわれの祖先と仲よくしてくれたお蔭に、我々の祖先は西の方に對して心を安んずることが出来、又早くから朝鮮支那に往來して彼等の文化を取り入れることが出来た。もしもこの熊襲がかの蝦夷のやうにいつまでも日本朝廷に對抗してがんばつてゐたとしたら、たとひ神功皇后が三韓征伐をなされ戦争には勝つても、わが國と朝鮮支那との交通は長い間妨げられたであらう。

之を思ふときわれわれは日襲親善に骨を打つて下さつた景行天皇や日本武尊、また仲哀天皇や神功皇后をはじめ多くの我々の祖先に感謝すると共に、熊襲の祖先にもあるなつかしみと感謝の念が湧いて来る。

### 三 日本民族

アイヌと熊襲の間にあつてしかも日本全國をよくして行かなければならなかつた日本民族はどんな人種であつたらう。今の私たちに似てゐたものか、それともアイヌや熊襲のやうにひげ猛者でこはさうな人々であつたのだらうか。

皆さんは歴史の本や掛圖で、神武天皇、神功皇后、聖德太子その他多くの昔の人の繪を見たことがあるでせう。あれはもとく寫真でもなく又實物を見て畫いたものでもないから、全然誤りがないとは言はれないが、大體の様子を知るには差支ないものである。つぎのさしゑもまたその意味で出しておいた。それらの肖像で見ても、我々の祖先は今のわれわれと別に變つたところがなく、アイヌの連中とは自



らその様子がちがつてゐたやうに見える。自分で自分の祖先をのべ立てると手前味噌をならべるきらひがあるからこれ位にして、一つ外國人の見た祖先を紹介することにしよう。

日本が外國と交通し始めたのは應神天皇の時であるといふことが出来る。しかしその時は單に朝鮮から時には支那からわが國に來ただけで、わが國から向うへ行つたことはほとんどなかつた。もちろん全くなかつたわけではない。ところが推古天皇の御代紀元一二六七年に朝廷から始めて小野妹子を支那にお遣しになつた。以來わが國からも多くの人々が支那へ行くやうになつて兩方の交通はだん／＼盛になつて來た。その時支那は國號を隋と言つてゐたが、その隋の歴史に日本のことが書いてある。これが兩國交通後に於て、わが國のことが支那の書に見えた最初のものである。けれども不思議なことにはそれ以前に、魏志の倭人傳といふ本に日本のことがかなりくはしく載せてある。今その一部を書き出して見るに、

「倭人(支那では日本人のことを倭人、日本のことを倭國と呼んでゐた。)男子は大



人 武 の 古 左



人も子供も皆面や體にいれずみをしてゐる。それは昔夏后少康の子(支那の昔の人)が會稽に封せられた時、髪を斷り體にいれずみをして蛟龍(龍の一種でよく大水を起すといはれてゐる。)の害をさけたことがある。倭の水人は水に入つて魚介を捕へることが好きである。それで少康の例にならつて、彼等は大魚や悪い水どりをよせつけないために入墨をした。ところが後にはそれが一種の飾となつてしまつた。そして地方により身分によつてその模様までもちがつて來た。

また「下戸と大人と道路に相逢へば逡巡草に入る。」と。これは目上の人に道で出あつた時にはひき下つて土下座をするといふことであらう。又長生をすることを書いて「其人壽或は百年或は八九十年。」としてゐる。國情をのべた所には、「盜窃せず、訴訟少し。その法を犯す輕きものはその妻子を没し、重きものはその門戸及び親族を滅す。尊卑各差序あり。租税ををさむ。邸閣あり、國々に市あり有無を交易す。」とある。

何しろ兩國交通前の記事であるから、そのすべてを信用するわけには行かぬが、

幾分の參考にはなるだらう。隋書になると可成り明らかになつてゐる。

「倭國では男子は裙襦を着る。たけ短く袖も小さい下着である。高貴の人は漆をぬつた沓をはくが、普通の人は跣足である。倭國にはもと冠がなかつた。その時は髪を二つに分け兩方の耳の上になれてゐた。隋の時はじめて冠をつくつた。錦あるひは色絹をもつて造り金銀の飾りをしてゐる。武器には鎧、刀、槍、弓矢などがあつて、鎧を造るには皮に漆をぬつたものを以てし、鏃は骨でしてゐる。

倭國の刑法によると、強盜は死刑に處せられ、盜人は辨償してゆるしてもらひ、もしそれが出來ない時には奴隸となる。その他罪の輕重によつて流罪にしたり又は笞を加へたりする。白狀しない者は、大きな木で膝を押しつけ、或は熱い湯の中に手をつつこまし、あるひは蛇をかめの中に入れてこれを取らせたりする。理のまがつた者は咬まれる。

倭人は性恬靜(やすらかにして落着いてゐる。)にして訴訟に誤りがない。盜賊が少く、兵士もあるが戰爭などはない。音樂を好み樂器としては五絃琴、笛等がある。



もと文字はない。百濟から佛教を入れて以來文字も始めて傳つた。佛教も敬つてゐる。」と。

隋の次の唐の歴史には、「倭の國は今や支那文字を學び、倭といふ名をきらつて日本と改めた。なせ『日本』といふのだときけば、使者は日の出るところに近いからだと答へた。

日本には女が多く男が少い。中には文字をよく知つてゐる者もある。多くの者は佛教を敬つてゐる。百姓は皆堆髻で、冠帯なく（髪をゆうてゐて、衣冠束帯がないといふこと）、又一般に跣足である。貴人になると錦帽をかむる。婦人は純色の服を着、髪はうしろにたばねて垂れ、銀で作つた花の簪をさしてゐる。その枝の數によつて貴賤の等級がわかる。總體から見て着物の制度は新羅の國と似てゐる。」と記し、また

「則天武后の七〇一年に文武王が立つて年號を大寶といつた。その大寶三年に王の大臣である、朝臣真人粟田をして方物を奉らしめた。真人は身に禮服を着け、その態度はいかにも溫雅であつた。その上經史を讀み支那の文章を作ることが出來た。則天武后は彼を麟德殿にまねいて宴をたまひ、司膳卿といふ位をさづけられた云云。」の記事をのせて、真人の禮儀正しく且つ學問もすぐれてゐたことを賞めてゐる。

ところがまた、「日本人は自矜大にして實を以て答へず、中國疑ふ。」といつたやうな記事もある。これは日本人は自ら高ぶつて自分の國のことゝなれば實際よりも大げさに言ふくせがある。だから我々中國（支那）の人は彼等の言ふことを一々信用することが出來ないといふ意味である。一方に於てやすらからで落着いてゐた我等の祖先は、他の一面に自分の國を、また自分を卑し下げすむことなく、どこまでも威風堂々と彼等に對したらしい。

次に西洋人の日本人觀を少しくのべよう。ヨーロッパ人が始めて日本に來たのは天文十二年紀元二二〇三年のことである。印度のゴアといふところを根據として盛んに東洋諸國を往來してゐたポルトガル人が、大隅國種子島に來て鐵砲を傳へたのが



その始りである。それから六年たつた天文十八年に、フランシスコ・ザビエルといふ宣教師が鹿兒島に上陸し、わが國に始めてキリスト教を傳へた。その頃このキリスト教のことを天主教とよんでゐた。ザビエルが鹿兒島から印度にあつた天主教の教會本部に差出した手紙の中に日本人のことをくはして書いてある。その一部をここに書き出して見よう。ザビエルがこの手紙を書いたのは鹿兒島に上陸してから二ヶ月ほど後のことである。

「第一自分の考では、日本人ほど善良なる性質を有する人種はこの世界にきほめて稀であると思ふ。彼等は至つて親切で、うそをつき偽りをいふやうなことはかつて聞いたことがない。且つ甚しく名譽を重んじ、むしろ彼等をして名譽の奴隸たらしむるに至つたほどである。國中貧民が非常に多いけれども、ヨーロッパ諸國のやうに貧乏を以て恥辱としない。場合によつてはむしろ之を名譽としてゐる。また門地家系を重んじ、貴族はどれほど貧乏しても決して平民などとは結婚しない。士以上の身分ある者は滿十四歳をこえる時はいかめしく大刀をさし、人によつては大小兩

刀を腰にする者がある。彼等はすこしの無禮といへども容赦することなく、やゝもすると直ちにこの大刀に訴ふるのである。

日本人は殊にバクチをきらふ。よし自分は勝つたとしても、自分の勝つたゞけ相手が損をしたわけだから、バクチはもつとも不道德な行と見なされてゐる。盗みをしたものは悉く死刑に處せられるためであるか、盜賊が非常に少く、國民一般何事に限らず正直を尊ぶ風がある。

この國では僧侶のことをボンズといつてゐる。彼等は大いに俗人と異り、至つて不品行で常に悪いことをしてゐるけれども、人々は少しも之をとがめないのみならず、かへつて彼等を尊敬してゐる。……彼等は口には殊勝らしくお經をととなへたり教を説いたりするけれども、實際は日本國中もつとも不道德なる者の團體である。……」

この外にまだ澤山あるが、あとは僧侶の有様を一そうくはしく説き、最後にこの國にキリスト教をひろめることの必要とその方法を書いたものである。滞在わづか



二ヶ月の見聞としてはすぐれたものである。

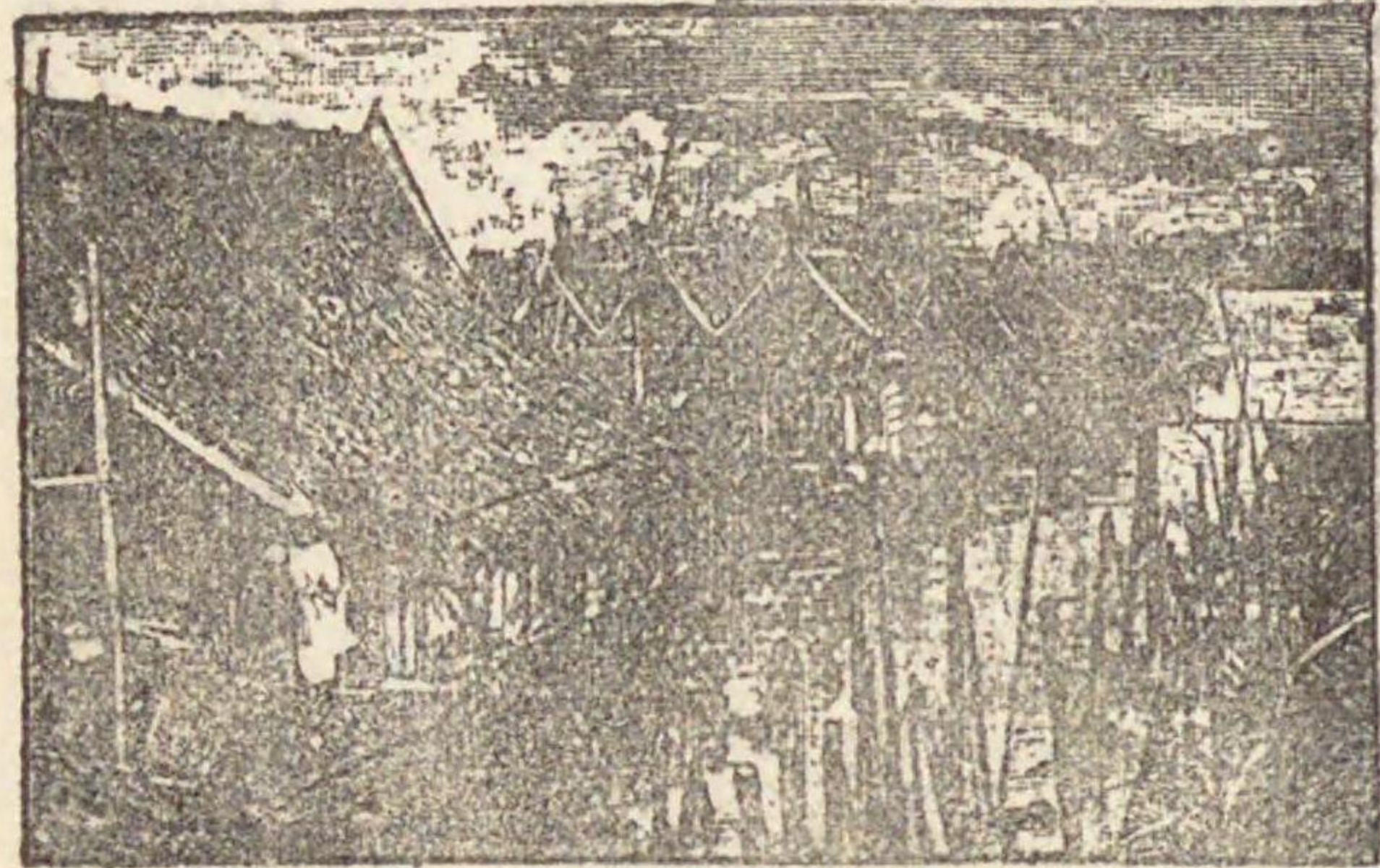
また今から二百三十年ほど前、フランス人ジャン・クラッセといふ人の書いた「日本西教史」に、

「日本人は多く強健で戦闘にたへ、その容貌はオリブ色であるが、支那人は之を白人と言つてゐる。身長が長大で精神は活潑に、胴まはりは中等に位し、北方人には及ばないけれども機敏なことは之にまさつてゐる。ひげの甚だ長いものがある。頭髪は青年はその前面を剃り落し、職工と農民はその半ばを剃り、貴族はすつかり残して後部に結びこれを尊ぶの風がある。

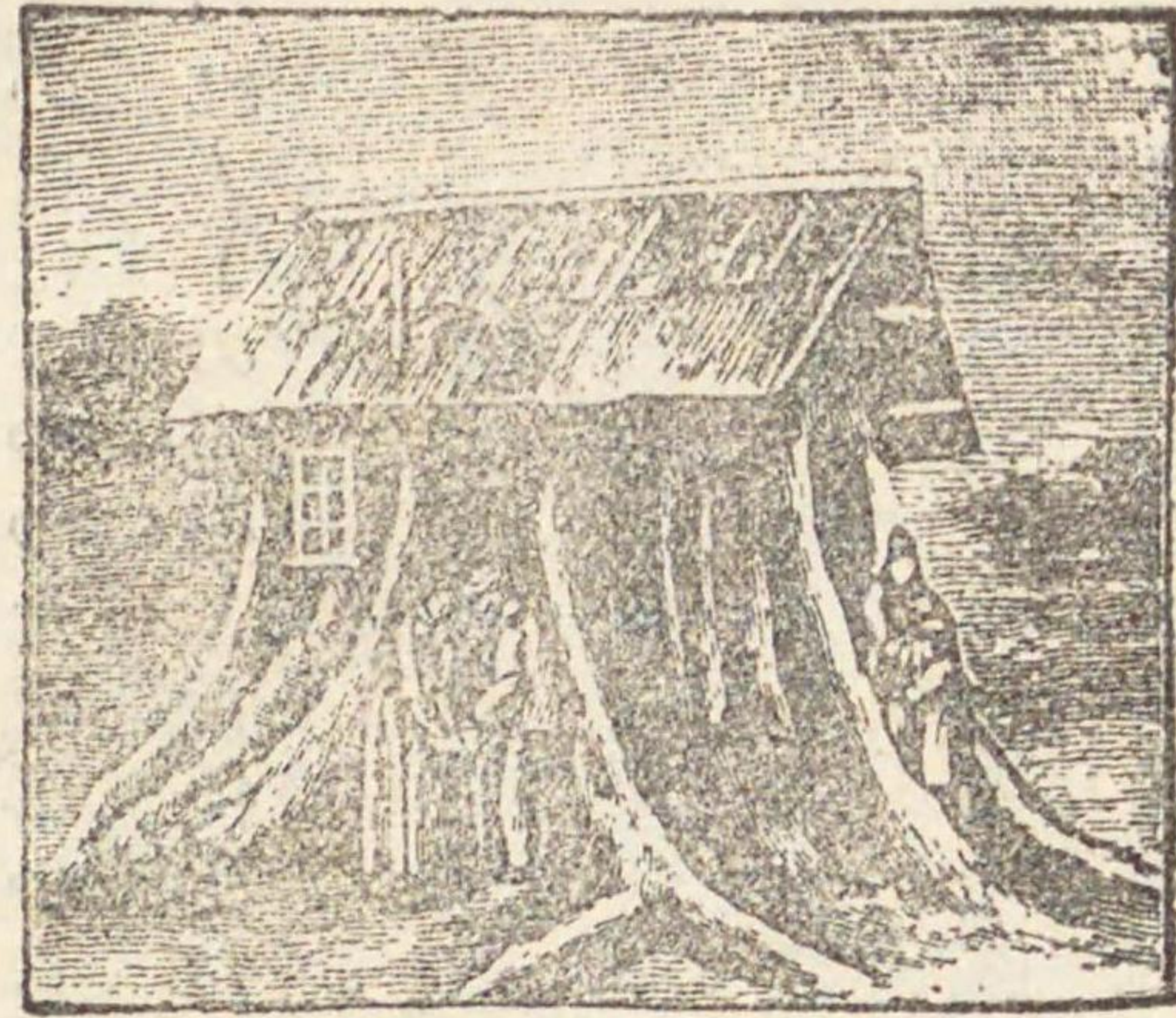
日本人は物に堪へ忍ぶ驚くべき美質がある。飢渴寒暑を物ともせず勤勉に働いてゐる。商人などにも粗暴の舉動がなく實にていねい親切である。職工や百姓などの身分のいやしい者までがさうであるから、知らない者は彼等が皆宮中で教育を受けたのではないかと思ふ程である云々。」と載せてある。あまりほめすぎたところや多少事實のあはない點もあるが大體よく表してあると思ふ。

かやうに我々の祖先は、内に残つてゐる書きものから見ても、又東西兩洋の外國人の目にうつつた記事から見ても立派な性格の人であつたと言へる。その子孫たるわれわれの光榮と責任また大なりと言はねばならぬ。





樹上家屋及び水上家屋



切株の家

住居

衣食住、この三つは人類の生活にとつて必要かくべからざるものである。けれどもその様式は必ずしも一定しない。人種により時代により様々である。今これを住居だけについて見ても穴に住む者があるかと思へば樹上に居をかまへるものがあり、又れざく水上に家を建て住む者もある。左圖は大洋洲にあるパプア島の土人の樹上家屋と、シヤムを流れてゐるメナム河の水上家屋を示したものである。何と念の入つ



た家ではないか。又同じ陸上建築にしても、掘立小屋もあれば五十何階といふすばらしい摩天閣もあり、また中には繪のやうに、大木の切株を利用した妙しい家屋もある。

それではわれ々の祖先はどんな家に住んだでせう。

### 一 穴住ひ

文化の程度が割合に進んでゐたと言はれてゐる我々の祖先は、住居についても相當に工夫したであらう。古事記に、「イザナギ、イザナミの二柱の神は、天の浮橋といふ雲の中に浮んでゐる橋の上にお立ちになつて、神さま方からいたゞいた矛でもつて下のところ／＼してゐるところをかきまはし、さつと、**引上げ**になつた。するとその矛の先についてゐた潮水がぼた／＼と下へ落ち、固つて、一つの小さな島にな

つた。お二人はさつそくその島へ下りていらつしやつて、そこに天の御柱を立て、御殿をお造りになつてお二人ともお住ひになつた。」として、何よりもさきに住むべき御殿をお建てになつたことが書いてある。スサノヲノ尊のことを書いたところにも、「尊は八またの大蛇を退治なされ、助けてあげたクシナダ媛とそのまゝ出雲の國にお住ひになるお約束をなされた。そこで良い場所を方々さがし歩いて、とうとうスガといふ所を見たてられ、そこへ大きな御殿をお建てになつた。」としてある。

ところが一方穴住ひをしたといふ言ひ傳へも残つてゐる。古くは大國主命が一時石見の志豆の岩屋にお住ひになつたと言はれ、降つては神武天皇の御子タキシミ、ノ尊が土窟にお住みなされたといふことが歴史に見えてゐる。かやうに高貴の方さへ穴居をなさることがあつた位だから、一般の人々が穴住ひをすることは何も妙しいことではなかつたらう。古く日本いたるところに土蜘蛛と呼ばれる種族が居たやうだが、これなどはたしかにその名の示す如く穴住ひをしてゐた者にちがひない。

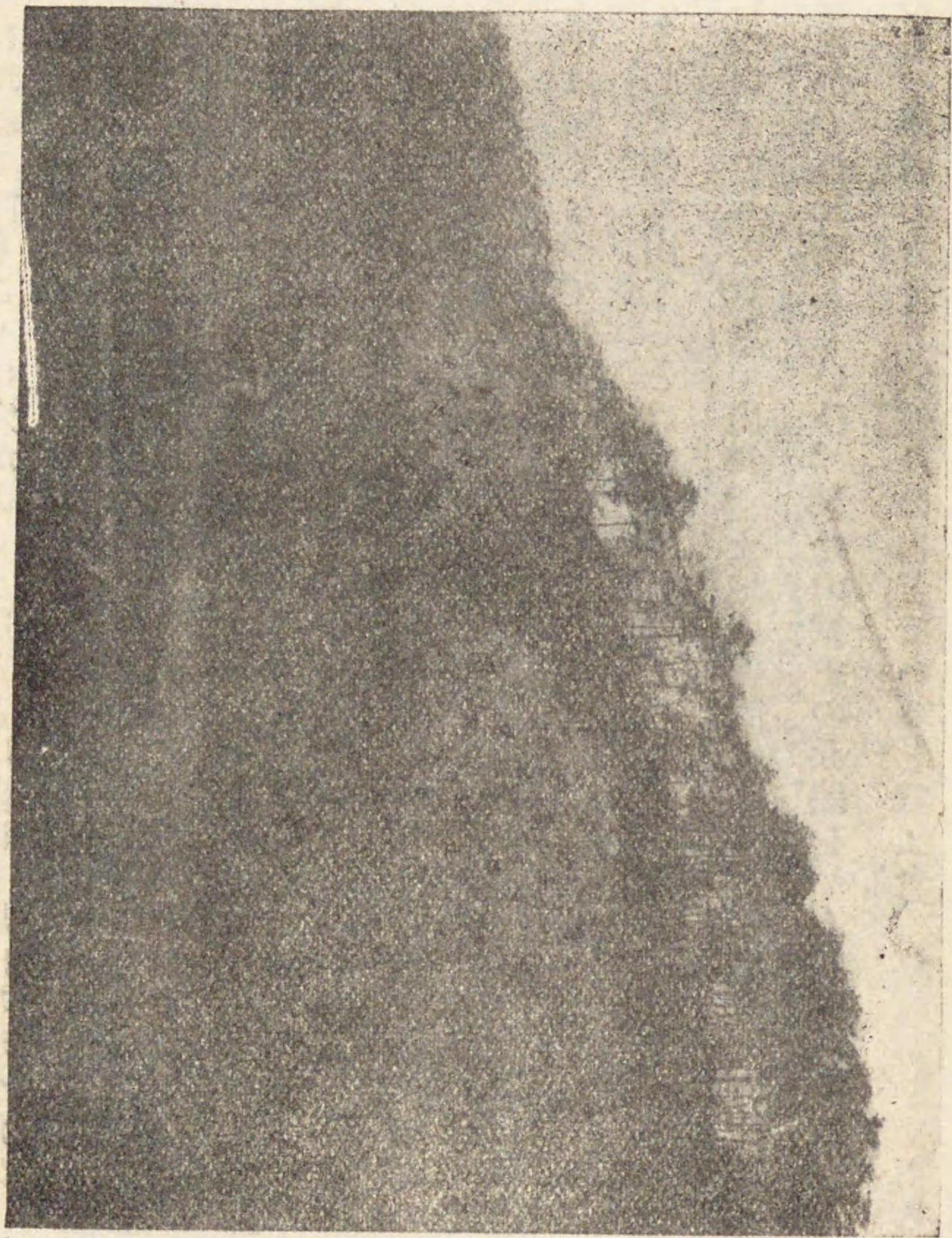


かの天照大神のお隠れになつた天の石屋も或は大きな岩を掘りわつてこしらへた住居ではなかつたらうか。

穴居の仕方二通りある。一は堅穴で他は横穴である。堅穴は北海道や奥羽關東の一部から多くの遺跡が發掘され、又現に北海道色丹島のアイヌや樺太のアイヌに堅穴生活をしてゐる者があるから、それらによつて我々はほゞ昔の様子を推察することが出来る。

彼等アイヌの堅穴はまづ二尺から四尺ばかりの深さに穴を掘る。その中に木の柱を立てて半ばを地上に出し、四方をかやか板でかこひ、屋根をふき、その上に土を一、二尺ばかり置いてある。大きさは二間に三間位から四間に五間位のものまである。昔の人の堅穴もほゞこれと似たものであつたらう。

横穴のあとには餘り知れてゐない。埼玉縣松山の近くに「吉見の百穴」といふのがある。さし繪に出してある寫眞がそれである。岡の中腹に蜂の巢のやうに見えるのが穴で、今外にあらはれてゐるものだけでも二百三十ほどある。この穴は長い間土



吉見の百穴



や木や草に埋れて誰もこゝに穴があらうなどとは夢にも思はなかつたが、明治二十一年に坪井正五郎博士が発見されたものである。最初博士が人夫をさしづして掘つて見たところが二三の土室があらはれた。これがこの穴の生れたそもゝの源で、だん／＼ひろく掘つて行くうちに澤山の穴のあることを知り、とう／＼二百三十といふ多数の横穴を見出すやうになつた。

穴の大きさはまち／＼で、一間四方位のもあれば二三間四方に及ぶものもある。けれども五六間四方以上にもわたるやうな大きなものは見當らない。一般に入口は小さくて中は廣くなつてゐる。

さてかうして掘り出すことは掘り出したものゝ、一體この穴は何であつたかといふことについて色々の意見が出た。土地の傳説によると、昔火の雨が降つた時に村の人が逃げかくれた所ともいひ、又松山城主の兵器をかくし藏めた所であるとも言はれてゐる。學者の方でも穴住ひのあとであると言ふ者、墓のあとであると唱へる人、さまざまの見方があつて今だに定つてゐない。發掘者である當の坪井博士は、

この穴はもと大昔の人の穴住ひのあとであるが、時には之を墓として後の人が利用したこともあつたゞらうと言はれてゐる。どちらが正しいかはこれからの研究にまたねばならぬ。

日本三景の一つである松島に瑞巖寺といふ大きな寺がある。その寺のわきに今も澤山の石室が残つてゐる。間口と奥行が一間半から二間位、高さが一間以上もある大きな頑丈な横穴である。これも祖先が穴住ひをした跡であると言はれてゐるが、これは大昔の祖先が住んだのでなく、ずつと後の世になつてお寺の坊さんが修行をするためにこもつたものであると思ふ。

かやうに太古の人の住んだ横穴のあとは、今のところわれ／＼にあまり多く知れてゐないが、ともかく我々の祖先のうちにその昔穴住ひをしたことがあるのは事實らしい。そして堅穴にしても横穴にしても、その場所は吉見の百穴でも見るやうに大てい南向きの小高い岡の中腹である。しかも川の流にのぞんだ所が多い。これは低い所だと敵を防ぐためにも不便であるし、それに大雨のあるたびに洪水の心配



もしなければならぬからである。といつてあんまり高い所だと水や食物を得るために不便だから、どちらにも都合のよい小高いところを選んだわけである。南向きにしたのは今もわれわれの家が大方南向きになつてゐるやうに、それは冬暖く夏涼しいからである。

しかし穴住ひはもと／＼寒さを防ぐためであるから、彼等は必ずしも年中こゝに居たわけではない。暖いときや天氣のよい時は外でくらし、寒い時、雨や風の時あるひは晩をこゝで過したのであらう。

### 二 太古の家

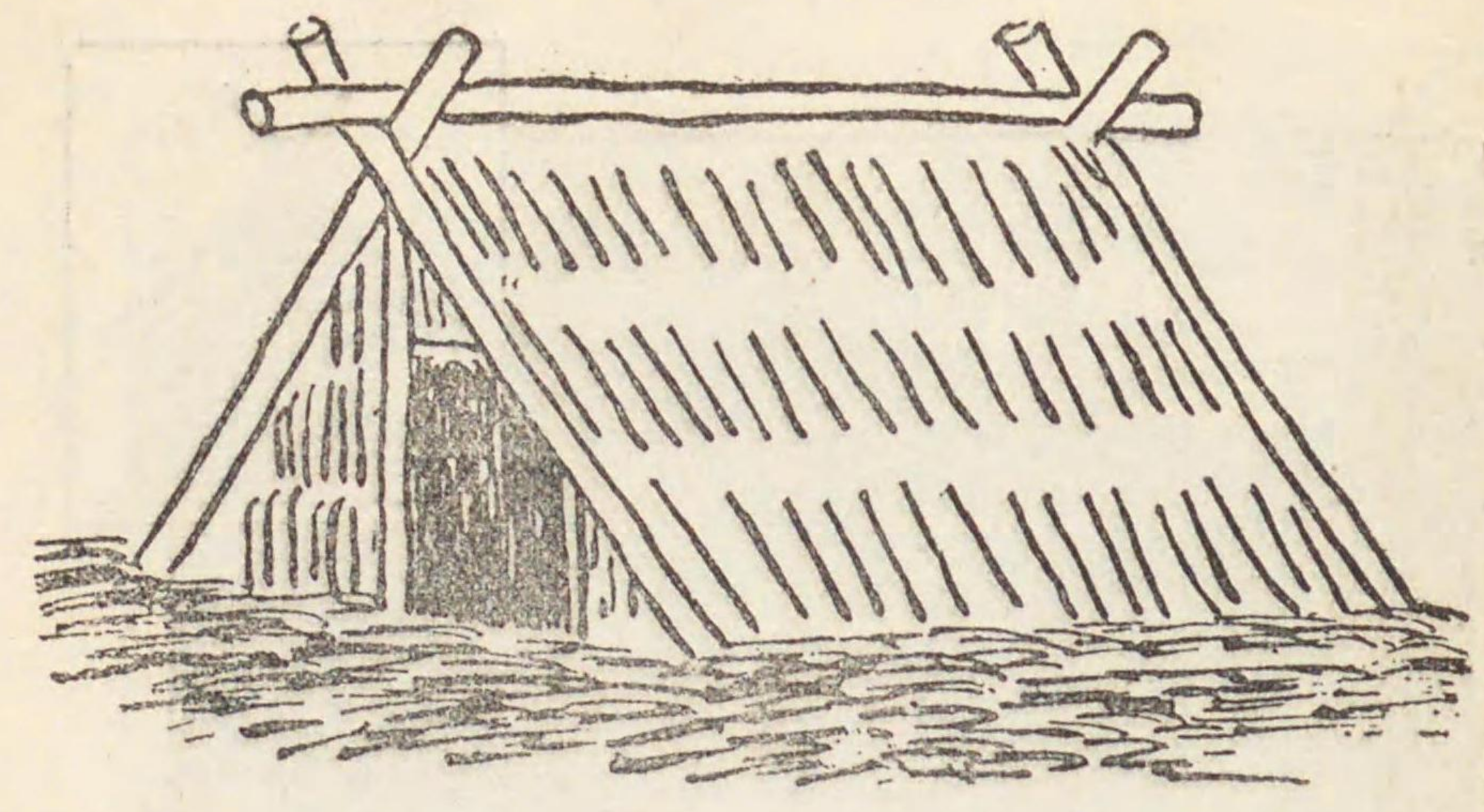
よし我々の祖先に穴住ひをした者があつたにせよ、それは一部の人であつて、大部分の者はいづれも相當な家を建てゝすんでゐたのである。それではその家はどんなものであつたか。

なものであつたか。

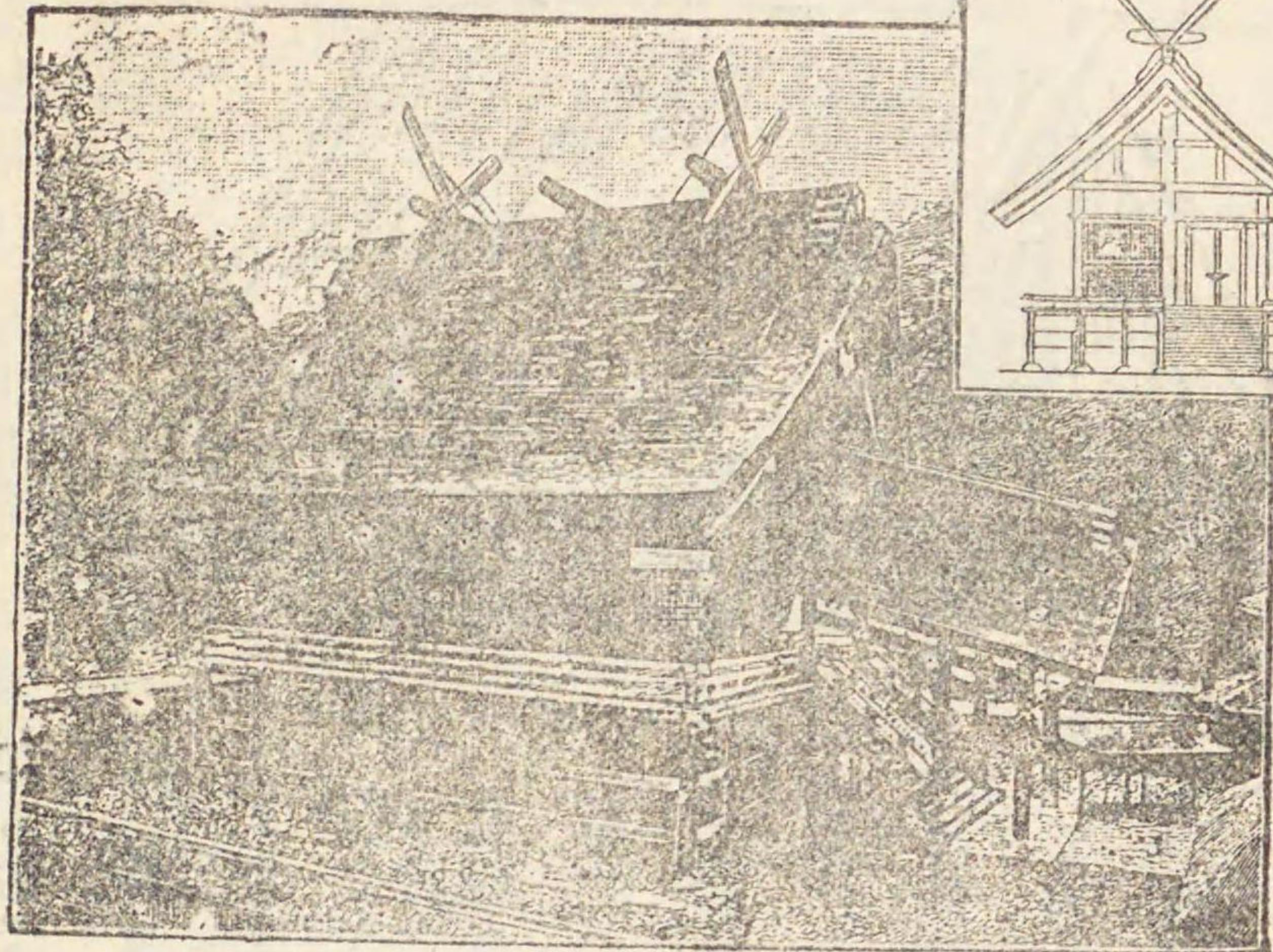
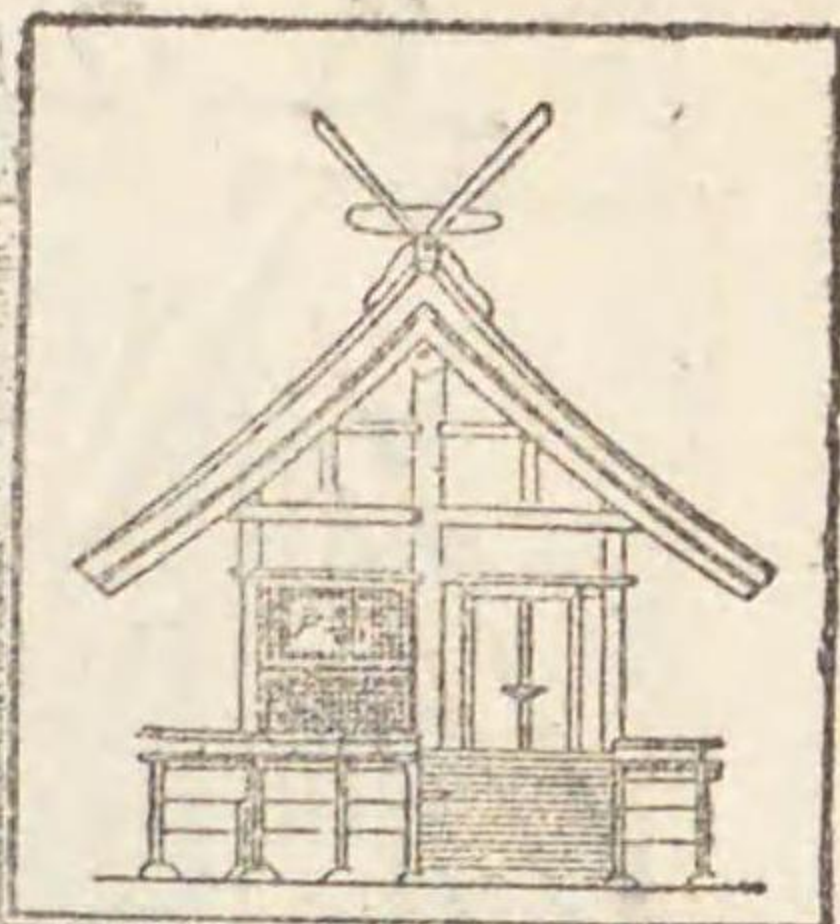
建築家や歴史家は埴輪やその他の遺物、ことに神社建築の古い様式の上から見、大昔の建築を次のやうに考へてゐる。最初二本の柱を斜に組合して藤がづらか何かで結びつける。それを二つ並べてそれに横木を渡す。それを棟にして屋根をかやかわらで葺く。入口を横の方からあける。これで粗末ながら一つの家が出來上つたわけである。この形式を天地根元造りといつてゐるが、今はほとんど之を見ることが出來ない。

この建て方によると少し屋根が低過ぎて困る。それでそれをそのまま柱で持ち上げること

住居

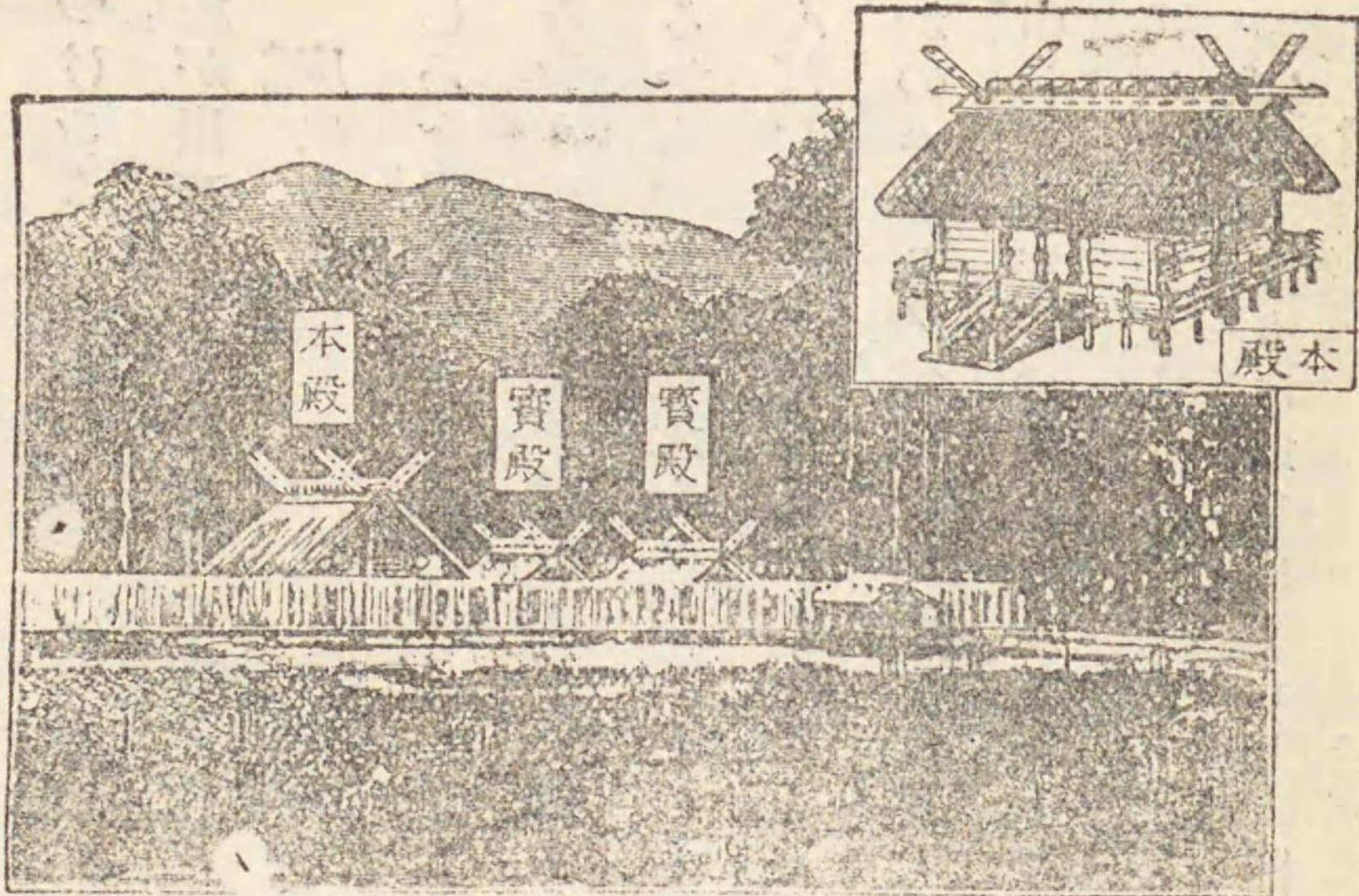






にした。これが大社造りの起りで、  
 出雲大社は今でもこの形式によつて  
 造られる。御承知の通り出雲大社は  
 もと大國主命がふだんお住ひなさ  
 れたところで、それを後になつてそ  
 のまゝ宮としたものである。だから  
 當時の住居を知るにはもつとも都合  
 のよいものである。

大社造りよりもつと後になつて  
 あらはれたのが、神明造りである。  
 それは伊勢神宮の様式で、柱は圓く  
 掘立て、千木は高く聳えかつを木が  
 棟の上に置きならべてある。入口は

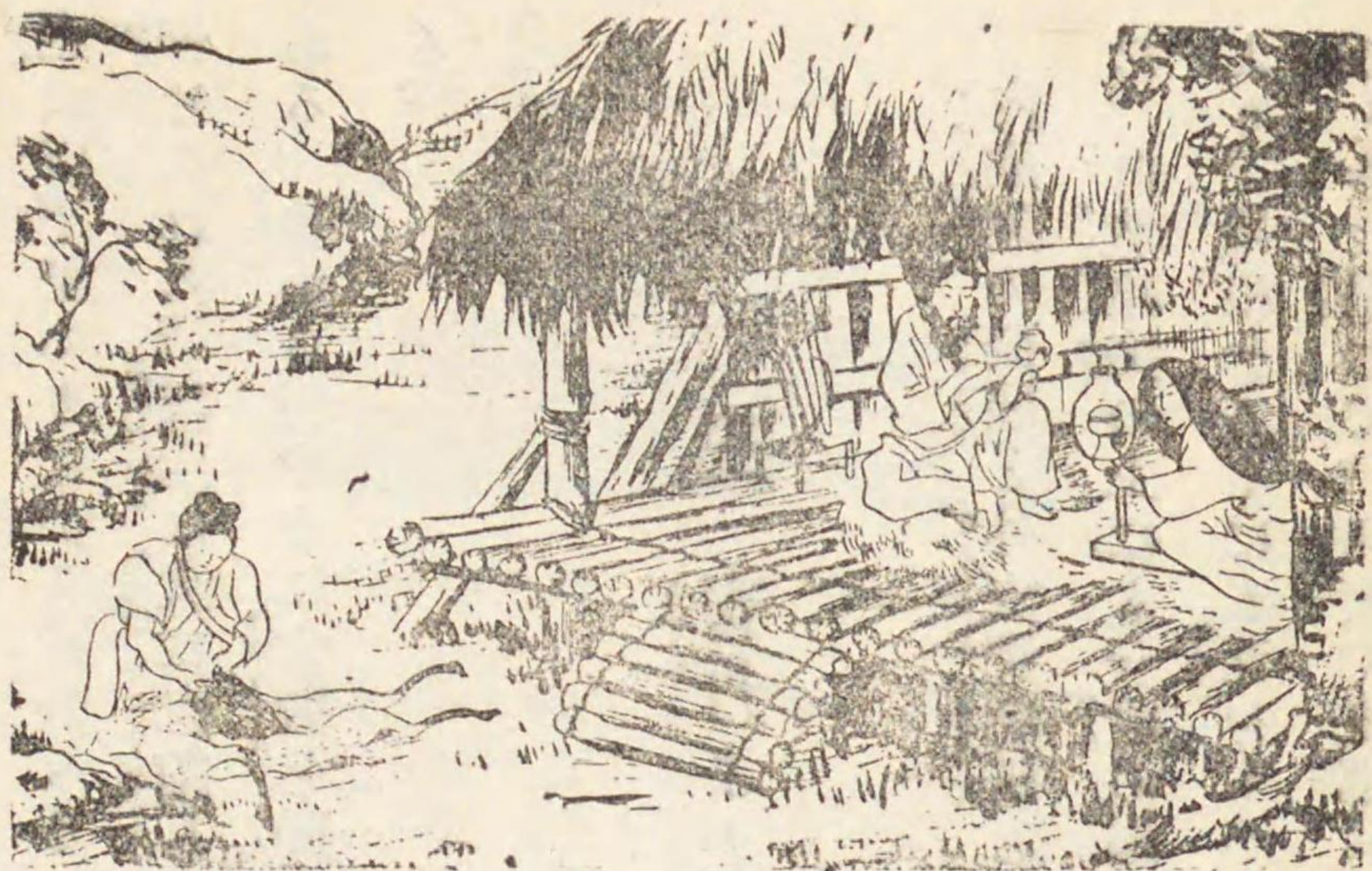


皇 大 神 宮  
 これまでのやうに横にあるのではなく、屋根  
 をふき下した方についてゐる。もつとも伊  
 勢神宮ははじめから神社として造つたもの  
 であるから、一般の住居の様式とは多少ち  
 がつたところがあつただらうと思はれるが  
 大昔はまだ神社と宮殿との建築はそれほど  
 著しい區別がなかつたやうであるから、  
 やはり我々はこれによつて昔の住居を知る  
 ことが出来る。この外住吉造りといふ住吉  
 神社の様式もあつたと言はれてゐるが、形  
 のことはこれ位にして、少しく内外の設備  
 についてつけ加へて置かう。  
 壁はつけないのが普通であつた。しかし



時にはかや又は草わらでつけたり、或は木の枝を並べた簀のやうなものに泥をぬりつけることもあつた。これが今の土壁の始りである。とびらは今のやうに薄い軽い板が出来るまでは、木の枝を組んで造つた簀のやうなものやむしろをつかつた。床はもとほなかつたやうである。だから寢床にしても、ただ地上に菅であんだむしろを敷く位であつた。それがだん／＼進んで来て、地上から一段高めた床をつくるやうになつた。けれどもそれも鋸を使つて板にすることを知らない時のことであるから、ただ丸木を並べ、それをかづらで結びつけるだけであつた。敷物は菅であんだたゝみが用ひられた。ごく高貴の方は皮や絹の疊を敷くこともあつたらしい。かのホヲリノ尊が海の神の御殿に行かれたとき、海の神は急いで命をお宮へお通し申し、あじかの毛皮を八枚重ねて敷き、その上へ又絹の疊を八枚重ね、それへ坐つていただいたといふことが古事記に見えてゐる。

家のまはりに垣をめぐらし、門をつくることは古くから行はれたらしい。スサノヲノ尊がヤマタノオロチを退治なさる時に、垣をつくりめぐらし、その垣には八つ



太古の家庭

の門を造り、門毎にさすき（今のさじきのやうなもの）を結び、そのさすき毎に酒ぶねを置いたとある。

以上のやうに太古の住居は貴賤を通じ、きはめて簡素なものであつたと思はれるが、なほ身分によつてその規模構造の上に多少のちがひがあつた。應神天皇がある時河内の國へ行幸なされて、日下山にお登りになつたことがある。その時ふと堅魚木を屋上にあげた家のあることをご覧になつた。天皇はただちに家來に言ひつけて誰の家であるかをおきかせになつた。家來がしらべて見ると、それは志紀の大縣主某の家であることが分つた。天

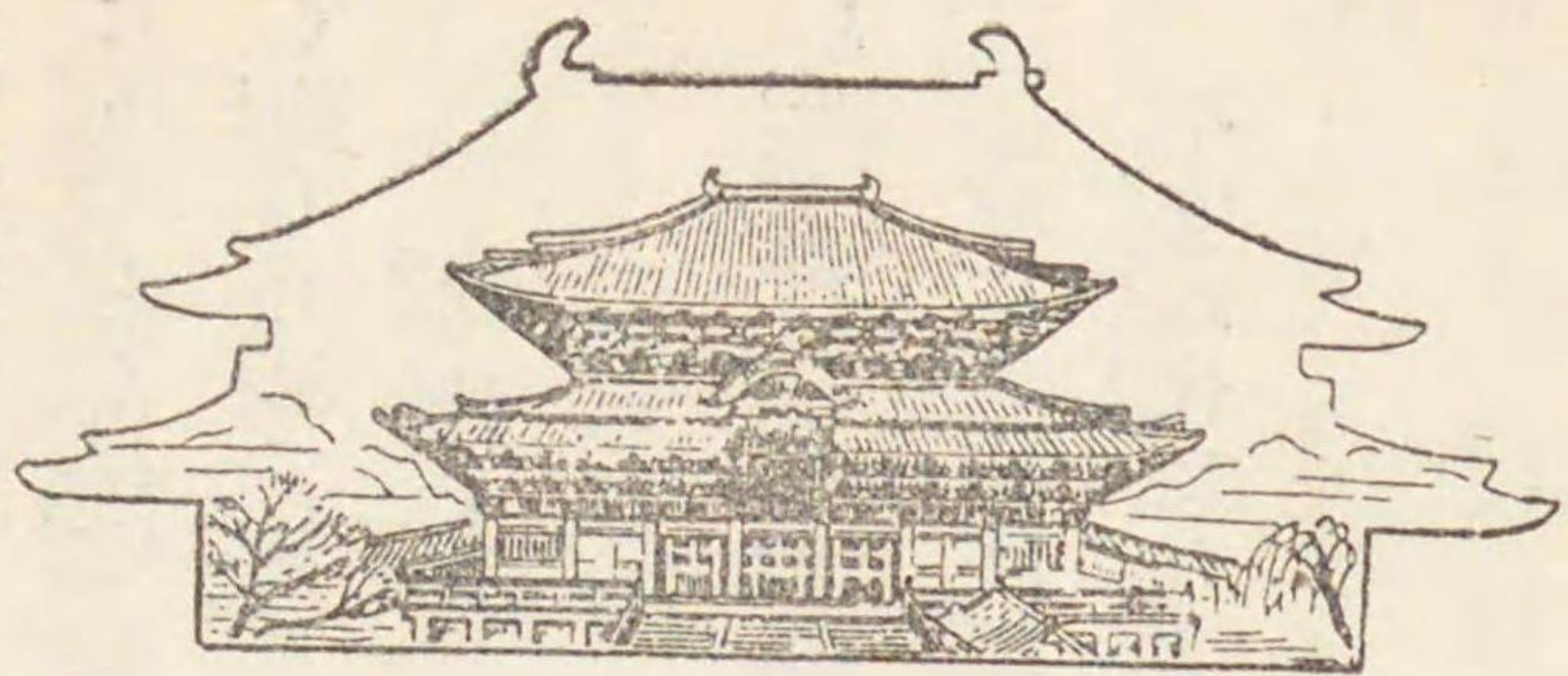


皇は堅魚木を屋上にあげることには天皇宮殿のきまりである。それなのに志紀の大縣主は臣下でありながら、かゝることをするのは不敬である、早速その家をこはせと仰せられた。縣主は大に恐縮し、家を天皇に奉つて罪をゆるしていただいたことがある。昔からかやうに宮殿と民家は、その造り方にも一定のきまりがあつたと見える。

### 三 青丹よし奈良の都

内國運の發展と外支那朝鮮との交通は、我が國の文化をいやが上にも進めてくれた。自然建築の上にも一段の進歩を見ることが出来た。板や釘を用ふことはもとより、屋根をふくにも瓦をもつてすることになつた。もつとも最初のうちは寺を造るときに限つて、印度や支那にあるものゝやうに瓦で屋根をふいたが、その外の建

物は皇居をはじめ一般の民屋もすべてもどほりの茅ぶきであつた。しかるに皇極天皇が飛鳥の宮をお建てになると、始めて大極殿を瓦葺きとし他は板ぶきとせられた。これから貴人の家もこれをまねて瓦屋根や板屋根とするものが多くなり、奈良時代になるといよゝ支那風の新しい寺院や住宅がふえてきた。奈良の東大寺はその中でももつとも宏壯雄大なるものであつた。圖はその大佛殿である。大佛殿は建てゝから二度火災にかゝり、今のものは約二百年前に建てたもので、高さ十五丈六尺實に世界第一の木造大建築物である。圖中の外の輪廓は奈良時代（美術史上では特に天平時代と名付けられてゐる。）の大佛殿の



東大寺の大佛殿

大きさを示したものである。

聖武天皇はまた、「都は帝王の居であり、萬國の使の朝する所であるから、これが莊麗でなくては威徳をあらはすことが出来ない。それだから五位以上の役人及び



一般の者でも資力のある者は瓦舎をかまへ赤白をぬらしめるやうにしたい。」とおすゝめなされた。それで貴族高級の官吏富者などの家は寺院と同じく大てい瓦葺となり、とくに奈良の都には青い瓦で屋根をふき、赤い繪具で柱などをぬつた家が多く建てられて甚だ美しかつた。されば當時の人は

青丹よし奈良の都は咲く花の

(小野老)

にほふが如く今盛りなり

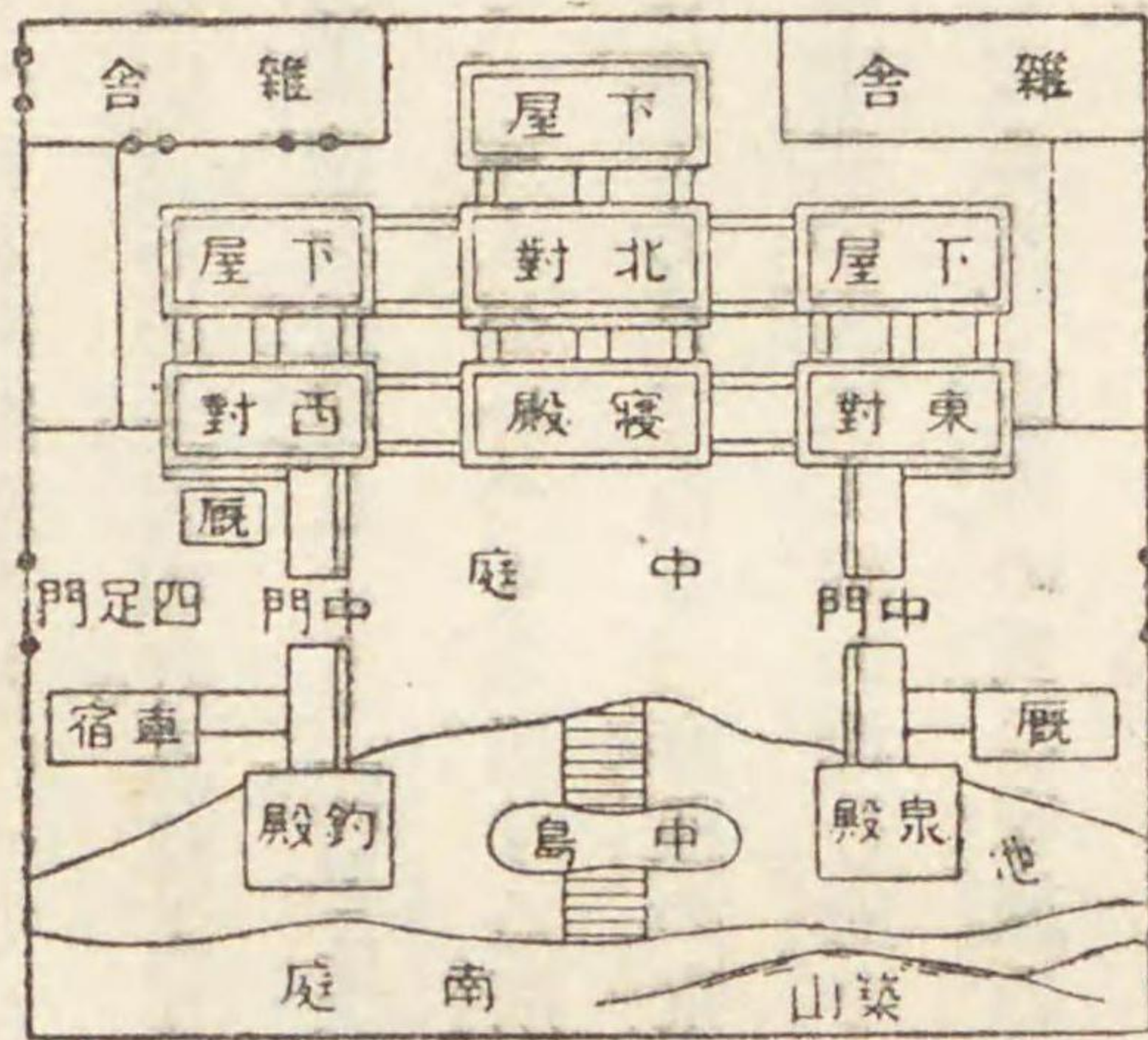
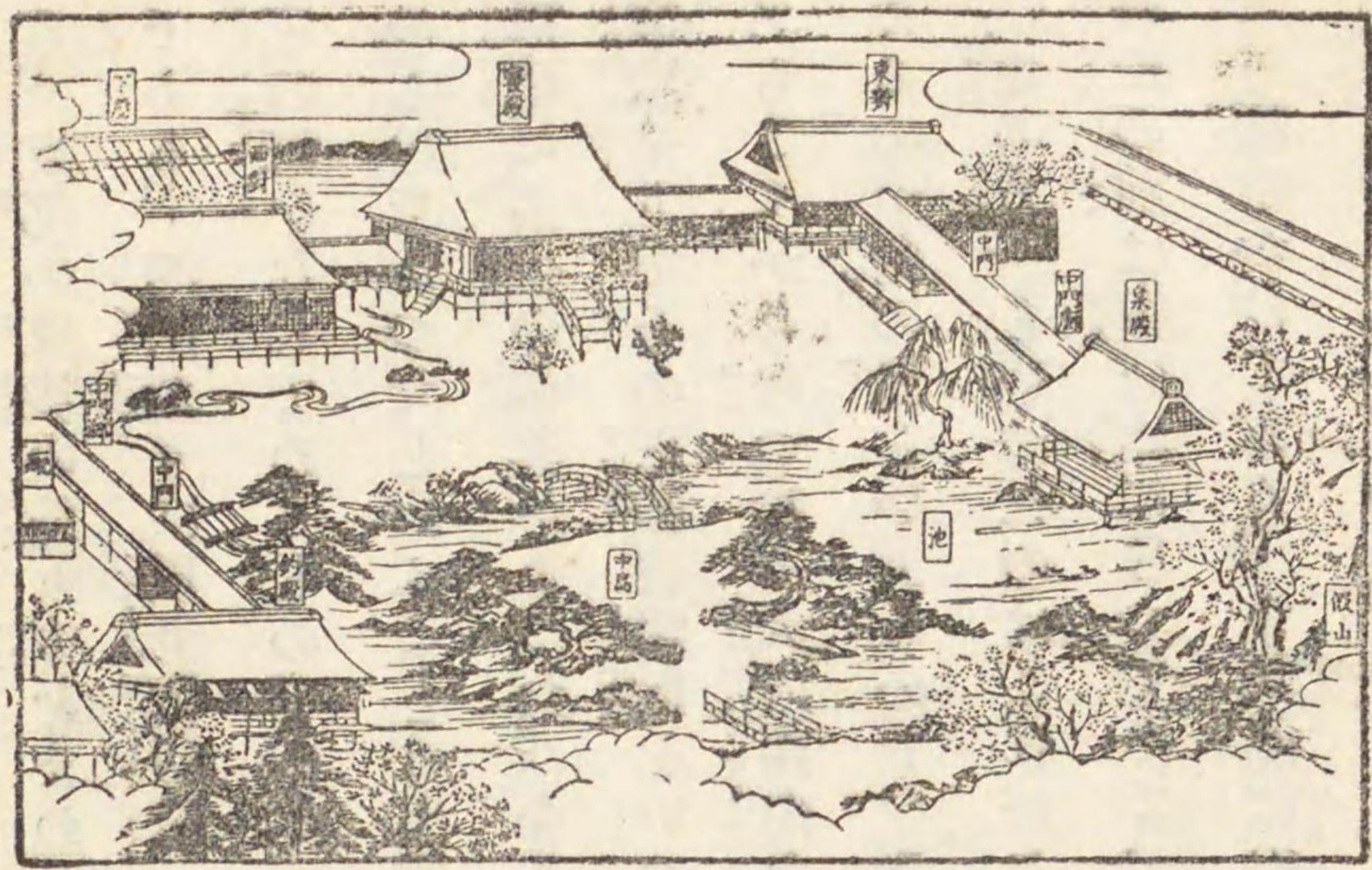
と歌つてその繁華を讚美した。

しかしそれは都の一部の有様で、地方へ行くとやはり昔風の茅ぶきが多かつた。平安時代になるとどちらにもさらに一段の進歩を見るやうになる。

### 四 寢殿造

すべてに華美せいたくをきはめた平安時代は、第宅にもその様子がよく現はれてゐる。支那の家屋の造り方をまねた四阿造りといふのが、この時の貴族の家の建て方である。四阿造りは後世御所造り又は寢殿造りと稱するもので、今のわれわれの住宅の源をなしてゐるものである。もつとも寢殿造りといつてもすべての家が同じ型のものであつたといふことは出来ない。その主人の好みにより考へによりそれぞれ構造に多少の相異があつた。今その大體を説明しよう。圖と比べて讀んでごらん。寢殿造りでその正殿は寢殿といつて、主人がいつも起臥する所である。寢殿造りの名もこゝから起つた。大方南向きに建てられてゐる。寢殿の東西北の三方に建つてゐるのが對の屋といふもので、その中北の對は主婦の棲む所である。昔貴人の妻を「北の方」といつたのはこれがためである。東西の對は家族の居る所である。寢殿の前は広い庭になつてゐて、數十歩をへだて、池がある。池には中島を築きそこへ橋をかけてある。また池にのぞんで泉殿釣殿をつくり、夏の納涼、秋の觀月等に使ふやうにしてある。





寢殿造り

これら諸殿は皆廊(わたどの)をもつて通じてある。寢殿と池との間にある中庭、池の外にある内庭にはそれ々々時節に適した草花を植ゑて四時の眺をほしいまゝにし、又池のほとりには築山をこしらへ色々の好みをほどこして散歩をなすに適するやうにしてある。第宅のまはりは垣でかこんである。垣には土を築き上げたのと板を並べたものがある。門は西面に四足門(柱を四本立て、屋根をふいた門)を開き、釣殿と西の對との間にある廊をつきぬけて寢殿の前に出るやうにしてある。屋根は檜皮をもつてふいたのが一番上等で、これについては板葺があり、あし、茅、わら等でふいてあるのは賤しい者の家で、瓦ぶきはやはり寺院に多かつた。座敷はすべて板敷で、今日のやうに一ぱいに畳を敷きつめてない。たゞ客のあつたりするときにその人数に應じて敷いたものである。戸や明障子もこの時すでに用ゐられてゐた。その頃は障子を張るのに紙のうすくて丈夫なものが少かつたから多くは絹を用ゐた。之をひつくるめて言ふと、その時の家は風流に且つ優美につくるといふのが貴人



の理想であつた。

## 五 武家造から書院造へ

鎌倉時代になると武士の家が變つて來た。何事にも質實剛健をたつとぶ武士は、家の構へにも遺憾なくこれを發揮してゐる。第一屋根が簡單になつた。今までは檜皮か瓦をつかつてゐたものが、すべて板か茅でふくやうになつた。鎌倉五山といはれる大きな寺でさへ板或は茅ぶきであつた。垣ももつとも簡単な板べいとなり、門は平安時代には賤しい者の用ゐた冠木門が一般の武士に用ゐられるやうになつた。冠木門といふのは、兩方の柱の上に木を横たへただけで、屋根のない門のことである。

かやうな素朴の建て方を武家造りといはれてゐる。公家の寢殿造りと比べてあまりに簡素すぎるやうであるが、當時の武士は將軍をはじめ幕府の高官なども皆これを獎勵實行した。かつて北條泰時が執權の職をつとめてゐる時、その家の板べいがこはれて見苦しくなつてゐた。それで幕府の家來の者たちは泰時に、『執權様、へいを造りかへよと我々に御命令下さい。さつそく築地のりつばな垣を造つて差しあげませう。』と申しあげた。すると泰時は、『各々の志のほどは悦しく思ふが、これを造るには多額の費用がいり、また人夫も大勢集めなければなるまい。たとひ家にはりつばな築地を立てまはしても、運つたなければたすからない。之に反しよし垣はこはれても、運よければ、命も長らへ役目もりつばになし遂げることが出来る。』と答へて、へいの改築をゆるさなかつたさうである。幕府の要職にある執權さへこの有様であつたことを思へば、他の一般の様子もほど推察することが出来る。然るに時がたつにつれてこの質朴の風はだん／＼薄くなり、殊に幕府が京都にうつつてからは一そう甚しくなり、武士にして公家の風をまねる者が漸く多くなつてきた。それではその住居も寢殿造りと變つてしまつたか。否。これには他の事情を



見なければならぬ。それは佛教の影響である。

當時佛教は一般に非常に盛であつて、中にも禪宗は武士のもつとも好むところであつた。自然住居の上にもいちじるしくその影響を受けた。今までの中門を玄關と呼ぶやうになつたのもその現れの一つである。佛教で玄妙なる道にすゝみ入る關門といふ意味で、禪寺の客殿に入る門のことを玄關と言つてゐたが、それを俗人の家にある門にも通用したのである。又今までの寢殿造りにあつては廂が長くつき出てしかも室の外には簀子や格子があつて日光をさへぎるため、室の中は暗くて、本を讀んだりする時は非常に不便であつた。そこで僧侶はかやうな格子や簀子をやめて専ら明障子を用ゐ、明りを取るに都合よくした。それをあまり本を讀まない一般の武士までがまねるやうになつた。

かうして變りかはつて、室町時代の末頃になるととうとう一つの形式をなすやうになつた。書院造りといふのがそれで、今われわれの住んでゐる家は大體その風をとつたものである。その形式は平安時代の寢殿造りと、鎌倉時代の武家造りに、禪

寺の書院の建て方をとり交せたものである。

玄關はその名まへは前にも述べたやうに、すでに鎌倉時代にあつたが、それを只今のやうに玄關と沓脱とを一しよにして客殿の前につけるやうになつたのはこの頃からである。

床を設けたのもその一つで、やはり禪寺の寺院の造り方をまねたものである。その床には佛の畫像をかけ、鶴龜などの形をした燭臺に火をつけ、花瓶に花をさし、香爐に香をたき、側には棚を設けて書籍や名高い人の筆蹟、茶の湯の道具などをせた。

疊はもとは、客人の席や主人の席など必要な場所だけをその都度敷いたものであるが、この頃から室内一面に敷きつめることになつた。

以上主として武士の家の變遷を述べたのであるが、公家の住居はやはりもともとほりの寢殿造りであつた。しかるに應仁の大亂によつてこれらの建物がすっかり焼かれてしまひ、再びかやうな宏壯優美なものを建てることが出来ないので、公家もつ



ひに武士のこの建築法をまねて、こゝに凡てが書院造りとなるやうになつた。

かくして世は戦國時代を過ぎ、徳川時代となつたけれども、家の造り方にはさしたる變化がなく、つひに今日われわれの住む日本建築家屋が傳へられて來たのである。

しかし一方明治以後西洋文明の輸入は、家屋の上にもその影響を及ぼし、近頃和洋折衷のいはゆる「文化住宅」なるものが諸所に建てられるやうになつた。

家はわれわれの活動の場所であり、又安息慰安の場所である。今まで述べたところによつて我々は、われわれ祖先の家にも長所のあることを知り、又今大都會にみるやうな西洋風の大建築にもすぐれたところがあるのを見出すことが出来る。そこでわれわれは必ずしも古きになづまず、又新しきを追はず、ほんたうに興味と實益から考へて、理想的の住居を造りたいものである。それが生活改善、文化生活の第一歩であらねばならぬ。

## 着物と飾り

西洋にこんな昔ばなしがある。むかしエデンの園にアダムとエバといふ二人の人が住んでゐた。家や食物の心配もなく、又着る着物もいらす裸體でゐても何にも氣にかけることなく、きはめて愉快に暮してゐた。ところがある日のこと、惡がしこい蛇にだまされて、神さまから食へてはならぬと禁められてゐた智慧の實を食つてしまつた。すると第一に、自分たちが裸體でゐるといふことに氣がついた。はづかしくてたまらないので、二人はさつそく無花果樹の葉をつゞつて着た、と。この話によると、着るといふことは智慧をさづかつた人間の眞先に氣づいたことであるやうだが、今日でも多くの人の心配の的となつてゐるのはやはり着るといふことである。



われくの祖先もまた最初からこれについて相當に氣をくばつたやうである。

### 一 太古の着物と飾り

皆さんはイザナギノ尊がイザナミノ尊のあとを追うて、ヨミの國へいらつしやつたお話を知つてゐるでせう。イザナギノ尊は途中何らの故障もなくヨミの國へいらつしやつたが、其處でイザナミノ尊のあまりに變りはてたお姿をご覽になり、びつくりして、大急ぎでヨミの國から逃げ歸られた。そして日向のアハギガ原といふところで見そぎ（身にけがれのあつた時、水で體を洗ひきよめること）をなされた。まづ川の岸へ杖をおなげすてになり、それから帶、裳、衣、禪、冠、左右のお腕にはめていらつしやつた腕輪といふ順に、次から次へすつかりおなげすてになつて身をお清めになつたといふすぢでしたね。

これによつてわれくは尊のお身につけられてゐた服装を知ることが出来る。埴輪の人形などの服装を見てもほど同様である。かうした色々の事柄から推して、昔



男子の上古

の人の服装は大體次のやうであつたと思はれる。すなはち男女とも筒袖の衣に裳をまとひ、下には禪をはいてゐた。ちやうど今私たちが洋服を着てゐるやうなものである。襟は前で合はせて、二三ヶ所紐でむすび男女とも左衽（ひだりまへ）であつた。禪は洋服のズボンのやうなもので、女子のは男子のものより一層ゆるやかなものであつたらしい。裳は禪の上から腰にまとふもので、その長さはすねまで來てゐる。今のスカートのやうなものであつたらう。人によると男子は禪をは



き、女子は裳を着けたと説く者もある。帯は今よりはすつと簡單なもので、一まはりするに足る長さの細い紐に過ぎなかつた。高貴の人は皮または木で造つた沓をはいた。

着物の材料は高貴の方は絹布を用ゐたと言はれてゐる。神話によると、天照大神も蠶を飼はせ機を織らしめて、絹布をお用ゐになつたといふことであり、又スサノヲノ尊が大氣都比賣命といふ女神を殺したとき、女神の死骸の眉から蠶が生れたといふ話も傳つてゐるから、すでに神代の大昔に我々の祖先は蠶を知りまたそれを飼つてゐたといふことが出来る。

しかし絹布を用ひることは高貴の人に限られたことで、一般の人はやはり布を用ひたのである。布といふのは楮または麻の皮をさらして織つたもので、その粗いのが「あらたへ」で、細くなめらかなのが「にぎたへ」である。時にはこれらの麻糸に色を染め、横縞に織ることもあつた。染料としては草の汁や、色のある粘土をつかつたが、色でもつとも好んで染めたのは赤色であつた。すべて昔の人は、どこ

でも赤色を好んだらしい。

男子は頭のまん中から髪を左右にわけて、それを兩耳のあたりに結んだ。これを



人 婦 古 の 上  
あるのもこの結び方をいふのである。後には子供だけがこの結び方を  
するやうになつた。皆さんは歴史の  
教科書などでよく、聖徳太子と並ん  
で立つていらつしやる兩皇子のみづ  
ら姿をご覧になるでせう。

一つに束ね、その餘りをすつと後に垂れたり、或は今つぶし島田のやうに結つた



りした。(第五三頁、五五頁のさしる参照)

男女ともに髪をとかすために櫛をつかつたが、またこれは髪かざりとしても多く用ひられた。イザナギノ尊がよみの國からお逃げなされる時、追うて来る醜女たちに尊の右のびんにさしてある櫛をとつて、その齒をかいては投げつけ／＼なされた。するとその櫛の齒が片つばしから筍になつていつた。これを見たしこ女たちは、尊をつかまへることも忘れて、皆筍に取りついた。その間に尊は一生けんめい逃げられて、難をまぬかれたといふ神話がある。大昔はかやうに男子でも櫛をさしてゐたと見える。

その外の飾りものにもずるぶん進歩したものがあつた。金や銀でつくつた耳環をはじめ、首にかけるものには勾玉、丸玉、切子玉を糸でつらねたものがあつた。手や脚にも同様な飾りものをつけた。ずるぶんハイカラであつたやうに見える。着物や住居の方とくらべて少しハイカラ過ぎる嫌があるが、これはわれ／＼の祖先に限つたことではない。着物を着ることさへ知らない裸體の野蠻人の中にも、外出の時

古墳とその發掘物



- 一 埴輪土偶(男子)
- 二 埴輪土馬
- 三 埴輪土偶(女子)  
(頭部はかけ損じてあるがまげの一部は残つてゐる。)
- 四 埴輪圓筒
- 五 提げつば
- 六 鏡 七 鏝
- 八 刀 九 勾玉
- 一〇 管玉
- 一一 切子玉
- 一二 丸玉
- 一三 金銀環



には、おしろいをつけたり、べにを塗つたりすることを忘れない者があるさうだ。臺灣の生蕃や北海道のアイヌにも中々こつた飾りものがある。これらの事實から考へて、野蠻の域をとうに脱し、相當に文化のすゝんだ我々の祖先に、これ位の飾ものがあつたからといつて、さう不思議がる必要もあるまい。

飾の一種に文身といふのがある。今はたいていの國で、これを法律で禁めてあるが、太古未開の人々の間では可成り盛に行はれたものである。我が國でも熊襲とアイヌは顔や手または體にいれずみをしてゐたやうであるが、我々の祖先はかへつてそれを嫌つたかたむきがある。彼等の間には黥刑といつて、罪を犯したものにいれずみをしてやる刑罰さへあつた。

## 二 文物傳來後の服裝

支那朝鮮と交通するやうになり、またかの國の美術工藝がわが國に傳はるやうになつてから、服裝の上にも大なる變化を來した。上流の人は唐風にならひ、男女ともにこれまでよりも袖廣く、裾長く、模様美しい着物を着るやうになつた。また今までは左衽であつたが、支那の人々が右衽であり、しかも左衽は夷狄（野蠻人のこと）の風俗であることを知るや、さつそく之を改めた。けれども最初のうちは、單に支那のことをよく知つてゐる上流の人の間に行はれたのみで、一般の人々はやはりもと通りの左衽であつた。それで朝廷におかせられても、このまゝにすて置いては、支那にたいして面目がないとお考へになり、たう／＼養老三年（奈良に都してから十年目）命令して、天下の民をことごとく右衽にさせるやうになされた。これから



右衽はわが國一般の風習となつた。ただ死人には今でも着物を左衽に着せる風がある。これは生存者と區別をするためであるとも言はれてゐるが、それよりは、大昔の祖先の面影をのこしたものと見る方がよいやうだ。葬式の場合に今でもやはり昔の装をするのと照らしあはせたら、その邊の事情もほゞうかゞはれよう。

冠をかぶるやうになつたのも著しい變化といはねばならぬ。聖徳太子が位の高下によつて、冠の色をお定めになつたといふことは、皆さんが歴史でよく知つてゐることである。

冠を用ゐるやうになつてから、自然髪しぜんかみの結び方もかはつて來た。すなはち男は成年に達すると、髪を頂上に結んで冠をかぶるに都合よくした。後世行はれる元服の始りである。

かく色々の點に於て、かなりの變化を見たが、地方に行くとなほ太古の服裝をしたものが多かつた。應神天皇の御代、日向の諸縣の君牛の女に髮長媛といふ美しい女がゐた。天皇は



奈良時代貴人の野遊び

その女を都にお召しにならうとお考へになつて、使を日向にお遣しになつた。使は歸つてきた。君牛の方では非常に喜んで、「女をつれてさつそく都へ上つて参りませう。」といふ返事であつた。天皇もお喜びになつて、淡路の島まで迎ひにお出かけなさるといふことになつた。そのうち髮長媛の一行は播磨まで進んで來たといふことが分つた。天皇は今か〜と西の方を見つめていらつしやると、數十匹の鹿の子が海に浮んで、やがて鹿子の港へ入らうとしてゐる。天皇は不思議に思召され、どここの鹿の子であるかと、左右の者にお尋ねになつた。ところが左右の者もたゞ不思議に思ふばかりで、誰一人たしかな様子を知るものがない。それではさつそく人をやつてしらべよといふことになつてとりしらべたところが、そ





平安時代貴族の服装

平安時代になると、服装がますます複雑に、ますます華美になつて來た。公事の

### 三 平安時代華美の服装

れは鹿の子ではなく人であつた。しかも髪長媛の一行であつた。すなはち一行數十人の者が、一様に角のついた鹿の毛衣を着てゐることが分つた。都のはなやかさに比べて地方の純朴さがうかゞはれる。もつとも應仁天皇の御代といへば、朝鮮の文物がわが國に來はじめたばかりであるから、地方にその影響の及ばなかつたことは無理もない。中央にしてもその頃はまだわれわれが奈良時代に見るやうなはなやかさはなかつた。しかし君牛一行の服装に、天皇はもとより、仕へてゐる左右の者までが想像もつかなかつたといふことは、やはり都と地方の服装に、美しい相違のあつたことを物語るものである。



時に着る通常の禮服として、天皇より臣下に至るまで用ゐるものが東帯である。東帯でもつとも上に着るものを袍といひ、その下に着るものを下襲と名付け、うしろのすそを長く地にひくのが常である。これを裾といつて位の高い人ほど長くする。下襲の下にはさらに袖、單などを着けた。下肢に着るものでは、もつとも上なるものが表袴で、その下に大口をはく。大口をはくのは表袴の形を正しく保つためである。頭には位相當の冠をかぶり、足には沓をはいた。それへ文官なら笏を持ち、武官であつたら矢をさした胡録を肩に負ひ、手には弓を持つた。東帯の略服として直衣がある。直衣は袍のかはりに着るもので、之を着た場合には下襲をはぶき、又表袴の代りに指貫をはくのである。指貫は一名奴袴ともいつて、その裾に糸を指し貫いてくゆるやうに出来てゐるものである。歩行労働者などに便利であるため、もと賤しい者が用ゐたものであるが、それを貴人も採用するやうになつた。時には袍を着た場合でも指貫をはくことがある。これがいはゆる衣冠の装束といふもので、東帯よりはやゝ略式で、尋常の參内の時に用ゐた。

この外に直垂、水干などがある。ともに進退に便利なるもので、官位ある人は之を平常家居の服とし、無位無官の者並に卑賤の民は禮服として用ゐた。また出遊の



平安時代の官吏と従者

ために狩衣といふものがある。袍の袖にひもをさし通して、袖をくくりしめるやうにしたものである。平民の服装は上に述べたものに比べると甚だ粗末であつたが、如何に賤しい者でも烏帽子をかむり袴をはいて居た。さし繪にある従者の服装がそれである。又儀式の時には前に述べたやうに、平民も水干直垂などを着用した。

朝臣の東帯に相當する女官の正装は十二單である。白小袖をもつとも下に着し、其の上に單、五衣及び表衣を重ねて打掛けにし、更にその上に唐衣を着る。唐衣は東帯の袍に相當するもので、その長さは非常に短い。五衣は單に衣



ともいつて、時には二十枚以上も重ねることがあつた。この重ねた衣の色が各々異つてゐるときは甚だ美しく見えるから、當時の人は好んで重ね着をしたものである。しかし後にはその敷を五枚ときめたので、名まへまで五衣といふやうになつた。袴は緋のりつばなもので、背の腰から更に裳をつける。裳は白の生絹でこしらへ繪模様を現はしてある。扇はしじゆう手を離さなかつた。

髪は大てい後に長く垂れてゐたが、下流の女子ははたらくに都合の良いやうに大方之を後に束ねて居た。又女子は一般に顔をあらはすことを恥ぢ、外出の時は大てい被衣をつけ、市女笠をかぶつて居た。

女子が大きくなると眉の毛をぬいて、別に黛でもつて眉をきれいにかき、鐵漿で齒をそめ、顔にはおしろいをぬつて飾り立てた。しまひには男子にもこれをまねるやうな者が出て來た。

かやうに平安時代は、男女とも一般に華奢に流れ、中にも衣服は寒暑を防ぐに、又たち振舞に都合よくこしらへるといふよりも、みえを飾るために色々の工夫を



平安時代女子の外出姿

こらしたものであつた。強装束といつて、冠や烏帽子を漆でかため、衣を糊で強く張つて衣紋を正しくするのもその一つである。それだからこの時代の貴人は男といはず女といはず、ほとんど凡てが雨を非常にこはがつたものである。それは切角糊でかためて衣紋を正した着物も、一度雨にあへば忽ちだらりとなつてしまひ、きれいに染めなした色もめちやめちやになるからである。だから雨の時にはように外出しなかつた。それについて一つの面白い話が残されてゐる。

白河法皇は有名なる佛教の御信仰の厚いお方であつた。法皇になられて間もなく、一切經



といふ大部のお経を、紺紙に金泥でお寫しになつて（黒い紙に、金粉をにかはでとかしたもので、經文を寫すこと）、それが出來上つた時、白河の法勝寺で供養をなされ、法皇も行幸なさる豫定であつた。

所が其の日になつて大雨が降つたため供養を延期せられ、さらに又期日を定められたが、この時もまた雨であつた。次に延期した日もまた雨で行幸が出來ない。かうして都合三度延期したが、もはやこの上延期は出來ないとあつて、とうとう四度目に供養を行はせられたが、あひにくその日もまた雨天であつた。法皇は非常においかりになり、

『けしからぬ雨だ、すみやかに監獄へ送れ。』  
と仰せられた。それでその雨を器に入れて監獄へ送つた。世に雨禁獄といはれてゐるのはこのことである。

#### 四 武家時代の服装

東帯と十二單は公家並びに女官の禮服で、江戸時代の終りまで男女官は、宮中の儀式の場合大ていこの服装であつた。今でもきはめて大事な儀式にはこの服装をすることがある。大正天皇御即位の時にも、天皇以下列席の大官貴女等いづれもこの正装をなされた如きその一例である。

かやうに公事の禮服は長い間さしたる變化を見なかつたが、平常の服装には時代の移り代りと共に可成りの變化を見た。ことに武士は將軍をはじめ士卒に至るまで質實剛健を尊び、したがつて服装も平安朝の華美の風を好まなかつた。又上のこのむところ下これにならひ、平民もいよ／＼質朴の風を喜ぶやうになつた。

鎌倉代時の武士は、平生大てい水干または直垂を著し、袴をはき、烏帽子をかむ



つてゐた、水干と直垂は平安時代にもあつたが、ひろく一般に用ゐられるやうになつたのはこの時以後のことである。平民はふだん烏帽子をかむり袴をはいてゐたけれども、儀式の時の外はほとんど水干、直垂等を着ることはなかつた。女子も男子と同様に、その服装きはめて簡素なものであつた。外出する時は被衣を用ゐ、市女笠または檜笠などを被つた。

かくの如く鎌倉時代となつては、上下共に何事につけても質素、簡單、實用を旨とするやうになつた。將軍頼朝がある時、藤原俊兼の美服を見て喜ばず、自ら俊兼の刀をとつて其の衣のつまを斷ち切つて將來をいませめたことなど、正にこの時代の氣風を知るに足る話である。

室町時代に至つては初め、武士は直垂よりももつと簡單に出來た素襖を着て長袴をはき、烏帽子をかむつたが、後には更に簡單になつて、肩衣と半袴（今われ／＼の用ゐてゐる袴）を用ふるやうになつた。これが即ち上下の起りである。又素襖肩衣などに家の紋をつけることもこの時代から流行した。

鎌倉時代の頃から武士は冑をかむる時、のぼせをふせぐために月代をそること（額



素 襖 肩 衣 半 袴

ぎはから中央部にかけて髪をそること）が始つたが、室町時代に至つてはこの風ますます流行して平民の間にもひろがり、つひに烏帽子をかむらないで丁髷をそのまゝあらはすやうになつた。又ひげは武士が剛勇をよそほふために伸ぶがまゝにこれをはしたものであつた。それがだん／＼一般にも重んぜられるやうになり、つひに男としてひ

げのないのは一種の片輪であるとき、言はれるやうになつた。戦國時代にあつたこ





室町時代の風俗

とであるが、小田原の岩崎嘉左衛門といふ士のひげがなかつたのを、片井六郎兵衛といふ者が、「ひげなし」と悪口を言ったので、嘉左衛門はくやしくてたまらず、直ちに六郎兵衛とさしちがへて死んだといふことである。かやうに武士はひげを尙び、鐘鳩髯、天神鬚などいつた勇ましさうなものを喜んでたくはへた。

次で世は戦國をへて江戸時代となつた。すべてにきまりをつけて世の亂れをふせがうとした徳川氏は、服装の上にもやはり一定のきまりを立てた。そ

のきまりは中々こまかいもので、時節により式により、又位によつてそれ／＼異つてゐた。例へば正月元日、二日の正装は、侍従以上は直垂、袴、四位は狩衣、奴袴、諸大夫は大紋(布衣の直垂のことで、大形の家の紋をつけてある)、諸士は布衣素襖を着るが如きそれである。然し通常禮服としては、一般に上下をつけ、刀、脇差を腰にさした。この場合は烏帽子をかぶらない。

平民も禮服として、初め上下を用ゐたが、後には大てい羽織、袴を着るやうになつた。羽織はじめ旅行などの時塵をよけるために、衣服の上に着たもの即ち道服であつたが、後室内でも着るやうになつて、つひに江戸時代の禮服の一となつた。以上の如く平安時代華美の服装は、武士の社會によつてだん／＼簡單となり、外觀をかざるよりも實用を主とするやうに變つて來た。然るに大平久しく打ちつゞくと共に漸く上下遊惰豪華にふけり、風俗も自然柔弱に移るやうになつた。前にも述べたやうに、男子はなるべく勇壯に見せるために、ひげをはやし又は作りひげをつけたものであるが、元祿の頃となつては、ほゞ、あご、鼻の下のひげを残りなく剃





元祿時代の風俗

り落して女子の如くにし、甚しきは男子にしておしろいを塗り、或は眉を細く剃りつくる者もあつた。小袖の裏を紅にし或は紅の肌着を袖口長くして手首をおほふやうにしたのも、この頃から流行り出したものである。

女子の服装は殊にいちじるしい變化を見た。これまでは髪は多く垂髪にし或はたばねたものもあつたが、何れにせよ別に櫛、かうがいなどをはさむことなく、又その他の裝飾品もなかつた。然るに元祿前後から髪の仕立てに非常に苦心を拂ふやうになつた。まづ垂髪を巻き上げ、

かうがいを以て留めるやうにした。これがかうがいまげである。これから變化して角ぐるまげ、ぐるまげも出来、また別に兵庫まげ、島田まげ等もあつて、だんだん復雜の形になり、櫛、かうがいも美麗なるものを競うて用ふるやうになつた。



女子風俗の變遷

今の世の女、昔なかつたことどもを仕出し、さりとて身のたしなみ道具種々なり。これに氣をつけて見しに、首すぢより上げばかりに物十六品あり。まづ髪の毛の油、びんつけ、長かつら、平元結、忍元結、かうがい、さし櫛、前髪立、べに、とめぼり、淨世つどら笠

おしろい、はぐる、まゆすみ、おもり頭巾、とめぼり、淨世つどら笠



といつてゐる。更に六十年たつた九代將軍家重の頃には、くびから上をかざるべきものが二十餘品を數ふるに至つた。

着物の變化は一層大なるものであつた。前圖はその變遷をあらはしたものである。右は江戸時代の初め頃、中は元祿時代（江戸時代の初より凡そ百年後）、左は文化文政時代（元祿より百年ほど後、今より約百年前）の服裝をうつしたものである。これによつてわれ／＼は髪かみの結ゆひ方かたの變化を知ると共に、衣ころもの袖そでがだん／＼長くなつて居り、又帶おびが次第しだいに廣ひろくなつてゐるのを知ることが出来る。

かやうに上下ともその風俗ふうぞくが次第しだいにはでになつて來た。それで幕府はくふは令れいを出してしば／＼おごりをいましめたけれども、大勢たいせい如何いかんともすることが出來ず日々華奢わかしやに流ながれるばかりであつた。元祿げんろくよりも少し前まへのことであるが、豪奢かうしやを以もつてきこえた江戸の石川六兵衛いしかはろへゑの妻つまと、京都きやうとの難波屋十右衛門なんばやじゆうゑもんの妻つまが服裝ふくさうの美びを競きはんがために、わざ／＼都大路みやこおほぢをはでに裝よそうてねり歩あるいたといふ話はなしがある。いかにも馬鹿はかげた話はなしであるが、當時たうじの人は本氣ほんきにこれが品定しなさだめに出かけたものであつた。後のちになつて吉宗よしむね

將軍、松平定信等の大改革を見るのも亦當然である。それに一方十一代家齊將軍のころから内憂外患ないいうぐわいぐわんがこも／＼おこるやうになつたので、人々は服裝ふくさうの美びを競きふ安やすき心こころも、またいとまもなく、自然しぜん素朴そぼくに向つて來た。

かくして世は明治をむかへ、世界各國との交通も始り、勢いきほひ裝服ふくさうの上にも一大變だいへん化くわを見るやうになつた。

ひるがへつて武具武器ぶぐぶきを見よう。軍いくさの時に用もちふる甲冑かちゆうは、武士ぶしのもつとも重おもんじたものである。甲冑かちゆうの頭あたまに被かぶるものを冑かぶとといひ、その中で頭あたまを入いれるところを鉢はちと名なづけ、鉢はちのうしろに垂たれてくびをおほうてゐるものを鑑しころと名なづける。目庇まびしの上に左右さゆうにつきたつてゐるものが鍬形くわがたといふもので、大將たいしやうの冑かぶとになると、鍬形くわがたの間に龍りゆう頭とうや獅子しし等の金物かなものを立てる。

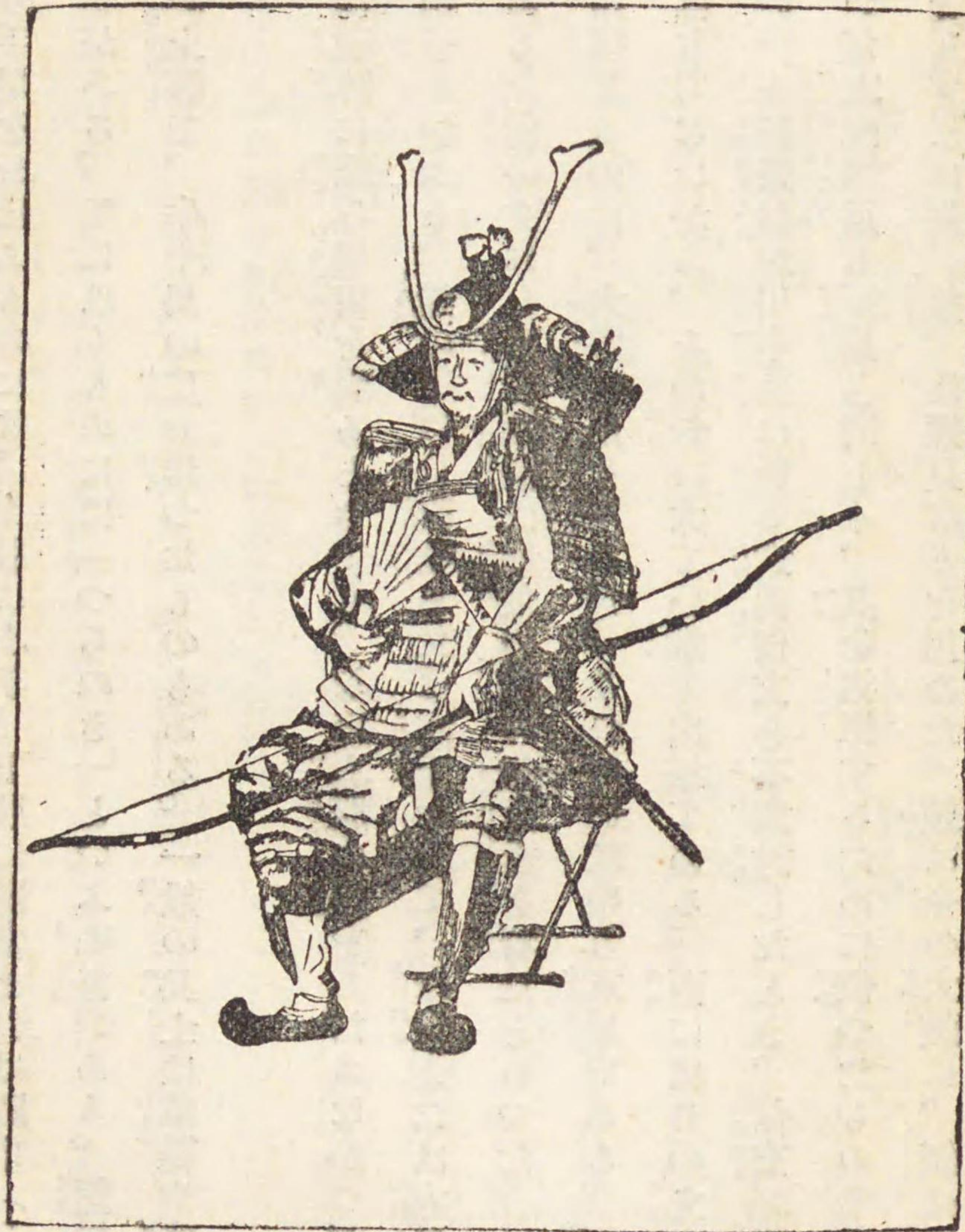
鎧よろいの中で、背せと腹はらと脇わきとをまとうておほうてゐるものが胴どうで、左右さゆうの肩かたから垂たれて腕うでをおほうてゐるものを袖そで、前後ぜんごおよび左ひだりの腰こしに垂たれてゐるものを草摺くさすりと名なづけ



る。今われし頃の使つてゐる撃劍や銃劍術の道具は、これらの武器から考へ出され  
たものである。

胄の鉢は鐵でつくり、鍪、鎧の胴、袖、草摺等はまれに鐵を以て造ることもあつ  
たが、大ていは堅い革の小札を重ねて造つた。すなはちこの小札を糸または細く切  
つた革で組み綴るのである。かやうに組み綴ることを威といつて、糸で威したものを  
糸威、革で威したものを革威と名付ける。又その糸や革は色々の色に染めて、華美  
を競うたものである。緋威の鎧、黒糸威の鎧などいふのは、この威の色が緋や黒色  
になつてゐる鎧のことである。齊藤實盛が最後の奮戦をした時の様子を記して、

「平家の士、武藏國の齊藤別當實盛は、もう自分は年七十にもなつた。もうぢき  
死ななければならぬ。何處の國で死んでも同じことだと思つて、赤地の錦の鎧  
直垂に、黒糸で威した鎧を着、敵の中へ進み入つて一心不亂に闘つた。」（兒童  
源平盛衰記）  
とある。



武 装 の 士



この外手足をおほふものには、上肢に小手、下肢に髓當または脛巾（今の脚絆にあたる）がある。足にはくものには「つらぬき」といふ毛沓がある。熊の皮で作つたものが上等で、牛や馬の皮で作つたものもある。一般の兵士は草鞋や草履などをはいた。

武士は戦陣に臨み甲冑を着るときでも、なほ衣服の禮をみださなかつた。冑の下には烏帽子をかぶり、鎧の下には直垂または水干を着て、指貫または大口をはいたものである。前の文にも齊藤實盛は赤地の錦の鎧直垂を着たとあつた。

兵を指揮するのに、大將は扇を用ゐた。これがいはゆる軍扇である。軍扇は強くなければならないから、その骨は大てい鐵で出来てゐる。面には日の丸を畫いたものが多い。上杉謙信が川中島に於て武田信玄を不意討したとき、信玄が謙信の大刀をふせいだ軍配團扇も軍扇と同じく、兵を指揮するために使つたものである。進退の合圖をなすには鼓、鉦、法螺貝などを用ゐた。鼓は今の太鼓に、鉦は銅羅に相當する。赤穂の義士四十七人が山鹿流の陣太鼓を合圖に、吉良の屋敷に討入つたこと

は皆さんのよく知つてゐる話である。今でもあのときのことを考へるとその太鼓の音がわれ／＼の耳にひびくやうだ。

ついでに兵器について今少し述べよう。弓矢は大昔からわれ／＼の祖先が珍重したもので、狩獵や戦争になくはならぬものであつた。その弓は六七尺から長いものは八九尺に及ぶものもある。かやうに大きい強い弓になると、これをためて弦をかけるのに一人の力で張ることが出来ず、二三人或は五人から十人もかゝらなければならぬものがあつた。かの俵藤太秀郷は五人張りの弓に十五束の矢（手を十五にぎりした長さ、今の尺にして四尺ばかりの長さの矢）をつがへ、満月の如くひきしほつて、蜈蚣の眉間を射たといひ、又鎮西八郎爲朝は十人張りの強弓をひき、一箭をもつてよく敵の船を射沈めたといふことである。

弓は、はじめは白木のまゝであつたが、後には漆でこれを塗ることもあり、又竹木を合せて造ることもあつた。更に弓を強くするために、糸でつゝみ又は籐で巻くことがあつた。籐の巻き方にも色々あつて、滋籐（籐を五分位づゝへだて、一寸許



りづ、巻いたもの、笛籐(弓を黒く塗り、巻いた籐を赤くぬつたもの)などの名がある。源平合戦の際、熊谷次郎直實と平敦盛と組討ちをしたときの敦盛の出で立ちを見るに、

「修理大夫經盛の末子、無官大夫敦盛は、紺の錦の直垂に、萌黄匂の鎧きて、白兜の冑をかぶり、滋籐の弓に十八指した護田鳥尾の矢をもち、鴨毛の馬に乗つて只一騎、新中納言知盛の舟を目がけて一町ばかり馬を游がせた。」(兒童源平盛衰記)

とある。

矢は三尺から四尺をこえるものもあつた。矢をいれてこれをになふためには籐がある。籐は古くはやなぐひ(胡籐)といつたが、平安時代の末から「えびら」と呼ぶやうになつた。

刀劍は敵を撃ちまた自分を護るために、弓矢と相並んで、むしろ後にはそれよりも重んぜられた武器である。昔は兩刃と片刃の兩方使はれたが、次第に片刃のみと



安倍貞任、藤原宗貞の野營を襲ふ

なるやうになつた。その形もはじめはまつすぐなもの、すなはち「直刀」といふものであつたが、後には今われ〜が見るやうな「曲刀」になつた。これが日本刀である。

刀に普通大小二つの種類がある。大刀は二尺五六寸から三尺五六寸に及ぶものがあり、或はもつと長くなつて四尺を越えるものもあつた。畠山重忠の大刀は幅四寸長さ三尺四寸あるといふので、當時の人は皆珍しがつたといふことである。小刀は大刀に添へて腰にさすもので、脇差または帶副などいつて甚だ短く、柄ともに八九寸位である。これは敵と組むときに、鎧のすき間を刺し通すに都合よきものである。又持つにもしごく便利なものであるから、男





明治初年前後の兵士の武裝

八四

子はもとより女子も戦時のみならず  
 ふだんにも身に添へて、身を護る具  
 としたから護刀ともいはれてゐる。  
 刀劍の柄を長くしたものが長刀  
 (薙刀)である。矛は昔からあつたが  
 槍は源平時代以後に出来たものであ  
 る。初めはあまり用ひられなかつた  
 が、次第に之を重んずるやうになり  
 戦場でさきがけするのを一番槍、二  
 番槍などいつて、武功を論ずる標準  
 とさへするほどになつた。  
 鐵砲は天文十二年にポルトガル人  
 によつて始めて我國に傳へられたも

のである。時はちやうど群雄割據の世であつたから、たちまち全國にひろまり、徳川家康は早くも鐵砲隊を組織して敵を大になやました。爾來刀劍と共に廣く世に用ゐられるやうになり、明治になつては一層重要視せられた。自然武裝の上にも改良を見なければならなかつた。

顧みると身には重い甲冑を着、三尺の日本刀をふりかざし、敵前近く、「いやいや遠からんものは音にも聞け、近くばよつて目にも見よ、我こそは桓武天皇の後裔、高望王より第十一代、王氏を出でて遠からず、三浦大助義明が孫、和田小次郎義茂、生年十七才、我と思はん者は大將も郎黨もよつて組め。」と、大音聲に長々しく名乗りをあげて、雌雄を決した祖先の雄姿目に見えるやうである。



飲食物

一 太古の飲食物

ずつと大昔の人類は、鳥や獸のやうに、自然に出来る木の實や草の葉を食べて生活したさうである。前に述べたアダムとエバもまた始めのうちはさうであつた。彼等はエデンの園で、何の心配もなく、神さまから下さるおいしい木の實や草の葉を食べて満足してゐた。ところがある日のこと、二人は神さまから禁められてゐた智慧の實を食べてしまつた。「これはしまつた。」と氣付いた時にはもう晩かつた。神さまに知れて、とうとうエデンの園を追つばらはれ、以來自分で土を耕し額に汗して食物をとらなければならぬやうになつた。

しかるに我々の祖先は、二人の話にあるやうなそんなのんきな時代はなく、はじめから自分で山へ行つたり海へ出かけたりにして食物をとり、又田畑を耕してそこから穀物を得たものであつた。天照大神が人民に米を作り麥を植ふる農業の法をお教へになつたといふことは、皆さんがすでに歴史で習つた事柄である。又こんな神話も残つてゐる。スサノヲノ尊が高天原を追ひはられて根の國へ行く途中、あまりにひもじくなつたので、大氣都比賣命といふ女神に、何か物を食べさせてくれと仰せになつた。女神は仰せをかしこまつて早速鼻の穴や口の中から妙しい食べ物を出してそれをいろいろにお料理して差上げた。スサノヲノ尊ははじめからオホゲツヒメノ命のなさることを見てゐらつしやつたので、『こら、そんなお前の口や鼻から出したものがおれに食へるか、無禮者奴』と、いきなり劍をぬいて女神をうち斬り殺してしまつた。すると不思議や、その死骸の眉から蚕が生れ、額から粟が出来、目から稗、腹から稻が出来、さらに下の方から麥や大豆や小豆が出来た。後にこれを天照大神がご覧になり、『これは人民の食べ物にけつこうなものである。』と仰



せになつて、それを植ゑる方法を人民にお教へになつたと。

はたしてかういふことから五穀が出来たかどうか、ずつと大昔のことだからよくは分らないが、ともかくその頃かやうな五穀があつたであらうといふことは想像出来る。オホゲツヒメノ命は保食神または豊受姫大神と申し上げて、今も伊勢の外宮に農業の神としておまつりしてある。

おかずとして用ゐたものには肉類があつた。そしてそれは多く山に狩して得た猪や鹿の肉、または海や河にすなどりして取つたいろ／＼の魚であつた。崇神天皇の御代始めて税を人民におかけになつたとき、男の税としてお取りになつたものは、弓弭の調といつて、狩りをして得た猪や鹿であつた。これらの獸の、肉は食用にし皮は着物や敷物として珍重せられた。君牛一行の鹿の毛衣を皆さんは覚えて居るでせう。

この外牛や馬の肉も食べたやうである。かつて神武天皇が大和地方を平定なされた時、けはしい山路をたどりたどつてとう／＼「ウダ」といふ所までお進みになつた。このウダには兄猾、弟猾といふ兄弟の荒くれ者が居つたので天皇（その時にはまだ天皇の御位にはお即きにならなかつた。）は二人に使をおやりになり、降参せよと仰せになつた。すると兄猾は、尋常の戦をしたんではとても勝つ見込みがないから、一つだまし討ちにしうと思つて、うはべでは『降参します。』と申し上げた。そして知らぬ間に大きな御殿の中に、釣天井をこしらへて置いて、天皇を始め官軍を残らず落さうとたくらんだ。

ところがこのことを弟の弟猾がそつと天皇にお知らせした。天皇は『それはけしからぬ。』と、さつそく道臣命と大久米命といふ強い大將をおつかはしになつて、兄猾を不意にお討たせになつた。兄猾は不意をうたれてどうすることも出来ず、四方から追ひまくられた。二人の大將は兄猾を釣天井をしかけたところへ追ひこんだ。兄猾は追ひまくられて逃げこむはづみに、自分のしかけた釣天井がどしんと落ちてたちまち押し殺されてしまつた。そこで弟猾は牛酒をまうけて、天皇のためにお祝ひの大宴會をひらいたといふことである。この牛酒といふのは、牛肉を肴にして酒



もりをしたといふことで、今であつたら牛肉のスキ焼をつまきながら祝の酒を飲むといふところであらう。

また大國主命も、神田を耕す者に牛肉を下さつたといふことがある。

かういふ風にわれ／＼の祖先は、大昔から牛馬の肉を食べてゐたやうである。ところが佛教がわが國に入つて以來、四つ脚の肉を食ふことを嫌がり、又時には朝廷からわざ／＼とめられたやうなこともあつて、だん／＼牛馬を食用にすることが少くなつた。天武天皇の御代(一三四〇年の頃)にも、牛馬の肉を食べてはならぬといふ命令が出てゐる。これは單に佛教から見て、生き物を殺すことをきらつて出されたのでなく、その中には牛馬は農業の助けになる有用の動物だからといふ意味も入つて居たやうである。この風習は次から次へと傳はつてつひに今日に及んだ。今でも老人の中には牛肉を嫌ふ人が少くない。

肉類の外に野菜や果物も珍重せられてゐた。いま遠くイザナギノ尊のお話を思ひ出して見よう。尊はヨミの國からお逃げなされる時、多くの醜女(荒々しくてみにく

い女)たちに追つかけられた。尊は、つかまつては大へんだとおぼしめして、走りながら髪の毛の飾りにさしてある葛の葉をぬき取つてどん／＼後へなげつけられた。すると見る間にその葛の葉の落ちたところへ葡萄の實がふさ／＼と實つた。醜女たちはいきなりその葡萄を取つて食べ始めた。その間に尊は一生けんめいに駆け出してやつと少しばかり逃げのびられた。やれ／＼と一安心なさつたかと思ふと、女たちは又ちき近くまで追ひつめて來た。尊はこれはいけないとお考へになり、今度はさしてゐらつしやる櫛をぬいて、その齒をかいては投げつけ／＼なさつた。するとその櫛の齒が片つぱしから筍になつて行つた。しこめたちはその筍を見るとまたさつそく引きぬいてどん／＼食べ出した。といふすぢであるが、これを見ても筍や葡萄の實がいかに彼等の大好物であつたかを知ることが出来る。他の人々もかういふ野菜や果物を好んで食べたらしい。

料理の仕方はどうであつたか。高貴の人は米をついて白米にすることもあつたが



一般の者は玄米のまゝを使つた。その玄米を甑で蒸したのが昔のご飯である。魚肉や獸肉は生で食へることもあつたが、煮たり、或は焼いたりして食へる方が多かつた。かやうに火を使つて物を煮たり焼いたりすることは、進んだ人間の特徴の一つである、野蠻人や人間以外の動物は火を使ふことを知らない。

それでは我々の祖先は、この火をどうしておこしただらうか。マツチを有たない大昔の人々は、火をおこすのに木と木をすり合したものである。大嘗祭に供へる火器はその名残りである。それは數ヶ所丸い穴をあけた一枚の板と、その穴にちやうどはまるやうな木の錐とである。これで火をおこすには、木の錐を板の穴にあて、早くすりまはせば良い。第三九頁にあるさし忍の婦人は今その方法で火をおこさうとしてゐるところである。今でも伊勢神宮や出雲大社では神前に供へる淨火を得るために、かうした方法を用ふことがあるさうだ。錐と板とは大てい檜を用ゐた。檜はすなはち「火の木」である。

これと同時に或はこれよりも少しおくれで燧石で火をおこすことが行はれた。今でも古墳から時々燧石を見出すのは、その當時使つた遺物である。また皆さんは日本武尊が燧石で火をおこされたといふお話を聞いたことがあるでせう。ちやうど尊が東の蝦夷をご征伐に行かれた途中の出来事であつた。相模の國をお通りの時、賊どもは尊をだまし討ちにしやうと思つて、野原へおさそひ申し、四方から火をつけた。火はすん／＼間近にせまつて来て、尊のお身も危くなつた。その時尊は叔母さまの仰せを思ひ出し、急いで倒の袋の紐をといてご覧になると、中には燧石が入つてゐた。「これは有難い。」と尊はさつそく御寶物の御劍をぬいて、あたりの草をどん／＼お薙ぎはらひになり、袋の中の燧石でその草へ向ひ火をつけられた。火はあべこべに賊の方へ進んで行つた。そこで尊は野原からのがれ出て、そしていきなり賊のかしらや手下の者どもを切り殺し、火をつけて焼いておしまひになつた。といふことである。かやうに木や石をすり合して、火をおこした我々の祖先が、今われ／＼の使つてゐるマツチや電氣を見たらどんなに驚くことだらう。





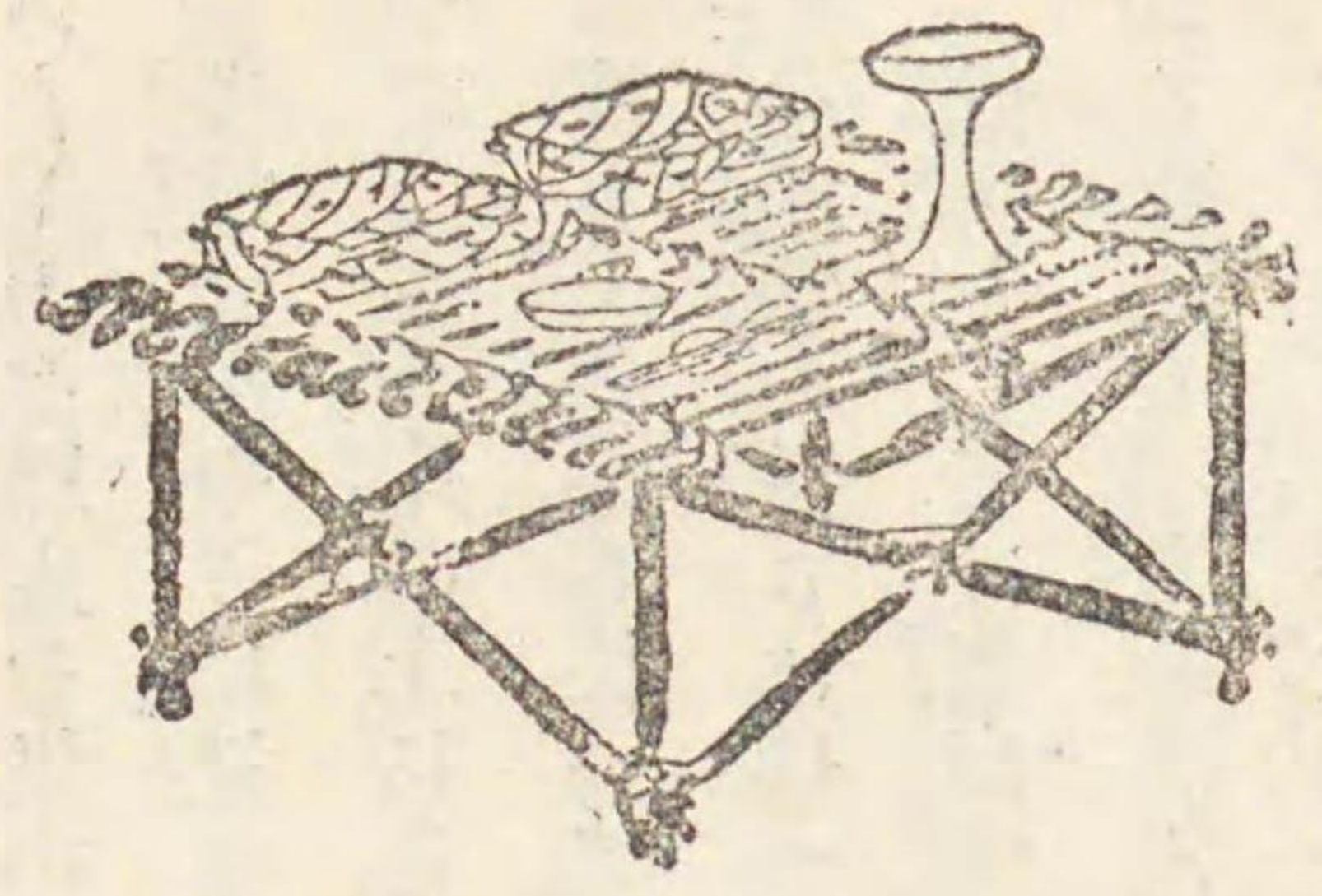
上古の飲食物

食物を盛るためには土製の食器があつた。碗やひらかといふのがそれである。碗やヒラカは素焼のままである。今の茶碗や皿みたやうにうは薬をぬつてないから、ご飯や外の食物が器にくつきやすい。それでそれをふせぐために器の上に木の葉を敷いてその上に食物を盛ることもあつた。木の葉にご飯を盛ることは、地方では可成り長い間行はれたらしい。奈良時代に地方を旅行された有馬皇子は、

家にあれば筥に盛る飯を草枕

旅にしあれば椎の葉にもる

と歌はれてゐる。今でも子供らが飯事につかふ食器は、大てい木の葉であるのを見



上古の食卓

貴い人の家では、これらの食器をのせるに机があつた。この机は今の机のやうに板をなめらかにけづつて作つたものでなく、細い木の枝を同じ長さに切つて、これを葛などでつぎ合して作つたものである。繪のやうに。古事記と日本書紀に、「ホヲリノ尊が、海の神さまのところへお出でになつた時、海の神は尊のお姿を見て、『おや、あの方は大空からお下りになつた貴い神さまの御子さまにちがひない。』」と言つて、さつそく尊をお宮へお通し申した。そしてあじかの毛皮を八枚重ねて敷き、その上へ絹の疊を八枚重ね、それへ坐つていたといふ。そこ



へ百取の机代の物をそなへて、それはく丁寧におもてなし、た上、豊玉媛をお嫁にさし上げた。」と書いてあるが、その百取の机代の物をそなへたとあるのは、いろくのご馳走を机の上に並べたといふことである。

貴族はかやうに机などを用ひたが、一般の人は左様な念の入つたものを有たなかつた。多分床の上にそのまゝならべたのであらう。

箸も大昔から使つてゐた。然しそれはきはめて簡單なもので、細い木の枝か竹の枝を適當の長さに切つたものであつた。

飲物としては酒が大昔からあつた。かのスサノヲノ尊が、八またの大蛇を退治なさる時にも、米をかんで作つた酒をお用ひになつたと言はれ、又前にも述べた通り、神武天皇が大和を平定なされた時、うだの大將弟猾は、酒に牛肉のご馳走をつくつてお祝ひ申し上げたことがあつた。この外われくは古事記や日本書紀の中から、お祝ひの時酒を用ひたといふ記事を所々に見出すことが出来る。からいお酒がどうしてかう大昔から珍重せられたものか、不思議でたまらない。

## 二 外國と交通後の飲食物

朝鮮や支那と交通するやうになつてから、飲食物の方面にもかなりの變化を見た。といつてもこれは衣服や住居が變化したほど大なるものではなかつたらしい。明治以後われくは西洋風にならつて、洋服を着たり、又西洋流の小住宅や鐵筋コンクリートの大建築物を建てたりするけれども、平生の食物はやはり以前からの日本料理の方が多く用ひられてゐる。これを見ても食物の變化は、他の着物や住居の變化ほどさう大きくないことを知ることが出来る。

ご飲はこれまでのやうに米を蒸したものの外、糰といふものがある。これは「ほしいひ」ともいつて、一たん蒸したご飯をほして、からくにしたものである。兵士やその他一般の人が旅行などの時多く用ひたもので、食べる時はこれを水または湯



につけて柔らかにして食べる。その他の食物の種類も相當に殖えてゐる。今奈良に都をうつされた元明天皇のすぐ前の天皇の御代(一三六一年)に出された大寶令の調の部に出てゐる食料品の名前や、その他の記録にある食料品中の主なるものを書き出して見ると、水産のものでは、

鹽、鮒、年魚、堅魚、烏賊、鯛、鮪、鱧(かじきに似た大きな魚で肉の黄なるもの)、鰻、鰻の鮓(あはびを鹽水につけたもの)、鮎貝の酢、螺、うに、いりこ、海藻、あらめ、わかめ、昆布、海松、かじめ、のり

等があり、野菜類では、

濱菜、水葱、あをな、莖立、葵、ねびる、あさつき、わさび等

果物には

梨、棗、栗、みかん、瓜、みづぶきの實

等がある。

味をつけるものとしては、これまでの鹽の外に醬や酢があつた。醬といふのは今

の醬油よりもむしろ味噌に近いものである。かうなるとだん／＼料理の方も進歩して、美味しいご馳走が出来るやうになつた。その時の人の歌に、

醬酢にひるつき合せて鯛ねがふ

吾にな見せそ水葱のあつもの

といふのがある。これは當時の富貴の人が、醬酢に蒜をませた鯛の膾は食ひたいが、水葱のあつものはまつびら御免だ、とちよつとわがまゝをならべたところである。

佛教の影響をうけて牛馬の肉を食ふことはだん／＼少くなつた。佛教では生物を殺すことを何よりも悪いこととしてゐるから、佛教が盛になるにつれて鳥獸を殺して食ふことをきらふやうになり、一方朝廷から命令をもつて殺生を禁せられたこともあつた。天武天皇のときに、牛馬の肉を食ふ事を禁められたことは前にも述べたとほりであるが、なほ食ふものが居つたと見えて、聖武天皇の時(奈良時代の中で佛教の一番盛な時)、更に同様な命令を出されて、嚴重に取りしまるやうになされた。



しかしおいしい物は誰でも食べたいと見え、この禁令をやぶつてなほひそかに肉食をする者があつた。一般の俗人はもちろん、坊さんの中にもかやうな不埒な者が居つたといふことである。

平安朝に入つてからもしばしば殺生の禁令が出て、それに一般の人々も宗教上の迷信が深くなつて、鳥獸の肉を食ふことが少くなつたが、鎌倉、室町時代になると一般の氣風が荒々しくなつた上に、佛教の僧侶の中にも、肉食差支へなしとなへるものがあつたため、これはしめたと喜んで、肉食をするものが多くなつた。しかし公卿の多くはやはり獸肉をきらひ、又鳥獸でも無暗に食べるやうなことはなかつた。

江戸時代になると五代將軍綱吉は、坊さんのすゝめによつて殺生を嚴禁したが、それも僅の間行はれたきりで、代がかはるとこのきまりはすぐ破れてしまつた。しかし幕府でも大事な儀式のあるときには、その前後數日間は肉食をすることを遠慮したものである。

飲物には妙しいものがあつた。仁徳天皇の御代のことであるが、大中彦皇子は河内の國に獵をなされた時、庵のかつかうしたものが野中に立つてゐるのを御覽になつた。不思議に思はれたので、土地の稻置（村長）を呼んで、あれは何であるかとお尋ねになつた。すると稻置は、『あれは氷室であります。土を掘ること一丈あまり、その中に氷を入れ、かやや萩の類を厚く下に敷き上におほうて貯へて置きます。と眞夏に至るまで溶けません。これを水や酒につけて飲みますと、清涼でとても氣持のよいものであります。』と答へた。皇子はこれは妙しいとお喜びになり、早速お持ち歸りになつて、天皇に奉つた。これから毎年冬氷を藏め、これを春分に取り出して用ひるやうにしたといふことである。

外來の品で妙しいものは牛乳と茶である。牛乳は孝徳天皇のとき（一二一〇年頃）百濟の善那使主といふ人が始めて之を献つた。それから朝廷はもとより、一般の家でも滋養品——といふよりは藥——として用ひられるやうになり、大寶年間になつては政府で乳牛を飼ふまでになつた。茶は少しおくれて奈良朝に支那から入つて來



たものである。それ以來高貴の人の飲物として珍重せられ、だんく一般にもひろまるやうになつた。

### 三 平安時代以後の飲食物

衣服と住居とに一だんの進歩を見た平安時代は、飲食についても相當の注意をはらつた。したがつて飲食物の種類及びその料理法もふえて居る。

ご飯は今までの飯、ほしいひの外に粥といふものが出来た。これは「かゆ」とはいふものゝ今の粥ではなく、ご飯と全く同じもので、米を鍋釜に入れて炊いたものである。はじめの中は朝の食事だけに用ひたものであるが、後には夕の食事にも食べるやうになつた。又屯食といふものがある。これはお客をご馳走に呼んだりした時に、その從者に食べさせるもので、後の「むすび」に相當する。

食事は昔から朝と晩の二食であつたが、平安朝の末頃から晝食を食べるやうになつて三食となつた。しかしその時でも僧侶や武士の中にはやはりもとどほりの二食ですましてゐるものがあつた。今でも坊さんの中には朝夕の二食でとほしてゐるものがあるさうだ。

お米は一般に玄米のまゝつかふことが多かつたが、高貴の人は碓についたものを用ひた。昔とむらひの時、死人について行く人の中で碓女といふ女が居るが、これは死人に供へるご飯の米やその外の食物を碓に入れてつく役目の女である。しかしその時の米はつくといつても今のやうに眞白になるまで搗くのではなく、今の半搗米ぐらゐであつた。眞白くなるまで搗くやうになつたのは、江戸時代以後のことである。それからといふものは人々が白米を好むやうになつて、玄米やつき方の足りない白米は舌ざはりが悪い上に、色もよくないといつて歓迎されないやうになつた。歓迎されないばかりでなく、かやうなものを食べるとお腹を痛めるといつてはいせきされる程となつた。去る震災にも東京では四五日の玄米食でするぶん閉口したさ



うである。けれども一方に於て、白米を食すると脚氣にかゝることがあり、又滋養の點から考へても非常な損失を來すといふことで、近年玄米や半搗米又は七分搗といつたものを用ひることが殖えて來た。たゞ最初のうちは舌ざはり良くないのでまだ一般には弘まつてゐないが、米を常食とする我々日本人にとつては、その得失について大に研究しなければならぬ大問題である。

野菜や果實は前にもまして廣く重く用ひられるやうになつた。これ一には肉食を禁じたためでもあらうが、又一方料理法の發達にもよつて居る。茄子、苺、あざみ、ふき、なづな、ちさ、しぶくさ、さんせう、たで、せり、すゐき、はこ、まくは瓜、わさび、からし等奈良時代にはあまり知られてゐなかつたものが一般に用ひられるやうになつた。又果實には栗、桃、柿、梨、李、柚、みかん、びは、ざくろ、くるみ、椎、みづぶき、あけびの實等が知られて居た。

菓子を造ることもはじめて行はれた。その製法は支那から傳つたもので、米や麥の粉に甘味を加へ、それをいろ／＼の形につくり固めたものである。これを一般に

菓子と呼んでゐたが、木になる菓子と區別するために唐菓子といふこともあつた。その種類にはおこし、むぎかた、せんべい、ふと等があつた。甘味をつけるためには初めはもつぱら甘藷をせんじた汁をつかつたものであるが、支那との交通が盛になると砂糖も輸入されるやうになり、徳川吉宗のときには日本でも甘蔗を植ゑそれで砂糖を造ることが始つた。

餅は廣く世に行はれて、祝賀などある時にはいつでもこれを造つた。その種類にも、ちまき、くさもち、大豆もち、小豆もち等がある。

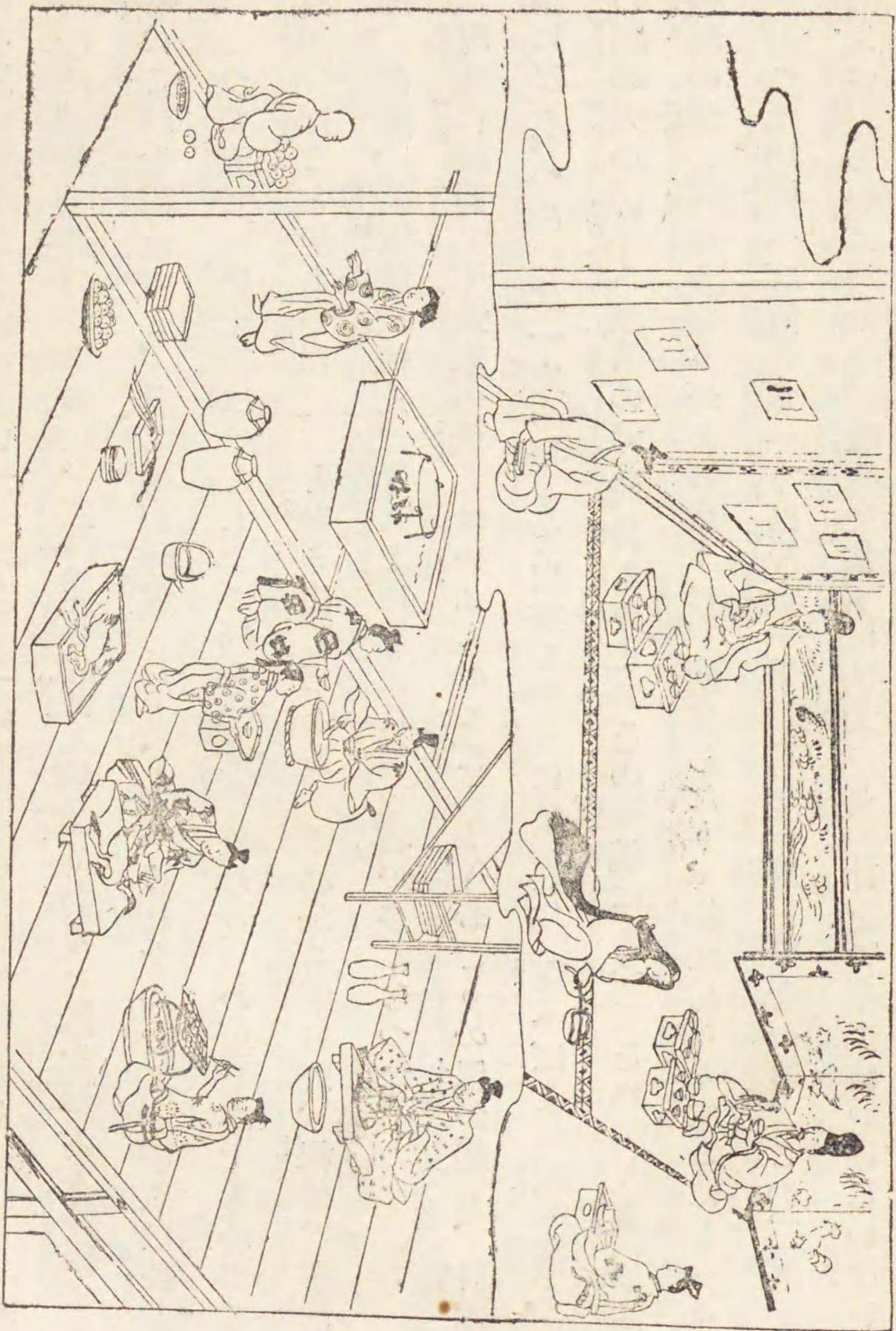
以上の如く食物の種類も非常にふえて來たが、その中もつとも好んで食べたものは、あはび、かつをの乾したもの、わかめや昆布の類、果實では栗、柿などであつた。後世食物の風が次第に變つて行つたが、なほ儀式の場合にはこれ等祖先の好物を用ふる風があつた。今日でも正月の儀式、婚禮のお祝ひなどにはやはりのはあはび、かつを節、昆布、くし柿等を用ふるのは古俗を尙んでこれを捨てない名残りである。祖先のこともしのばれてゆかしい。



鎌倉時代の武士は食物の上にも質素を旨とした。執権北條時頼がある夜使をやつて従弟の大佛宣時をまねき、自分で銚子、土器を持ち出し、『この酒を一人でのむのはさびしいからお呼び申したのである。肴はなくても何かあるだらうからさかしてくれ。』といった。そこで宣時は紙燭(紙をまいて蠟をぬつたもの)をともし、臺所をさがし、棚の隅の小土器に味噌が少し残つてゐるのを見付けて持ち出したところが、時頼は『これで結構』といつて、二人で杯をかたむけて楽しんだといふことである。

奈良時代以後、麥を植ゑることを奨励して飢饉の場合に備へたけれども、人民はこれを喜ばなかつた。ところがこの時代に至つて、貧民は麥飯を用ふることが多くなり、だんく一般にも注意されるやうになつた。

茶は、奈良、平安の時代から世に行はれたけれども、いつしか中絶してゐた。ところが鎌倉時代のはじめ建久二年に僧榮西が支那から歸るとき茶の實を持つて來て、



室町時代の御馳走



これを筑前國せぶり山にまいた。そして一方喫茶養生記といふ本を著はし、茶徳を讚美した。其の書のはじめに、「茶は生を養ふ仙薬である。齡を延ぶる妙術である。山谷にこれを植ゑると、其の地が神靈となり、人がこれをのむとその人は長命をする。よつて天竺や唐土ではひとしくこれを珍重してゐる。わが日本でもかつてたしなみ用ひたことがあつた。」と書き出してある。これから春日野、梅尾、宇治、仁和寺、醍醐、葉室等に植ゑ、世人これをたしなむ者が多くなつた。

室町時代は同じく武家の世とはいふものゝだん／＼おごりの風が起り、料理法も複雑になり、つひには一定の型まで出来るやうになつた。例へばまな板の高さ長さ、其の脚の大小、庖丁、魚箸の寸法、持ち方までその流儀によつてそれ／＼定つて居た。料理の法に種々きまりがあるやうに、飲食したり、給仕したりするにも一々その式があつた。例へば飯の食べ方は左を一箸、右を一箸、向を一箸、この三箸を一口に食ふべしといふが如き、吸物を食ふには先づその汁を吸つてはいけないといふが如き、その他配膳の仕方、箸のとりやう、再進のかへやう等わづらはしいほどにき

まりがあつた。

江戸時代になつては野菜果實の類を外國から輸入したのも少くなかつたので、日常の食料品もその種類がすこぶる多くなつた。食時の度數はこの頃は一般に、朝正午晩の三度となり、農民などのやうに勞働する者は五六度に及ぶこともあつた。米は前にも述べたやうに、この時代からほとんど白米を用ふるやうになつた。卑賤の者のご飯は米に麥を交へることも少くなかつた。交へるときには大てい米七分に麥三分の割合で、これを普通麥飯と名付けた。幕府の方でも卑賤の者が麥飯を用ふることを奨勵し、時には、百姓の食物は常に雜穀を用ひよ、米はみだりに食へてはならぬと命令を出したこともさへあつた。ご飯はまたその時節に適する食品を交せて炊くことがあつた。例へば春に菜めし、つくし飯、筍飯、豌豆めし、鯛めし、夏にたで飯、蓮めし(蓮の葉を蒸して刻み飯にませたもの)、秋に松茸めし、栗飯、芋飯、冬にんじん飯等である。又四季を通じて胡麻飯、茶めし、五もく飯等があつた。平生用ふる所の汁は多くは味噌汁、醤油汁で、その外すまし、洗味噌汁、おから



汁等も用ひられた。又汁の實と製法によつて、薩摩汁、鯉こく、茄子の松もどき、どちやう汁、のつべい汁、たぬき汁等の名あること今とほとんど變りない。

料理屋、茶屋、御手輕料理屋もだん／＼多くなり、又一方飲食物を行商する者もふえて來た。この時代に始めて出來たものとしては天ぶら屋がある。天ぶらは寛永の頃(三代家光の時)からあつたが、後江戸日本橋の吉兵衛といふ者がこれを精製して、特に天ぶら専門の店を出したのがその始りであると言はれて居る。又吉宗が將軍であつた頃、京都の佐野屋嘉兵衛といふ者が、長崎から歸つて來てシツポク料理を始めた。これは支那風の料理である。その後これに葱を加へて南蠻といひ、更に鴨肉を加へて鴨南蠻といつて、一般に賣出された。

江戸時代になつて、一般の人が好んで用ひたものに煙草がある。煙草は室町時代の末に南蠻人(その頃イスパニア、ポルトガル、イギリス人などをすべて南蠻人と呼んでゐた)がはじめて傳へたものである。信長の頃にはやくもあちこちに植ゑられるやうになり、秀吉のときになるとほとんど全國にひろまるやうになつた。始め

は葉卷のまゝすつてゐたが、後にはこれを刻んで紙に巻いて今の巻煙草のやうにし更に後になつては刻んだものを煙管で吸ふやうになつた。その當時の煙管は非常に長いもので、中には長さ三尺もあるものがあつて、それを腰にさし或は下人に持たせて外出したものであつた。今我々が朝鮮の風俗に見るやうなものであつたらう。幕府は、人々が煙草を吸ふために無益の費用を要し、又健康を害することをおそれ、早くも慶長十二年(二代秀忠のとき)に、煙草をのむことを禁じてゐる。然るにしばらく経つときまよりもゆるみ、人民もだん／＼吸ひ出して、つひに家々の客室には必ず煙草盆に煙管を置くやうになつた。この風が今のわれ／＼に傳つたのである。



### 祖先の産業

未開野蠻の人間のやうに、穴に籠つたり谷かげに隠れたりして定つた家がなく、食事も食べたい時には、或は河海に行つて貝や蛤や魚を取つて食ひ、或は山に狩して鳥獸の肉を食つたりしてゐる間は、産業もしごく幼稚で、むしろないと言つても差支へないほどである。然るにそれが定つた家に住み、念の入つた着物を着、手數のかゝつた食物をとるやうになると、産業も複雑になり、又一々の産業についてもだん／＼進歩した方法を考へ出すやうになつて来る。

すでに述べたやうに、われ／＼の祖先はとうの昔から相當に進んだ生活をしてゐたので、産業の方面にもまた見るべきものがあつた。今その昔をふりかへつて見よう。

### 一 太古の産業

誰が言ひ出したか知らないが、わが國は大昔から「瑞穂國」とよんでゐた。それは穀物がみづ／＼しくよく實る國だといふ意味である。天照大神も天孫ニニギノ尊に、

「豊葦原の千五百秋の瑞穂國は、わが子孫の王たるべき地なり……」

と仰せになつてゐる。又大神が人民に田畑を耕し、粟麥稗豆を陸に植ゑ稻を水田にうるることをお教へになつたといふことは、すでに皆さんのよく知つてゐるところである。

かういふいろ／＼の事柄から考へて、我々の祖先は大昔から農業をしてゐたことが分る。しかもその農業は産業中のもつとも大事な仕事であつたといふことも想像



出来る。かつてスサノヲノ尊が大そうお立腹になつて、高天原に行かれた時、大神がお作らせになつてゐる田の畔をこはしたり、溝を埋めたりなされたさうであるが、つまりそれはもつとも大事な仕事のじやまをなされたわけである。だから他の神々はお腹立ちになつて、大神にスサノヲノ尊を罰するやうにおすゝめしたのである。

また大昔の罪に、天罪と國罪といふ二つの大きな罪があつたが、その天罪に入るものにはアハナチ、ミヅウメ、シキマキ、クシサシ等がある。アハナチといふのは田のあせをこはすことで、ミヅウメは田畑の溝をうめること、シキマキは一度蒔いた所へ更に外の種子をまいてじやまをすることを言ひ、クシサシは田畑に串をさして耕す人をけがさせようとする悪いいたづらを云ふのである。これらの罪を見ても皆農業のじやまをした時のものばかりである。どれほど農業が大事にされてゐたかを知ることが出来る。

ニニギノ尊、天照大神を始め多くの神々、又代々の天皇が國を富まして民を安らかにするために農業を奨励なされたことは歴史の示すところである。だから大昔の用とすることを嫌つたほどである。

祖先は、肉食が好きであつたにもかゝはらず、耕作を助ける牛馬の肉だけは之を食用とすることを嫌つたほどである。

蚕を養ふことも、農業の副業として大昔から行はれてゐたやうである。言ひ傳へによると、オホグツヒメノ命がスサノヲノ尊に殺され給うた時、命の眉から蚕が生れたといふことであり、又天照大神は人民に蚕を飼ふことをお教へになつたさうである。

農業以外のものでは漁獵がひろく盛に行はれてゐた。わが國は四面海をめぐらしてゐる上に、内地にも縦横に川が走つてゐるから、漁業はいたる所で行はれた。先住民が貝や蛤を食べたやうに、われわれの祖先も貝や蛤をはじめ色々の魚をとつて日常の食物とした。ことに魚類は重要な食品の一つであつた。當時我々の祖先に廣く知られてゐた魚には、海鼠(なまこのこと)、すしき、たひ、赤だひ、あかめ、みち(あじかに同じ、皮を敷物に用ひたらしい)、あゆ、鯨、いるか等がある。



漁獲の方法としては釣針や網を用ひた。また時には簀を用ひたこともあつたらしい。今でも魚を取ることを「スナドリ」といふが、それは簀で魚(古い言ひ方)を取るからさう言はれたといふことである。今一つ妙しいことは、この頃早くも鵜飼があつたことである。神武天皇が大和御平定の時、吉野川の河尻で鵜飼を業としてゐるニヘモツ子といふのがお助け申したと記紀に書いてある。

山の近くに住んでゐた祖先は鳥獸をとることが好きであつた。その方法は、ワナをこしらへて置き、獸類を四方から追ひ立て、そのワナにかけて取ることもあり、或は弓矢で射殺してとることもあつた。取つて來た獲物は肉を食ひ皮を着物や敷物に用ひた。崇神天皇が始めて租税をおかけになつた時、男の方からお取りになつたものは「弓弭の調」といつて、狩で獲た獸類であつた。男にとつて狩獵はそれほど大事なものであつた。だから一般の男子はもとより、高貴の方もこれをなされたやうである。かの大國主命のお子さんの八重事代主命は、みほが崎ですなどりすることをこの上もない樂みとせられた。またニニギノ尊の御子ホヲリノ命は、釣竿を持つて

海に行かれる事が毎日の日課であつた。ホテリノ命御兄弟についてこんな話がある。

ホテリノ命は釣竿を持つて海に行かれ、弟のホテリノ命は弓矢を持つて



て山に行かれるのが毎日の仕事であつた。ところが毎日同じことをくり返したんでは面白くないと見え、ある日ホテリノ命は兄さんに願つて自分の弓矢と釣竿とをとりかへて貰つた。



命は釣竿を持つて喜んで海に出かけられた。然るに不幸せなことに魚一匹も釣らないうちに肝心の釣針を魚にとられてしまった。そこへ兄さんが来て、『どうも名々のものが良いやうだ。君の弓矢を返すから僕の釣竿も返してくれ』と言われた。ホチリノ命は事の次第を話して大いにわび、その上御自分の剣をこはして五百の釣針を作つて兄さんに差し上げた。ところが兄さんは承知しない。弟はさらに一千釣針を作つてさし上げたけれども許して貰へない。もとの釣針を返せとさん／＼せまられた。ホチリノ命はどうすることも出来ず、海邊でしく／＼泣いてゐると、シホツチノ神が現はれて、『どうして泣くのです。』ときかされた。命は事の仕末を話された。すると神は、『それでは私が良い考を教へて上げませう。丈夫な小さい船を造つて海の神さまのところへ行きなさい。そこへ行けば失くした釣針の行方が分り、容易にそれを取返すことも出来ませう。』とていれいに教へてくれた。命は喜び勇んで早速教へられた通りにした。

海の神さまのところへ行くと豊玉姫といふきれいな姫様が案内して

命をきれいな宮殿にお通し申し、色々の御馳走をつくつて大へんのおもてなしをした。命はとう／＼姫様と御夫婦になつて楽しく海の神さまの宮でお過しになつた。ところが釣針のことはどうしても忘れることが出来ず、ある日一人で心配してゐらつしやつた。それを豊玉姫の命が御覧になり、その譯を尋ね、さらにその事を父の神に申し述べた。海の神は『それでは早速その釣針を探ませう。』といつて大小すべての魚類を集め、『若しや釣針のんだものは居ないか。』とたづねた。するとたひがこれをおんでゐることが分つた。そこで命は大事な釣針を取返すことが出来、急ぎ歸つてこれを兄さんにもどした。後ホチリノ命は大そう御立派な方となられて、國中をお治めになつた。神武天皇はこの命の孫にあたらせられる。

工業も可成り進んだものがあつた。麻や蚕の糸をつむいで織物にすることは、すでに天照大神の時から行はれてゐた。また刀劍や鏡（その頃の鏡は硝子製の鏡でなく鐵製であつた）、玉飾りを造ることも古くからあつた。天照太神が天の岩屋にお



かくれなされた時、多くの神々が相談の結果、イシヨリドメノ命に鏡を、玉の祖の命に八尺にのまが玉を造らせ給うたといふ話は皆さんのよく知つてゐることとせう。けれども當時一般の工業は、今から見るとごく幼稚なもので、これがいちじるしい進歩を見たのは、やはり朝鮮や支那と交通をするやうになつてからのことである。商業はどんな風であつただらうか。大昔の人々は、何でも自分に要るものは自分で作つたので、外の人から買ふといふこともなければ、又外の人に賣るといふこともなかつた。だから商賣はほとんどなかつたといつても差支へない。しかし言ひ傳へによると、スサノヲノ尊は船をお造りになつて、朝鮮と交通をして居られたさうだから、幾分か商業らしいことが行はれてゐたと思はれる。もしこれが事實だとすれば、尊は我が國での商業の元祖といつても差支へない。大阪市中の島にある中央公會堂の貴賓室の壁に、商業の元祖としてスサノヲノ尊を畫いてあるが、それは多分かうした言ひ傳へからとつたものであらう。

要するにいろ／＼の點から見て、大昔のわれ／＼の祖先は商業者でもなければ工業者でもなく、やはり瑞穂國の忠實なる百姓であつた。

## 二 氏 と 職 業

我々の祖先は氏と姓を區別して使ひ、しかも氏といふものを非常に重んじた。氏は同家一族の意味で、すなはち中臣氏、大伴氏、藤原氏、源氏、平氏などのやうなものであるが、姓は臣、連、首、朝臣などの如く、氏の尊卑をあらはす名で、今の華族の爵のやうなものである。例へば中臣連鎌子の、中臣は氏で家の種族、連は姓で家の格、鎌子は名である。柿本朝臣人麻呂なども同様である。

それでは何故氏がそれほど重んぜられたか。それは氏と姓、氏と職業が深い關係をもつてゐたからである。今氏と職業の關係を少しく述べて見よう。私はすぐ前にわれ／＼の祖先は自分に要るものは何でも自分で作ると言つたが、それは下々の一



般人民のことであつて、高貴の方は必ずしもその通りにはなつてゐない。高貴の人には多くの家來があつて、その中には主人のために田畑を耕す者もあれば、食器を造る者もあるし、又武力を以て主人を護衛する役をつとめる者もある。之が氏と職業が深い關係をもつやうになる理由の大なるものである。いま天皇の家來である多くの人民に例をとつて、氏と職業の關係を説明して見よう。

皆さんは、日本中で自分より強い者はないと威張つてゐたタイマノケハヤと角力をとつて、みごとにケハヤをなげつけた野見宿禰を知つてゐるでせう。宿禰は角力が強かつたばかりでなく、考もすぐれてゐた。その頃まで貴人がなくなると、その家來のある者は死んでお供をしなければならなかつた。それを殉死といつて、悪い風習とは思ひながら、引きつゞいて行はれてゐた。宿禰はかはいさうなことだと思ひ、天皇に申し上げて、殉死をする人々の代りに土製の人形を墓のまはりに立てることにした。天皇は大そうお喜びになつて、宿禰に土師連といふ姓をたまはり、以後多くの土師部の頭となつて、代々朝廷の祭祀の道具を造るやうにと仰せられた。

この外中臣氏は祭祀のことをつかさどる家柄であり、大伴氏と物部氏は武士として朝廷をお守りする家であつたことも、皆さんはよく知つてゐるでせう。その他朝廷には玉飾りを造る玉造氏、鏡を造る鏡作氏などたくさんの家來があつて、それぞれの職業をもつてお仕へしてゐた。

かうした祖先の職業を、その子孫は次々に傳へて行くのである。だから昔の人々はその人がどんな人物であらうとそれにはあまり關係なく、大工の子は大工、大臣の子は大臣といふ風に、親ゆづりの職業がちやんときまつてゐたわけである。こんなやり方は今から考へると誰でも悪いと思ふが、その當時はさう悪いことでもなく、むしろ良い點が多かつた。ところが世の中が進んで來ると、このやり方は良くない。ことに蘇我氏が盛んになつた頃には非常に悪い結果を生じたので、中大兄皇子、中臣鎌足等は、蘇我氏を亡すと共に、今までのやり方を改めて人材登庸の途を開かれた。これはすぐれた人であれば身分の低い家に生れた者でも大臣や大將にしてやるといふことである。



かう改まつたとはいふものゝ、その實際を見るとやつぱり家柄によつてその職業が大體定つて居たらしい。平安時代や、すつと後の江戸時代までも事實この風がかなり残つてゐた。今でも商人や職人などにはこのやり方を行つてゐる者が多い。やつぱりどこかに良いところがあるのでせう。

### 三 支那朝鮮と交通後の産業

支那朝鮮と交通した結果、わが國の産業は長足の進歩をなしたが、中でも工業の發達はもつともいちじるしいものであつた。應神天皇の御代に朝鮮から王仁といふ學者が來たとき、それと一しよに鍛冶屋の卓素といふ者や、機織をよくする西素といふもの、酒を造ることのうまい仁番といふ者も渡つてきた。その後朝鮮の王さまが裁縫の上手な女を送つたこともあり、支那の秦始皇帝の子孫だといはれる弓月君

が百二十七縣の民を引きつれて我が國に歸化したこともあつた。又支那から來た阿知使主といふ學者は勅を奉じて支那の東南部にあたる吳の國から織女、縫女を呼びよせた。これらの人々はいづれも養蚕や機織にすぐれてゐたから、朝廷ではこれをお用ひになつて、養蚕機織を奨励なされた。

次の仁徳天皇は、これらの人々を諸郡に分けて住まはせ、蚕を養ひ絹を織ることを職業とするやうになされた。秦氏、服部氏等はこれ等の人々の子孫だといはれてゐる。

雄略天皇もまた大いに工業を奨励なされた方で、朝鮮から陶工、畫工などを召し、支那から縫女、織女をお呼びよせになつた。そして全國に良い土地をえらんで、桑を植ゑる蚕を飼ひ機を織ることを奨励なされた。皇后ハタヒ姫は溫良の徳高く、よく天皇をたすけ奉り、ご自分で桑をつみ蚕を飼ひ、人民に模範をお示しになつた。小子部のすがるが蚕と子をとちがへて、子をたくさん集めて來たのもこの時の出來事である。



「すがる」といふ人は、大力で無邪氣であつたので、雄略天皇に可愛がられてゐた。ある時、天皇は養蠶を盛にしようとおぼしめし、それには先づよい種が必要であるから、「すがる」を呼んで、

「汝に申しつくる。此より國々を巡つて好い蠶をさがし集めてまゐれ。」とおほせつけられた。「すがる」は、かしまつて早速出かけた。「よいこ」をさがして来いと命令である、さあ、どうぞ「好い子」が見つければよいがな、澤山集めたら中にはお氣に入るのがある、さうなものだ、と思ひ、村々に行つては、

「さあ、子があつるものは出せ、好い子は天皇の御用に立のたぞ。」とふれまはると、天皇の御用とあれば、どんなことでも勤めたいと、平生思つてゐる日本人のこと、「私のが好い子」、「いや家のがもつと好い子」と競うて出すので、忽ちに「好い子」が何百人と集つた。もうこれだけあつたら好からうと、「すがる」は之を引連れて、どやどやわい／＼宮中に歸つて来た。天皇は之を覧になつて「すがる」が氣がちがつたかとお驚きなされた。が、「子」と「蠶」の間違ひといふことが判つて大笑ひとなつた。せつかく集

小子部の連



めて来た子供だから、そのまゝ「すがる」にあづけて大切に育て、それぞれ立派な人になした。

小さい子供の頭になされたので、「すがる」には小子部の連といふ姓をくださつた。(古事記繪ばなし)

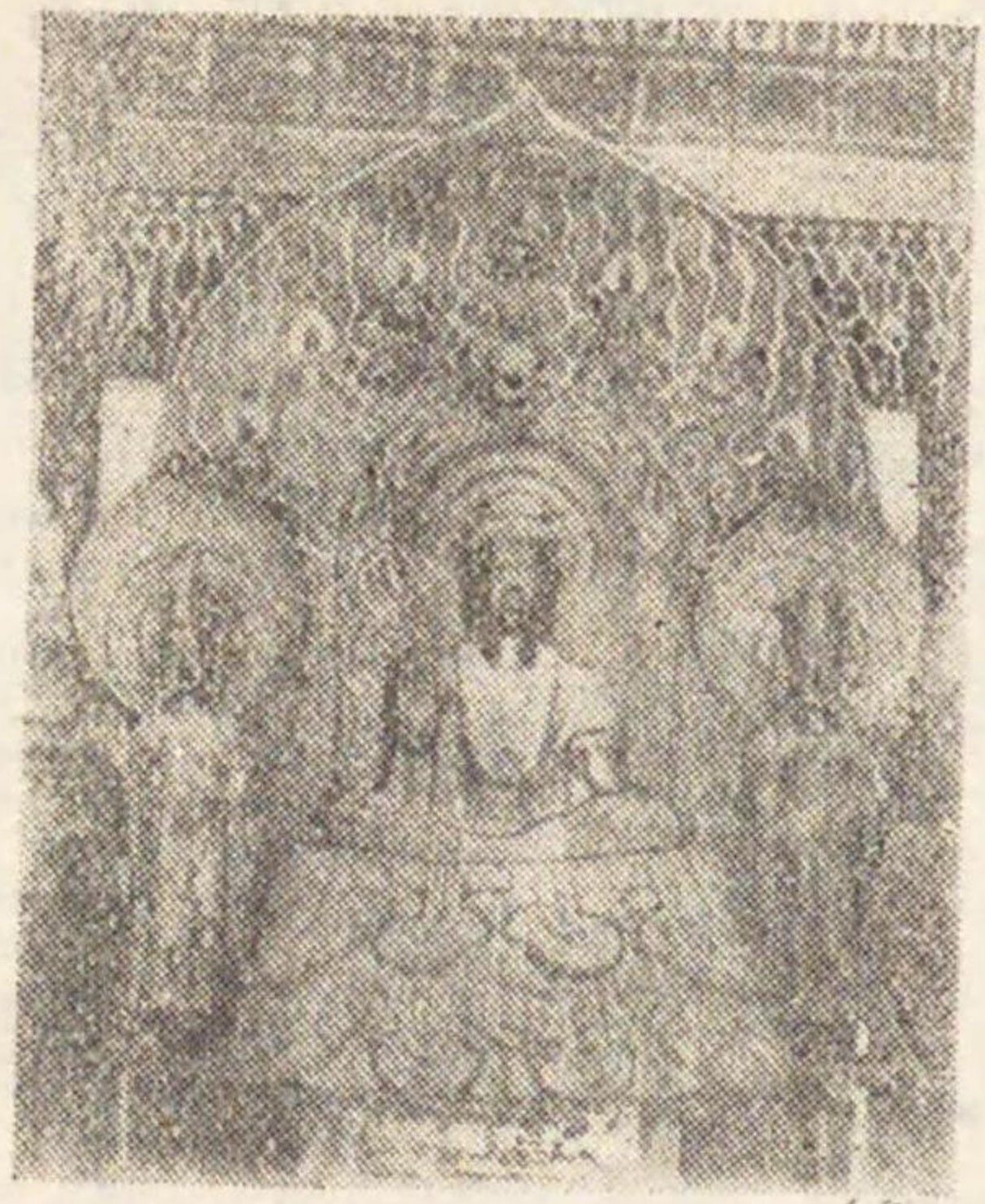


建築術も同時に進んで来た。雄略天皇のときには、支那風の立派な御殿も出来るやうになつたが、これを一そう進歩させたのは佛教の傳來である。

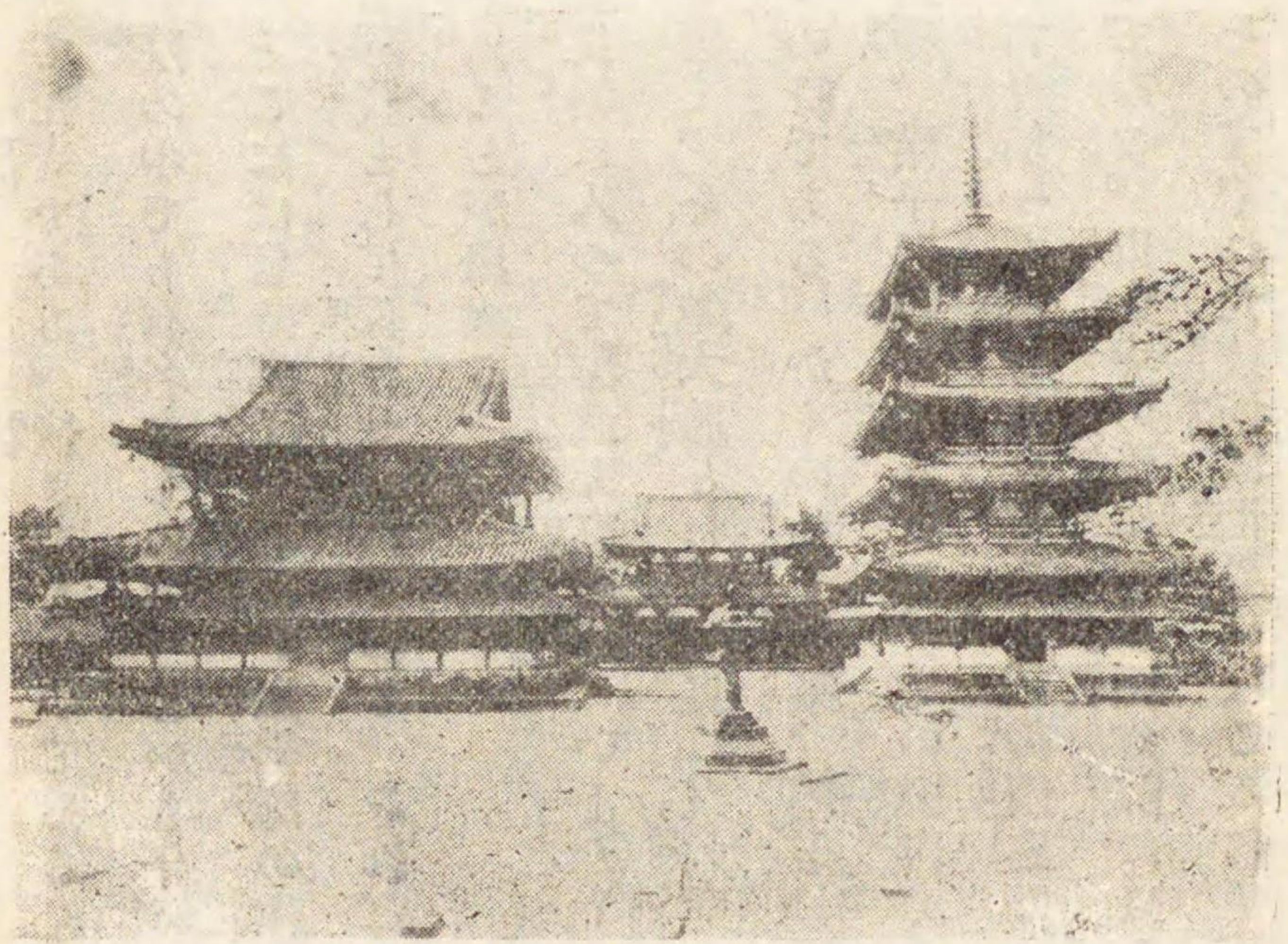
佛教は皆さんもよく知つてゐるとほり、欽明天皇の時に百濟から我が國に傳つたものである。始めの程は物部氏、中臣氏が蘇我氏との間に之を信ずることについての争ひがあつたため、あまり振はなかつたが、佛教が自然と勢を得るやうになつた。物部氏が、蘇我氏のために殺されたので、佛教黨が自然と勢を得るやうになつた。そこへ御英明な聖徳太子が深く佛教を信せられ、且つ之を廣くおひろめになつたので、佛教はいよ／＼盛になつて来た。それと共にやうやく盛になりかけた美術工藝ならびに建築術はいよ／＼發達するやうになつた。それは何故でせう。

佛教が盛になればなるほどお寺がたくさん建つやうになる。しかも佛教は日本に始めて傳つて来たのであるから、それをひろめるためには、今までのお宮などよりは大きなもの、立派なものを造る必要がある。又そこへまつる佛像にしても出来るだけ立派なものを選ぶ必要があるから、建築や繪畫、彫刻の技術が自然と發達するや

(上圖) 法隆寺金堂の内佛



(下圖) 法隆寺金堂及び五重塔





うになる。大和の法隆寺は、その頃建てた寺である。皆さんも知つてゐるとほり、法隆寺は聖徳太子のお建てになつた寺院の中でも有名なもので、しかも今残つてゐるお寺ではもつとも古いものである。そこには當時佛工で名高い鳥佛師の作や、その頃のすぐれた美術工藝品が、今でも國寶として保存せられてゐる。それだけを見ても、當時の美術工藝の進歩をうかがふことが出来る。

かうして進んで來た美術工藝は、奈良朝に入つて聖武天皇の時、いよ／＼その極盛に達するのである。諸國に國分寺を建て、その總大將として奈良に東大寺を建立し、その本堂に大佛を安置したのもこの時である。かくの如く建築、繪畫、彫刻をはじめとし、織物、ししう、漆器、鑄物、硝子器等に至るまで、その製作美麗精巧をきはめ、中にも彫刻の立派なことは古今第一と稱せられてゐる。美術史では特にこの時代を天平時代といつて重要視してゐる。東大寺の傍にある正倉院にはこの時代の美術工藝品を多く藏めてあるが、そのすぐれた技術は世界にはこるに足るといふ批評がある。

商業もだん／＼起つて來た。朝鮮や支那と交通をするやうになつてから、彼地の立派な物が欲しくなり、また彼地の人々も儲けようと思つてしきりに九州方面にやつて來た。仁徳天皇も外國との交通貿易を盛にしようとお考へから、都を難波すなはち今の大阪におうつしになつたといふことである。

しかし本當の商業らしい商業が始まるのは、やはり奈良朝以後である。それは奈良朝のはじめ、元明天皇の和銅年間に、我が國で始めて貨幣を造つたからである。それでは、それまではどういふ方法で物の賣買をしてゐたらうか。前にも話したやうに、昔の人は自分に要るものは自分で作つたのだから、物を賣買する必要はほとんどなかつた。しかしどうしても物を買はなければならぬ時には、物々交換といつて物と物とをとりかへるのである。例へばこゝに米は充分あるけれども、反物がなくて困つてゐる人が居るとすれば、その人は反物をよけいに持つて居る者がさがし出して、自分の米とその人の反物とを交換する。それを甘くさがしあてたら



良いが、もしも反物は持つてゐても米なんか欲くないといふ人だと、交換は成立たぬことになる。ずるぶん不便な話でないか。

かやうな不便をのぞくために、貨幣といふものが考へ出される。今は貨幣といへば大てい銅か金銀に定つてゐるが、昔は必ずしもさうではなかつた。貝の貨幣もあれば石の貨幣もあり、又布を貨幣にしたこともあつた。今でも南洋土人の中には石の貨幣を使つてゐる者がある。しかし我が國で造つた貨幣は貝でもなければ石でもなく、實に銅錢であつた。圖はその貨幣を示したもので、上が表で下が裏である。かやうに便利な貨幣を造つたことは造つたものゝ、最初のうちは之をきらつて誰も使ふものがなく、矢張りもとどほりの物々交換をつゞけてゐた。朝廷でも之ではいかぬとお考へになり、色々の方法をもつて使用をおすゝめになつた。貨幣を多く有つてゐる者に位をおさづけになつたのも、この時の奨勵の一法であつた。これから貨幣を使ふものが次第にふえ、そのうち便利なことも分つて、つひに賣買はすべて貨幣で行はれるやうになつた。これがもととなつて商業はだん／＼發達を見るやう

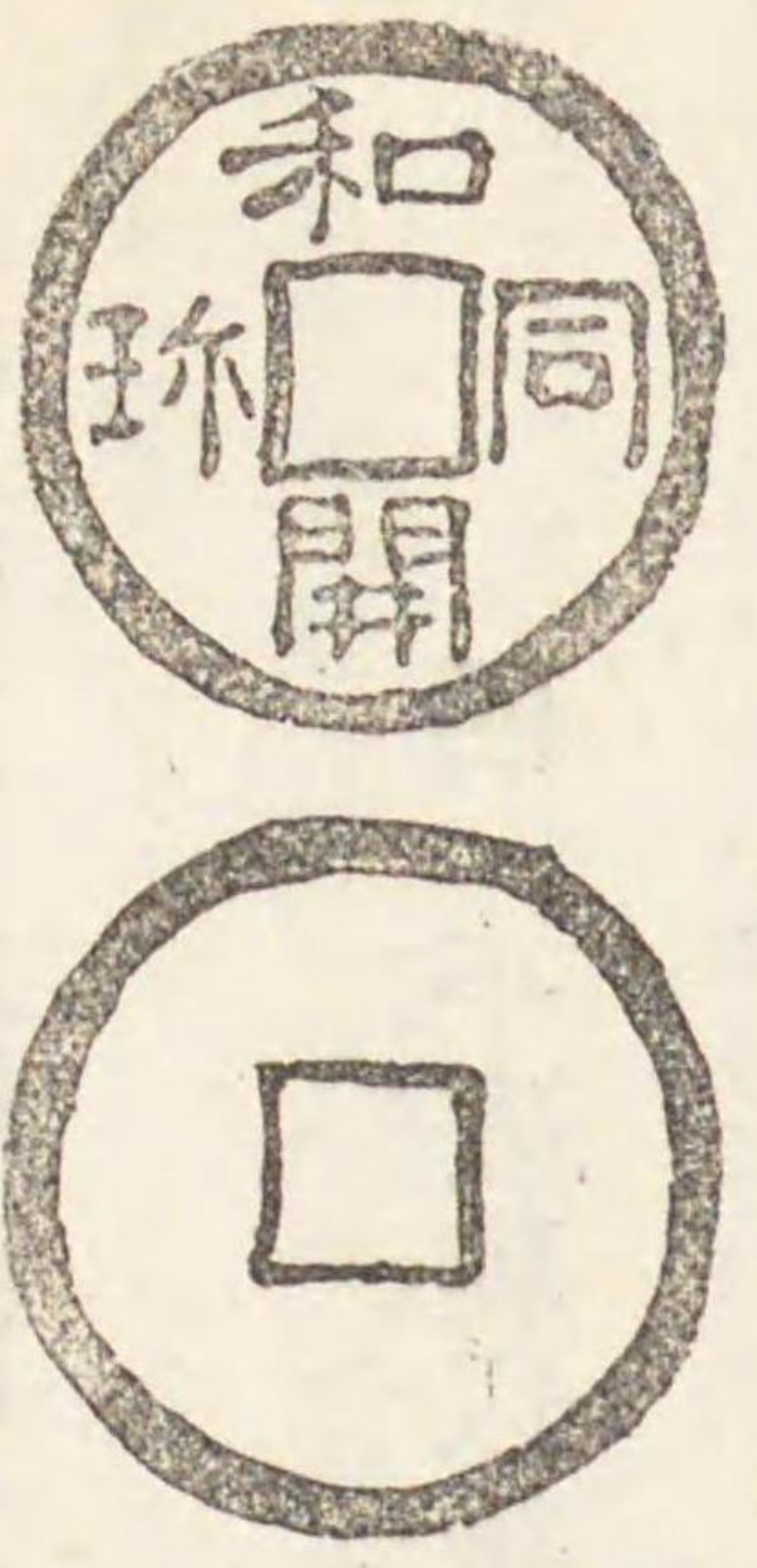
になつた。

農業にも變化が起つた。これまで土地所有のきまりが良くなかつたゝめに、勢のあるものはだん／＼土地を奪ひ取つて大きくなり、貧しい者はいつまで経つても貧乏で苦しまなければならぬ有様であつた。蘇我氏がわがまゝをするやうになつたのも、かうして取つた澤山の土地と多くの

手下を有つてゐたからである。

そこで中大兄皇子と中臣鎌足は、大化改新の時、今迄の制度を改めて新しいす

ぐれたきまりをお立てになつた。そのき



我國で初めて出来た貨幣

まりによると、全國の土地を皆朝廷に取上げて、これを人毎に一樣に貸してやるのである。すなはち男女が六歳になると、金持でも貧乏人でも男は一人について二段女はその三分の二を貸し與へる。そして六年に一回しらべて、死んだ人の田は取りかへし、新たに六歳になつた者には新しく貸してやるのである。かういふやり方を



班田收授法といつて、支那ではかなり古くから行はれて良い成績をあげたものであつた。それを皇子は御採用遊ばされたわけである。

この外功績のある人には特に田地を賜はり、又開墾をした者にもその土地を興へるきまりもあつた。

これからだんく田畑も開け、農業も盛になるやうになつた。

#### 四 平安朝以後の産業

奈良朝以來生活の程度が次第に高くなつて來た上に、桓武天皇はじめ代々の天皇が産業を奨励なされたので、諸種の産業はますます進歩の色を見せた。今の店にあたる店家が出來て、品物を販賣するやうになつたのもその一つのあらはれである。ところが太平久しく打ちつづくにつれて、上下一般に安逸をむさぼり、朝臣は政

務を怠つて詩歌管絃の遊にふけり、或は誦經修法の行事（僧侶をよんでお經を讀ませ、いろ／＼の佛事を行ふこと）にその日を費すことが多かつた。それで切角盛になりかけた産業もまた後ささりしなげばならぬやうになつた。ことに地方の政治みだれ、盜賊四方に出沒して商品をかすめ、旅人をおびやかすことが多かつたため産業はもつとも大打撃をうけた。かの大江山の酒頭童子をはじめ袴垂、鬼童丸などが出て人々をなやましたのもこの頃のことである。

また宇多天皇の時に遣唐使をやめられたので、外國との交通貿易も自然衰へるやうになつた。

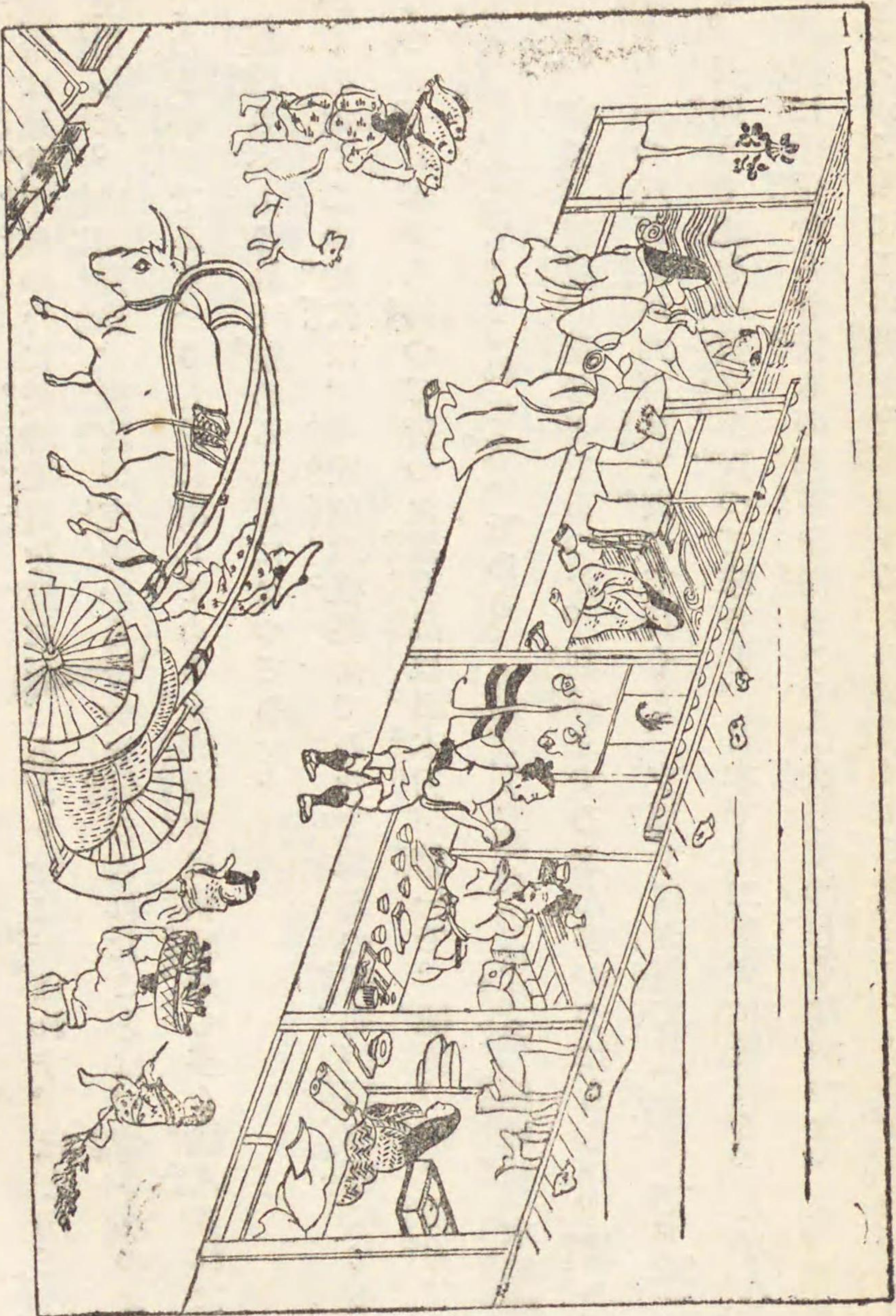
かやうに内外色々の原因で諸種の産業振はなくなつたが、ひとり建築美術工藝の技術は一大進歩を見ることが出來た。前に述べた寢殿造りの家屋や、衣冠東帯、十二單衣の服装によつてもその大體を知ることが出來る。また藤原頼通の作つた宇治の鳳凰堂、遠くは奥羽の一隅に建てられた中尊寺は今に遺つて、當時の榮華と技術の進歩を物語つてゐる。



ついで源平戦亂のために、諸種の産業は一時衰へたが、やがて幕府の基礎がたくなるにつれてだん／＼と發達を見るやうになつた。とりわけ武家時代のことから武器武具の進歩したことは無理もない。甲冑では明珍家に名高い人を多く出し、刀劍では京都の栗田口吉光、鎌倉の岡崎正宗など有名である。外觀はそれほどきれいでもないが、切味のよいことさすがは日本刀の名にはちない。

陶器は尾張の人加藤景正が、わが製陶術の幼稚であることを残念に思ひ、僧道元について支那に入り、製陶術を研究すること五年、後堀河天皇の御代に歸朝し、尾張の瀬戸に新しくかまを開いた。これから技術もだん／＼進み、瀬戸は陶業の一大中心となり、つひに陶器を總稱して瀬戸物と呼ぶ程になつた。近江の信樂焼、備前の備前焼などもこの頃すぐれたものであつた。

商業もまた盛になつて來た。その時市場には米座、油座、酒座、魚座、布座、材木座など多くの座（専賣店ともいふべきもの）があつて、商品をそれ／＼分業賣買してゐた。又中には手賣、振賣といつて、座を有たず物品を持ち歩いて賣る商人も



室町時代の商賣



あつた。

貨幣は建武中興の時に乾坤通寶を鑄たが、あまり世に行はれず、ほとんど外國錢を使用した。足利義満、義政が支那からお金を仰ぎ入れたことは、皆さんのよく知つてゐる事柄である。さしるに出してゐる永樂通寶は當時最も多く輸入された貨幣で、租税さへもこれで納めることになつてゐた。

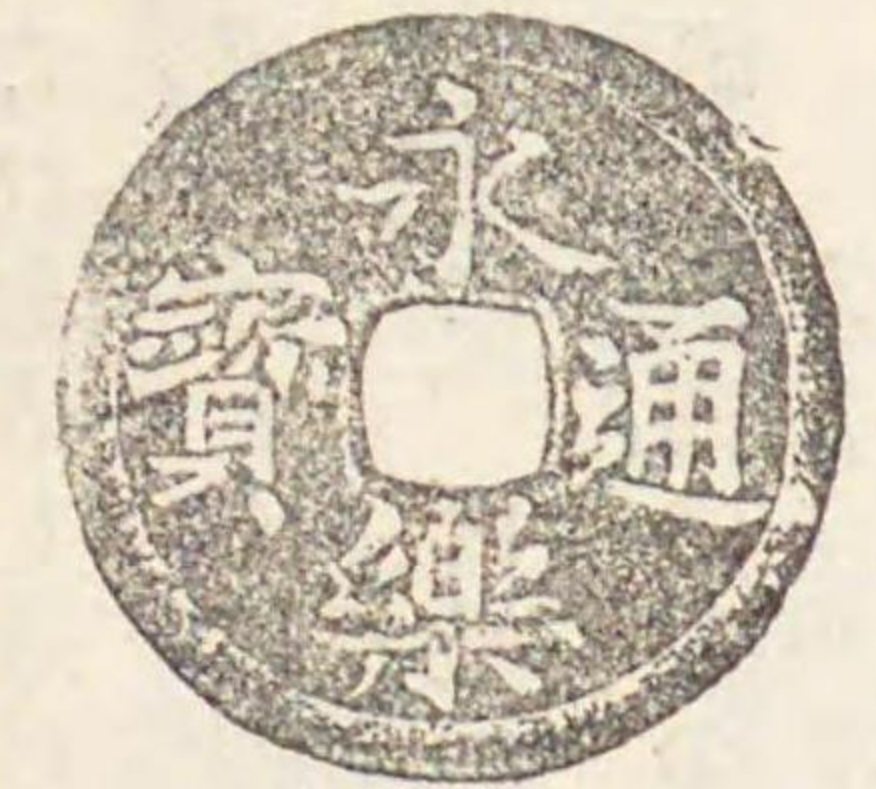
かくの如くこの時代は、平安朝以後絶えてゐた支那との交通が再び盛になるやうになつた。日本から持つて行つた貿易品は日本刀が第一で、硫黄、銅、長刀、槍、扇、金時繪の漆器などこれに次いでゐる。支那から來たのは生糸、絹織物、木綿織物、綿、鐵、銅錢、書物、藥などであつた。利益もずるぶん多かつたらしい。例へば、日本刀を一つ八百文か九百文で買つて行くと、支那では五貫文(一貫は一千文)に賣れる。又向うで綿を一貫文で買つて來ると、日本では二貫文に賣れる。こなん調子で一航海に十倍から廿倍もの利益を得ることは決して妙しくなかつた。ところがこゝにこの貿易を邪魔するものが現はれて來た。それは海賊である。ち

やうど平安朝の末に鬼童丸や袴垂などの盜賊が出て人々をなやましたやうに、これ



寇 寇の海賊は主に支那貿易船を目がけてわがまゝに振舞つた。ことに支那朝鮮に行つては、ずるぶん亂暴をはたらいだ。支那ではこれを和寇といつて、ひどく恐れきらつたものである。自然日支貿易も圓滿を缺くやうになつて來た。

### 五 江戸時代の産業



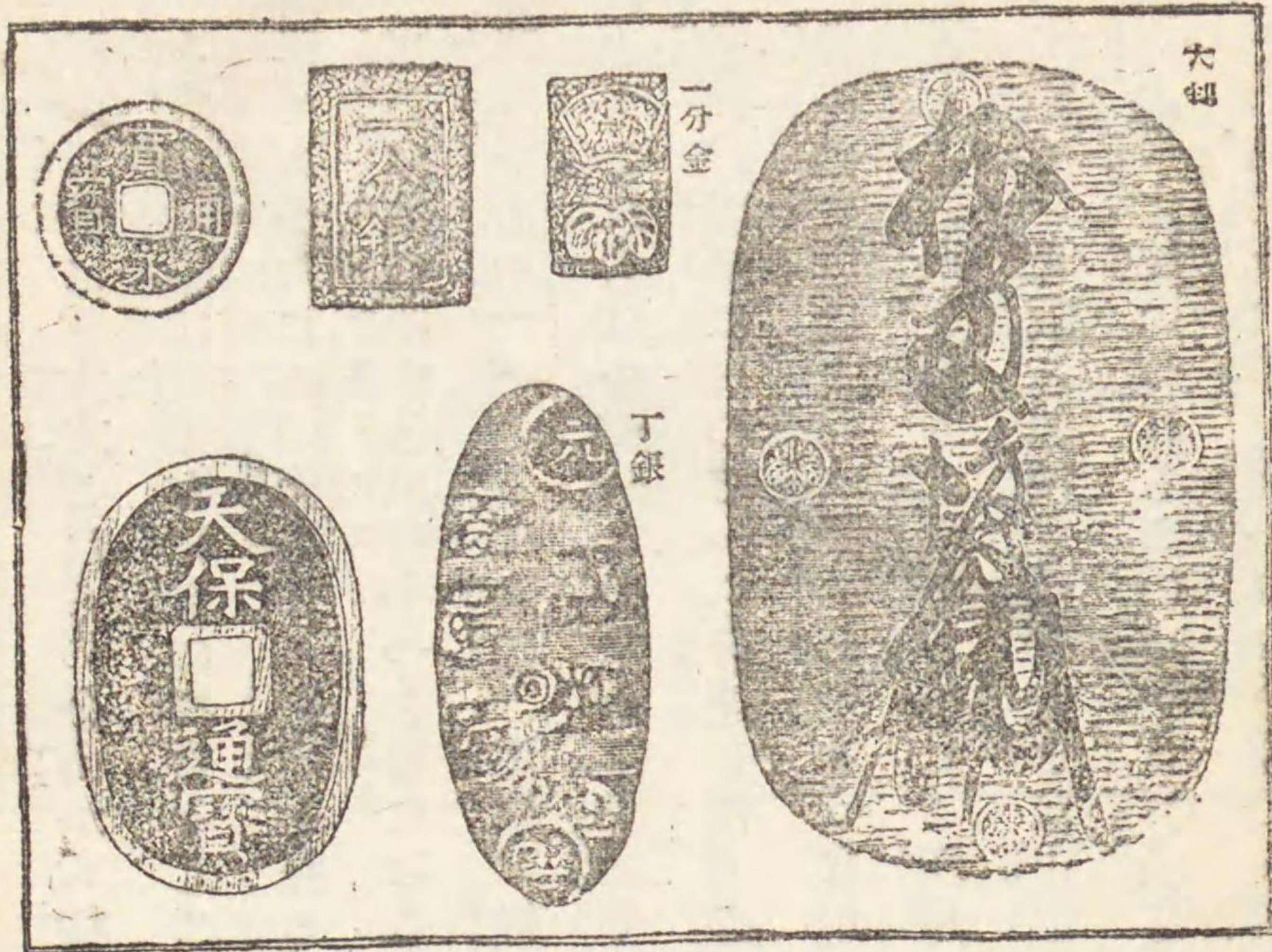
永 樂 錢  
室町時代までに發達をとげた諸種の産業は、

た。そこで天下を統一した信長、秀吉はいづれも産業の復舊振興をはかつたが、不



幸にして申途でたふれ、つひに希望を達することが出来なかつた。そのあとをついでよくこれを成し遂げたのが家康ならびにその子孫である。

徳川幕府はとくに農業の奨励に心を用ひ、水利をおこし堤防を築いて耕作の便をはかると共に、百姓から商人にかはることを禁じた。又田畑の賣買を制限し、所有の田一町歩以内のものは、これを子孫の間に分配することをさへ禁じたほどであつた。かゝる結果は自然その收穫にも増加を見るやうになつた。五代將軍綱吉の時全國の米の産出高は二千五百七十八萬六千九百二十九石餘といふことであるが、百四十年ばかり経つた天保七年家齊將軍の時、調によると、三千四十三萬五千二百六石餘といふことになつてゐる。その増加は實に四百六十餘萬石である。ちやうどその時の人口は二千七百萬、それに公卿や武士の數凡そ二百六十萬人を足して總數三千萬人たらずであつたから、一年一人一石の割で食べたとして決して不足はなかつた。この時代になつてから新たに輸入栽培せられたものも少くない。甘藷（さつまいも）、甘藷（さとうきび）、南瓜、西瓜などその主なるものである。又前からあつた



江戸時代の貨幣

草綿もこの頃になつて廣く栽培せられその産額もずるぶん殖えてゐる。鑛業は最近發達した産業であるが、昔もまんざらなかつたわけではない。大寶令の中にも鑛業に關する規定があるのを見ると上古から鑛業があつたと見ねばならぬ。又元明天皇の和銅年間に武藏國から銅が出たので、それを朝廷に奉り、それで始めて我國で和銅開鑛といふ銅錢を造つたこともあるから製鍊の方法も知つてゐたと見える。徳川家康はこの方面にも注意をくばり、大久保長安を金山奉行に任じて、伊豆



の金銀や、佐渡、石見の鑛山を採掘させた。この時代に使用した大判小判をはじめ諸種の貨幣は、大方これらの金山から採つたもので造つたのである。

その他諸藩に於ても相當の採掘をしてゐたが、何しの採掘の方法及び製鍊の法が幼稚であつたため、充分なる發達を見る事が出来なくして明治となつた。

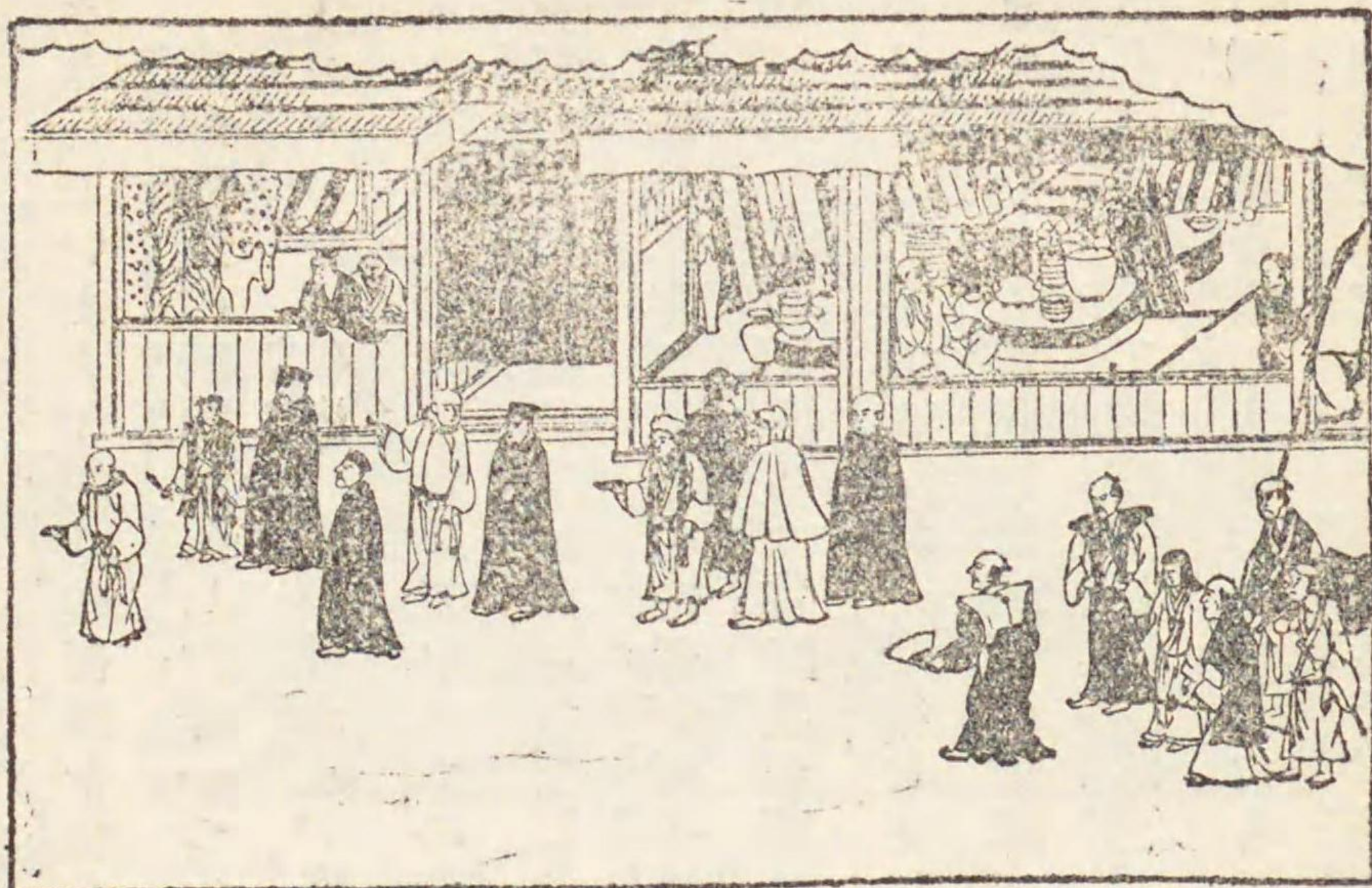
工業は奈良平安朝以後ずつと盛になる一方であつたが、江戸時代になつても引續き隆盛であつた。とくに陶器、漆器、織物の方面には見るべきものが多かつた。けれどもこれらはいづれも従來の手工業であつて、今我々の大都會で見るとやうな機械工業は、明治になつてから發達したものである。

農工の發達はまた商業の發達をうながした。この時代に商業のもつとも發達してゐたところは矢張り大阪であつた。江戸も幕府のある所だから、豪商が全國から集つて來て、大阪と對抗すべき大きな市があつた。日本橋の魚市、大阪天満の青橋市、堂島の米市等いづれもこの時から有名なものであつた。

その他所々に市が開かれた。今でも都會の名に四日市、五日市、二十日市など

いふものがあるが、之等は多くその頃の市の名残りである。すなはち四日市といへば月の四日、十四日、二十四日に市を開いたものである。かやうに當時は毎日開いてゐる店の外に月に二三回を限つて定つた日に開く市も可成り多かつた。又道の大通りに品物を陳列して賣る方法もあり、或は今ある五十錢均一、三十錢均一店みたやうに、十三文店、三十八文店の如きハイカラな商店もあつた。

海運が開けたために商業の進歩は一層いちじるしかつた。河村瑞賢は幕府の命によつて江戸奥羽間の海運を開き、堺の商人は



開港市場

祖先の産業



江戸大阪を往來して物品の運送に骨を折つた。これから諸國の津々浦々に廻船がゆききしていよいよ商業の發達を促した。

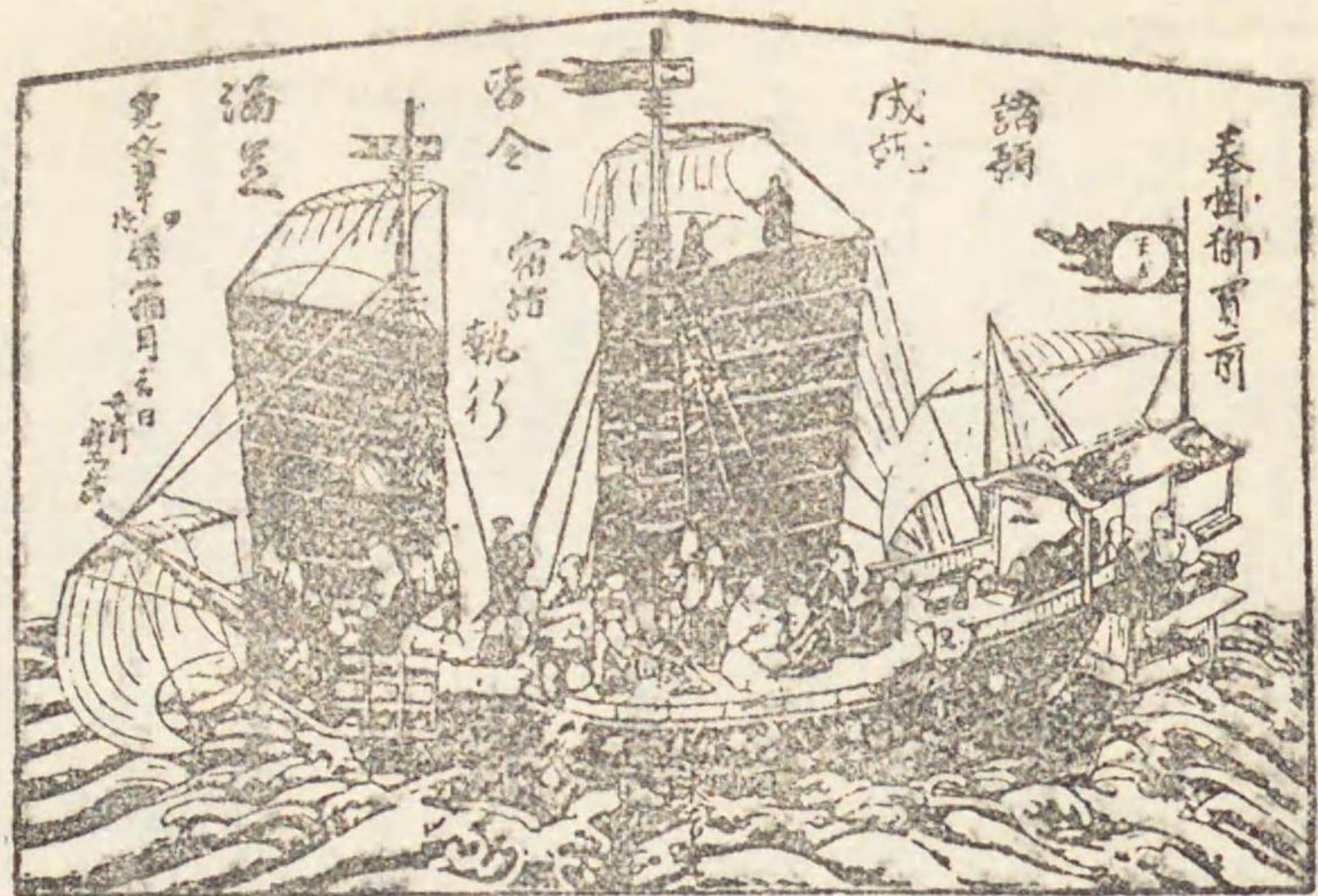
内地商業の發達を促した今一つの原因はヨーロッパ人との貿易である。この頃ヨーロッパでは航海の術が進歩し、盛に通商探檢の業に従事するやうになつたが、ポルトガル人は率先してアフリカの南端を廻つて印度に達する新航路を發見し、印度支那などに來航して植民、貿易の業を營んでゐた。ところがたま／＼天文十二年（紀元二二〇三年）にその商船が種子島に漂流して鐵砲を傳へた。これが西洋人の我が國に來た始めである。當時我が國は戰國時代であつたから、その鐵砲は忽ち諸國にひろまり、武器、築城、戰術などに大きな影響を及ぼした。ついでイスパニア人もまた來航して通商したが、わが國ではすべてこれ等の西洋人を南蠻人といひ、その貿易は主として堺、平戸（長崎縣）、坊津（鹿兒島縣）などで行はれた。前頁の圖はその開港地市場の有様をうつしたもので、その場所は堺か平戸か不明である。圖中妙な服裝をしたものが南蠻人で、店頭には多くの舶來品が見える。

秀吉、家康はいづれも海外貿易を獎勵したから、我が國人で遠く海外に出かける者も少なくなつた。かの京都の商人田中勝助

丸  
の如きは、家康の命をうけイスパニアのマニラ總督が歸國する便で、はるかに太平洋を横ぎつてメキシコにまで行つたのである。

吉  
この外高砂（臺灣）、マカオ、ルスン、安南カンボチャ、シヤム、ジャバなどに航して通商を營む者が多く、中には日本町のたてられた所さへあつた。

末  
當時これ等諸港を往來する商船は、なかなか發達したもので、帆ばしらが三本もあるやうな大船であつた。幕府はとくに之等のに船を御朱印船と名付けた。圖は家康の時代



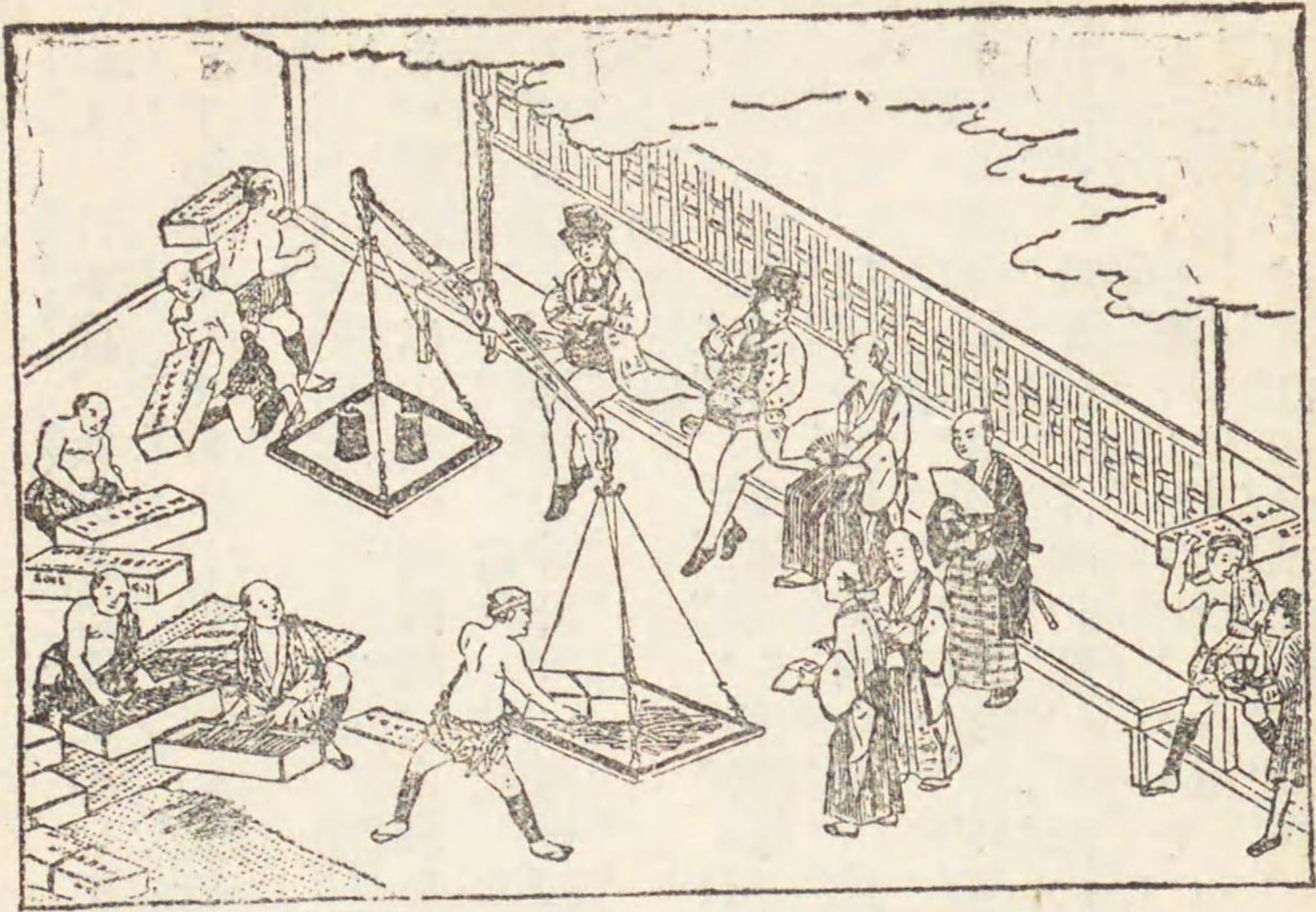
貿易免許の朱印狀を與へたから、世にこれを御朱印船と名付けた。圖は家康の時代



にもつとも活躍した大阪の末吉孫左衛門の末吉丸である。

かやうに海外との貿易は年と共にいよ／＼發展して來たが、こゝに斷然これを止めなければならぬやうな事情が起つて來た。それは天主教と幕府との關係である。天主教は前にも述べたやうに、天文十八年(二二〇九年)宣教師フランシス・ザヴィエルによつて始めて我が國に傳つたものである。爾來いろ／＼の困難と戦つて諸地方に弘まつたが、信長の保護によつて一層盛になつた。ところが秀吉は、わが風教に害あるものとして之を禁じ、家康もまたオランダ人から、天主教が國家に大害あることを聞いたので、これを禁止することにした。けれども通商貿易はこれを獎勵したから、通商にまぎらかつて來る宣教師もあれば、密かに信仰する國民もあつて、禁教の目的を達することが容易でなかつた。そこで將軍家光は一そうその禁令をきびしくし、改宗しない者は容赦なく、火あぶりまたははりつけにした。

天主教徒に對する幕府並びに藩主の處置がいよ／＼苛酷になつて來たので、島原半島や天草島の教徒はつひに亂を起した。幕府は早速大軍をもつて之を討たせたが



長崎で和蘭人に銅を賣渡す

教徒の勢がなか／＼盛なので、容易に平げることが出来なかつた。そこで大將を代へ兵を増してやつと平定することが出來た。これが世にいふ島原の亂である。この後幕府は、天主教を絶滅するためにいよ／＼鎖國を實行し、邦人の海外に渡航するを禁ずると共に、清蘭兩國の外は一切、外國人の渡來をも禁じた。これから清蘭兩國のみ長崎に來て長く我が國と貿易したが、西洋諸國との一ぱんの通商はほとんど絶え、國民進取の意氣がくぢかれるやうになつたのは、實に遺憾なことといはなければならぬ。



以上の外水産、牧畜林業等についても述べたいが、あまりに長くなるから略すことにする。そして終りに此時代の全國物産中著名なものをあげて皆さんのお土産に進上したい。

まづ畿内では山城の西陣織、友禪染、清水焼、宇治茶、大和の奈良紬、奈良漬、墨、吉野葛、吉野紙、河内の木綿、和泉の堺厄丁、攝津の池田炭、伊丹の酒、御影石等があり、

東海道では伊賀の伊賀焼、伊勢の萬古焼、海老、尾張の七寶焼、瀬戸焼、鳴海絞、名古屋扇、三河の木綿、岡崎味噌、遠江の濱名納豆、駿河の竹細工、半紙、海苔、興津鯛、甲斐の絹、葡萄、水晶、伊豆の八丈絹、相模の湯本細工、武藏の江戸錦繪、品川海苔、秩父絹、上總の鱧、下總の結城紬、銚子縮、常陸のこんにやく等がある。するぶんお土産がふえたが、ついでにもう少し上げよう。

東山道では近江の長濱縮緬、蚊帳、信樂焼、美濃の紙、まくは瓜、信濃の蠶糸、更科そば、上野の生糸、下野の足利縞、足尾銅、奥州の會津塗、仙臺平、名取川埋木、輕津塗、出羽の米澤織、秋田ふき等がある。

北陸道では若狭塗、越前の奉書、鳥の子紙、奉書紬、加賀の加賀絹、笠、茶、丸谷焼、能登の輪島塗、越中富山の反魂丹、富岡銅器、越後の越後縮、魚貝、佐渡の金銅等がある。

西側にも妙しいものがある。丹波の栗、煙草、但馬の金銀、石材、柳行李、伯耆の鐵、石見の銀鐵。

山陽になると播磨の赤穂鹽、龍野醬油、備前の備前焼、備後の疊表、安藝の牡蠣、長門の赤間硯。

南海には紀伊の密柑、高野紙、熊野鯨、阿波の藍、土佐の鯉節、紙、伊豫の銅、すだれ等があり、西海には筑前の博多織、筑後の久留米緋、豊前の小倉縞、肥前の今利焼、五島鯛、大隅の國分煙草、薩摩の煙草、薩摩焼、泡盛酒、對馬の人參等がある。



うれしいお祝と楽しいお祭り

われ／＼の祖先は大の樂天家であつた。天照大神が天岩屋におかれになつて、天地が暗黒となつた時でも、決してかなしみ訴ふことをせず、歌をうたひ舞を舞うて、とう／＼大神を岩屋からお誘ひ申しあげた程である。また古くは死人を葬るにも死者の靈をなぐさめるといつて、歌舞をなしたといふことである。後になつて佛敎がわが國に傳はり、世の無常を説いたけれども、あまりくよく／＼する様子もなく、昔ながらの楽しい生活を夢みてゐた。かの大伴旅人の歌は、われ／＼の祖生の心持をよく現はしてゐたやうに思はれる。彼は

此世にして樂しくあらば、來む世には

虫にも鳥にも、我はなりなむ。

と歌つてゐる。出来るだけ此世を樂しまうといふのが彼等の望であつた。したがつて我が國には昔からお祝やお祭りが非常に多い。われわれの祖先は、いゝことにつけるゐることにつけ、しまひにはお祭りさわぎをしなければ承知の出来ない國民であつた。

それではどんなお祝やお祭りがあつたらう。

一 太古のお祝とお祭り

我が國の祭りは、天照大神が天岩屋におかれになつた時、八百萬神が岩屋の前に集つて、色々のわざをなさつたことが、その始りであると言ひ傳へられてゐる。それだから後世の祭りは、大方この時のやうにするのだといふことである。その時の模様はかうである。多くの神々は思金神のさしづで、さつそく鶏をどつ



さり集めて来て、岩屋の前でひつきりなしに鳴かせた。

それから一方では、天安河の河上から固い岩をはこんで来て、それを鐵床にして八咫の鏡といふりつばな鏡を作らせ、又八咫にの曲玉といふきれいな玉で胸飾りを作らせた。そして天香具山といふ山から榊を根こそぎにして来て、その上の方の枝へ八咫にの曲玉をつけ、中ほどの枝へ八咫の鏡をつけ、下の枝へは白や青の布をつりさげた。太玉命といふ神さまがその榊を持つて天の岩屋の前に立ち、天兒屋根の命がそのそばで祝詞をあげた。

それからやはり岩屋の前へ空樽をふせて、天宇受女命といふ女神に、天香具山の葛のつるをたすきにかけてさせ、かづらの葉を髪飾りとさせて、その桶の上へ上つて、踊を踊らせた。宇受女命は、お乳もお腹もまる出しにして、足をとん／＼ふみながら、まるでつきものでもしたやうに、くる／＼と踊り狂つた。その様子があまりにかしいので、何千人といふ神さまたちが、一度にどつと吹き出して、みんなで轉りまはつて笑つた。そこへ鶏は聲をそろへて、コツケコー、コツケコーと鳴

き立てるので、その騒ぎといつたら、全く耳もつぶれるばかりであつた。

天照大神は、その大そうな騒ぎの聲をお聞きになると、何事が起つたのかとおぼしめして、岩屋の戸を細目にあけて、そつとのぞいて御覽になつた。そして宇受女命に向つて、

『これ／＼私がかくかくかくれてゐれば、空の上もまつくらなはずなのに、お前は何を面白がつて踊つてゐるのか。外の神々たちも何であんなに笑ひくづれてゐるのか。』とおたづねになつた。すると宇受女命は、

『それは、あなたよりもつと貴い神さまが出ていらつしやいましたので、みんなが喜んでさわいでをりますのでございます。』と申し上げた。それと同時に一人の神さまは、例の八咫の鏡をつけた榊をふいに大神の前につき出した。鏡にさつと大神のお顔がうつつた。大神はそのうつつた顔をぐらんになると、

『おやこれはたれであらう。』とおつしやつて、もつとよく見ようとと思召され、少しばかり戸の外へお出ましになつた。



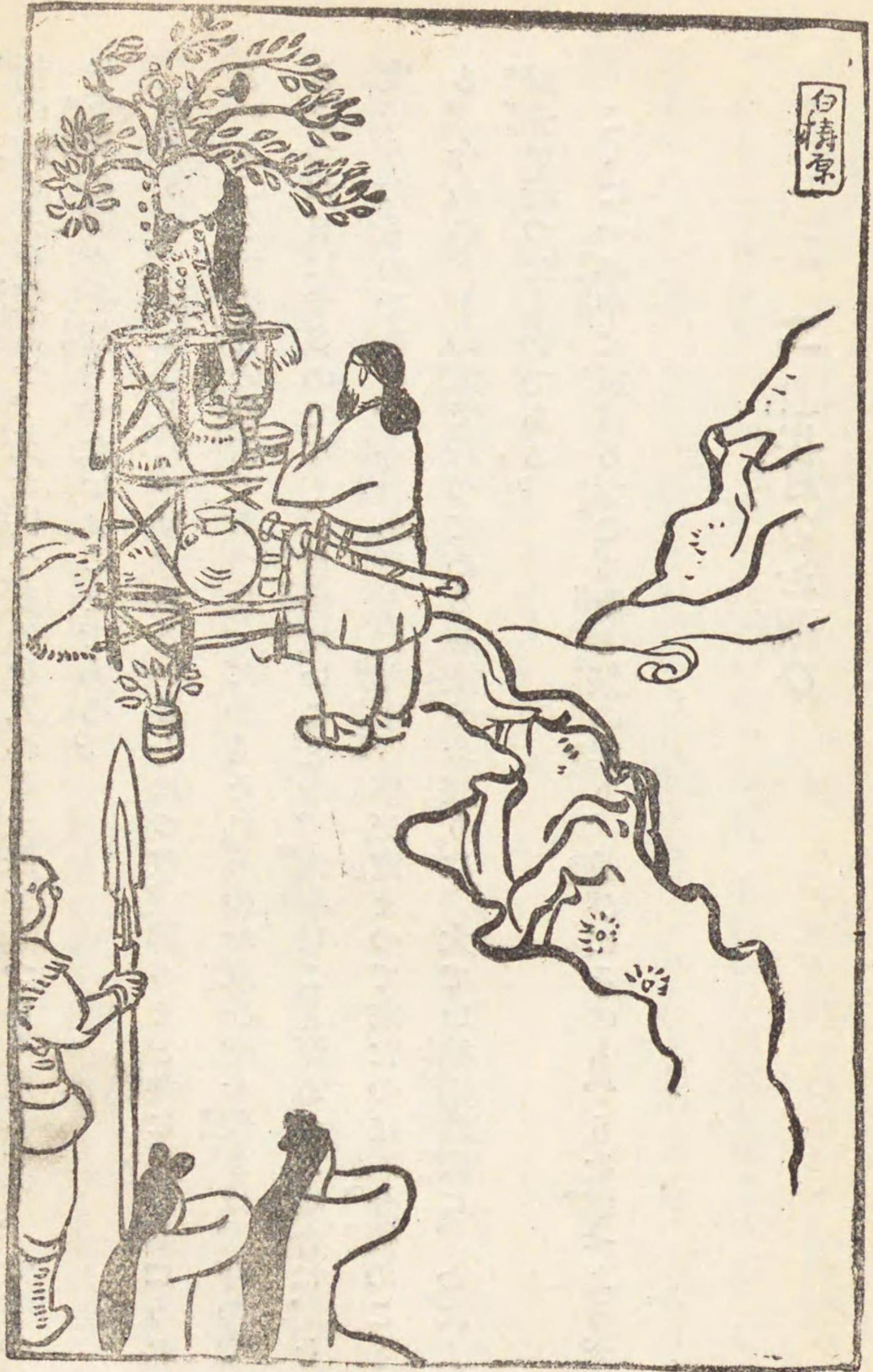
するとさつきから岩屋のそばにかくれて、待ちかまへてゐた手力男命といふ大力の神さまが、いきなり大神のお手をとつて、すつかり外へお引き出し申した。それと一しよに一人の神さまは、大神のあとへまはつて、『どうぞこれから内へはお入り下さいませぬやうに。』と申し上げて、そこへ七五三繩をはりわたしてしまつた。

(古事記物語参照)

これが岩戸開きのお祭りである。なるほど今の祭りに、かうした道具立てをするのを見ると、あるひはこれが本になつてゐるのかも知れない。

この外いろくのお祝やお祭りのあつたことを記紀は傳へてゐる。神武天皇がウダの兄猪を御平定なされた時のお祝ひ、大和の橿原宮で、天皇の御位におつき遊ばされたときの即位のお祝ひなどは、いづれもお目出度いお祝ひとして、恐らく皆さんの記憶にも残つてゐることであらう。

降つて崇神天皇の御代に、國々に、やはり病がひどくはびこつたので、大祭を行はせられたことがあつた。その時天皇は、大多根子といふ人を三輪の神主にして、三



神武天皇橿原宮のお祝



輪の神さまを祭らせ、又お供へものを入れる土器をどつさり造らせて、大空の神々や下界の神々を祭らせたいふことである。

かやうに、いふことにつけ、わるいことにつけ、神さまと共に喜び共にうれふるといふことが祖先の性情であつた。だからそれらのお祝ひやお祭りは、今のやうにきまつた日にやるのでなく、目出度いことや、大事なことがあつた場合に、その都度行うたものである。今日のやうに年中行事が定まつて来たのは大分後のことである。今われゝの家で行つてゐるお祝やお祭りは、大てい徳川時代に、われゝの祖先が行つたものである。

こゝに一年中に於ける主なる祝と祭の起り、並びにそのもやうを述べよう。

## 二 正月のお祝ひ

あら玉の年の始めの喜びは今も昔も變りはない。時を告げる鶏の聲、のきばにさへづる雀の歌も、今朝は取りわけてのどかに、うち仰ぐ空もうらゝと晴れわたつてゐる。子供は新しい年を取つたといつて喜び、きれいな着物を見てうれしがる。老人は小さい孫たちの元氣なうれしさうな顔を見てニコ／＼してゐる。大人は、奮闘しよう、しつかりやらうなどと新しい希望をいだいて喜びあつてゐる。天地萬物すべてが歡喜の聲をあげてゐるではないか。

かうした楽しい正月をいつ頃から祝ひ始めたか。神武天皇が橿原の宮で御位におつきなされたのが、わが國の紀元のはじまりとされてゐるが、それは今からすると二千五百八十七年の大昔のことである。その後われゝの祖先は毎年正月の祝をしたものかどうか、はつきりしない。言ひ傳へによると、朝廷で行はせられる四方拜は宇多天皇の仁和五年(一五四九年)に始つてゐるといふことである。宇多天皇が正月元日寅の刻(今の午前四時頃)に、天地四方屬星山陵を拜し給うたことに始つて、次の醍醐天皇の御代から、それが宮中の定つた御儀式となつて、すつと後世に傳は



つたものだと言はれてゐる。五百年ほど前に出来た本に、宮中の四方拜の御模様をくはしく書いてあるが、大體次のやうに拜せられる。

この日の式場は清涼殿（天皇が常に御出ましになる御殿）の前庭で、その東階の前の敷石の上に御屏風を立てめぐらし、その中に玉座をまうけ、その前に白木の机を置いて造り花や燈籠を供へる。準備が出来上ると天皇は寅の刻、七星の名をとなへて天地四方山陵を拜し給ひ、年の災をはらひ、また皇運の榮えを祈り申さるゝのである。四方拜の名はこゝから出たやうである。

御拜の式が終ると、天皇は清涼殿の晝の御座（天子が晝の間御出になる所）に御出御になつて、生氣の方の御衣を、平生お召しになる御直垂の上に重ねて召される。この生氣の方の御衣をお召しになるといふことは、吉方の色の衣をお召しになることである。例へば東の方がその年の吉方にあたつてゐるならば青色を用ひ、西にあつてゐれば黄色を用ひるが如きものである。この時は天皇に侍つてゐる女官たちも同様な色の着物を着ける。御衣の御召しがはると、天皇に御齒固や御屠蘇を差

し上げる。齒固めといふのは齒を固め長生きをするといふ意味で餅を食べることである。大昔は餅のかはりに鹿や猪の肉を食べることもあつた。

この四方拜の御儀式は後世まで變りなく、ほとんど同じやうに行はせられたといふことである。今日宮中で行はせられる御式の模様を承るに、

式場は神嘉殿の南庭に設けられ、その御假舎の内に簀ごもを敷き、御屏風二隻を立てまはし、その中央に御座を設ける。供へられた燈臺二基は煌々として、壯嚴に曉の闇を照してゐる。さて天皇陛下は前夜から御潔齋（玉體をおきよめになること）あらせられ、元日の朝午前四時には御束帯を召させられ、御手水、御劍、御裾、御草鞋、御笏等を持った奉仕の侍従を従へさせられて、同五時半出御、設けの御座に御進み遊ばされ、まづ西に向はせられて伊勢大神宮、豊受大神宮、熱田神宮を御拜になり、それから天神地祇に及ばせられ、さらに西に向はせられて、神武天皇及び先帝の御陵を御拜あそばされる。次で武藏の氷川神社、山城の兩加茂神社、男山八幡宮、常陸の鹿島神社、下總の香取神社その他歴代の山陵をそれ／＼西に東に北に

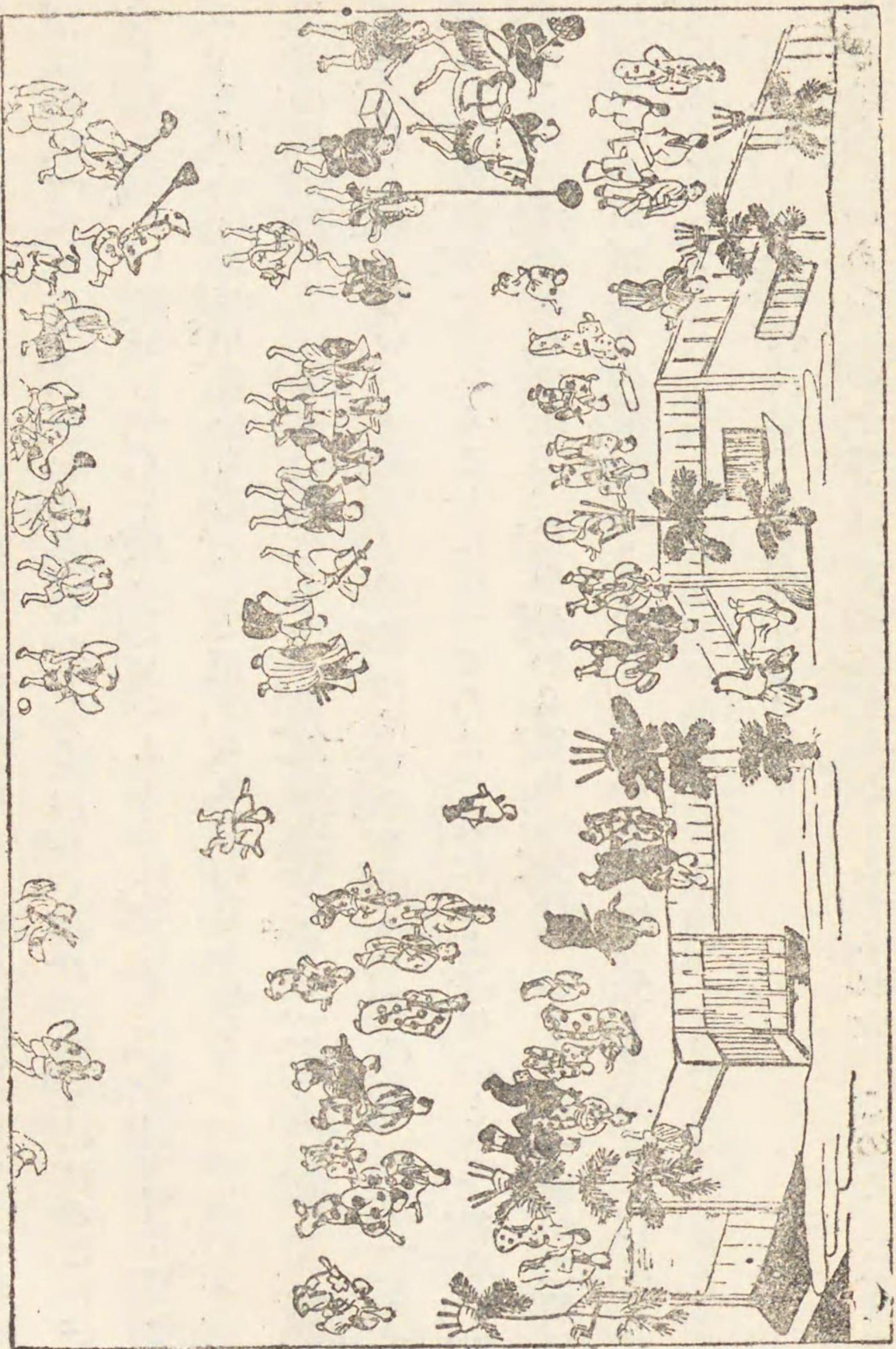


に向はせられて順々に御拜あらせられるのである。それが終つてから陛下は賢所、皇靈殿、神殿の三殿を御拜あらせられる。その御次第は、りうりやうとして嚴に樂の奏せられる間に、式部官が御神殿を開扉、神饌を供し、祝詞を奏しまつると、陛下はかしこくも御玉串をおとり遊ばされて御拜あり、をはつて入御、再び奏樂の間に神饌をさげ、これで元日朝の御式をはり、午前七時大膳職から上つる晴御膳を食召し遊ばすさうである。(公事根源、「國民年中行事」參照)

民間に於ける年中行事も平安朝の頃から整うて來たらしい。新年のお祝ひもその仕方はもちろん宮中の御儀式とは異なるが、慶びと望みは貴きも賤しきも同様である。門前に門松をたて注連繩を結んで、しだ、ゆづり葉をつけることも可成り古くから行はれたやうである。一休禪師が、

「門松やめいどの旅の一里塚」

と歌つてゐるのを見ても、その頃すでに門松を飾つたことが分る。一休は今から四





百五十年ばかり前の人である。松は千年の齡があり、竹は萬代にわたつても枯れず、しだは根が一本で多くの枝を生じ、しかもそれが長くのびて四時枯れることがなく、ゆづり葉は新しい葉がちやんと生ひととのふまでは古い葉が落ちないといふところから、それ／＼お目出度いものとして用ひられたのであらう。

三日の間、家々では屠蘇の酒をくみ、齒固めの餅を食べて長壽を祈り、新年を祝ふこと今日と變りない。また元旦の曉には井水を汲み、これを「若水」といつて、雜煮にはこの若水を用ひることになつてゐた。私たちも子供のとき、朝早く起き、眞先にこの若水を汲んで来て、父や母から賞めて貰ひ、おまけに一錢か二錢のお錢をいただくのが何よりの楽しみであつた。われ／＼の祖先も多分さうしたことをくり返したのだらう。

「元旦や神代のことも思はるゝ」

七日は七種のあつものを食べて萬病邪氣を除くとせられた。このことはすでに宇多天皇の時にも行はれたやうである。清少納言も七日は「雪間の若菜青やかにつみ

出でつつ」と言うてゐる。又百人一首に

君がため春の野に出でて若菜つむ

わがころもでに雪はふりつゝ

といふ歌が出てゐるが、これは宇多天皇の前の光孝天皇が、まだ親王であらせられた時に詠まれたものである。親王は七日のあつものをつくるためにおつみになつたものか、よくは分らないが、もしさうだとすれば可成り古くから行はれてゐたと言へる。

徳川時代になるとよほど勿體をつけられたものであつた。六日の晩ゆでたなづな、かぶらなどを組板にのせて、之をたきながら聲高らかに、「七草なづな、唐土の鳥が、日本の土地へ渡らぬ先に」とはやし、そのたいた菜を七日のあつものに用ふるのであつた。これが「なづな打ち」といふものである。これは支那の俗説から來たものであるが、支那では鬼車鳥といふ不吉な鳥があつて、此日人家に入つて禍をする。その鳥は常に血をたらしてゐるが、もしその血をたらされると、その家に



は不吉のことがあるといふので、支那では板をたき戸をうち、燈火をけしてこの鳥の止らぬやうに追ひはらふといはれてゐる。日本のなづな打ちもこの傳説によつたものだから、「唐土の鳥の渡らぬ先に」と歌ふのであると言はれてゐる。しかし我が國で七草を用ひるのは、七種の若草を用ひてこれを粥に炊いて食べると、邪氣をはらひ萬病をのぞくといふ言ひ傳へから來たものであるから、徳川時代のかやうななづな打ちは、多分かれとこれとをごつちやにしたものであらう。

十五日には粥を食ひ又爆竹のことがあつた。粥は天狗を祭るためださうで、これを天狗に供へて食べると一生病氣にかゝらぬと言はれてゐる。爆竹は今われ／＼のやつてゐる左義長である。これはもと宮中でも行はせられたと見える。「和漢三才圖繪」といふ本に、「正月十五日清涼殿の庭に於て青竹をたく」といふことが書いてある。これは西方深山の中に、山臊といふ一尺あまりの小さい人間がある。人を犯して病氣を起させるので、その小人を驚き恐れしむるために、青竹を火中に入れてぱち／＼と鳴らすのであると言ひ傳へられてゐる。後には子供の行事になつて、家

家の門松、輪飾り、注連飾りなどを貰ひ集めて、それを河原や野原でもやすやうになつた。ところが徳川時代になつて、火事のおそれがあるといふので、江戸では之を禁じてしまつた。それで今でも東京の市中に於ては之を見ることが出来ないが、地方に行くと今なほ盛に之を行つてゐるところがある。私も兵庫縣の三田で三たびこの左義長（又はとんどともいふ）にあつて、火にあたりながら餅を食べたことがある。この左義長の火で、餅を焼いて食べると年中病氣にかゝらぬと言はれてゐる。この外親類知人の間たがひにその家を訪うて祝儀を交換すること、恵方詣り、書初め、賣初め、鏡開きや、やぶ入等今とほとんど變りはない。

### 三 雛祭り

三月の祭りは、昔は上巳といつて、三月の最初の巳の日に行つたものである。日

嬉しいお祝と楽しいお祭り



本紀によると、第二十四代顯宗天皇の元年三月上巳の日に、天皇が後苑に行幸なされ、始めて曲水の宴をなし給うたといふことになつてゐる。この曲水の宴といふのは、宮仕への文人どもが、溝水の岸邊に並んで待つてゐるところへ、上流から盃を流し、盃が自分の前を過ぎ去らないうちに詩を作る遊びである。もし盃が自分の前に流れて來ても、なほ詩が出来ないときには、罰として酒を飲まされることになつてゐた。ずゐぶん詩的な風流の宴會であつたと見える。

之が四十二代文武天皇の時から、三日の日と定まるやうになり、奈良平安朝に至ると、他の祝祭と同様にますく盛に行はれた。ところが源平時代以後、朝廷の御威光が衰へたため、朝廷ではかやうな儀式もすたれてしまつたが、民間にあつては引きつゞき年中行事の一つとして行はれてゐた。

しかる間に、徳川氏が天下の政權をにぎるやうになつて、幕府に於ける色々の儀式が盛になり、この三月三日の祭りも五節句の一として大切な祝祭日となつた。この日江戸に居る諸大名は皆登城して、將軍に祝賀を申し上げ、殿中に於ては盛な式

が行はれた。そこで民間に於ても、この日は業を休んで祝祭を行ひ、雛を祭ること  
もいよ／＼盛になつて來た。



雛 あ そ び

雛人形を造つて之をおもちやとして遊ぶことは、ずゐぶん古くからあつたやうであるが、三月三日と日を定めて祭るやうになつたについては、いろ／＼の變遷がある。

昔支那では、三月の巳の日を除日といつて、不吉を除く日とせられたが、その風が早く我が國にも傳つて來た。平安朝の頃には、三月三日に陰陽師(昔の官名で、うらなひ、祈禱、曆などのことを取扱つてゐた人。後には役人でなくともかやうな商賣をする人には皆さう言つた。)それでもつて自分のまはりをなでたり、自分の息

から、人の形に切つた紙を貰ひ、

嬉しいお祝と楽しいお祭り



をふきかけたりして、自分の禍をこの人形に負はせ、さらにこれを陰陽師に渡し、被ひをして川に流したものである。これはつまり自分の身代りになつて贖ひをしてくれるといふ意味で、その人形を贖物または天兒などと言つてゐた。

ところが後には、それを川に流さず、家の棚などに飾つて酒食を備へたりするやうになつた。これが雛を飾り立てるやうになつたもとので、この習慣と昔からの雛遊びとが結びついて、とう／＼後の雛祭りとなつたのである。

雛祭りがもつとも流行り出したのは、徳川氏が天下を一統し、二代秀忠が將軍になつた頃からである。時の後水尾天皇は、御自分で喜樂坊と名付ける人形をお作りになつたといふ位だから、民間でも大いに人形造りが流行し、技術もずるぶん進歩したことであらう。

また此の節句の頃は、桃も咲き櫻もつぼみ、野山の景色が美しくなる時だから、家々ではこの日にご馳走をつくり、一家そろつて遊山などをしたものであるが、今は季節が早いために、さういふこともだん／＼すたれて來た。

この日に、草餅を用ひることも古くから行はれたことである。

### 四 端午の節句

雛祭りを女兒の節句とすれば、端午の節句は男子のためのお祝ひである。徳川時代にはやはり重要な祝日で、この日武家は必ず帷子を着て登城しなければならなかつた。

このまつりもその起源は古い。推古天皇の十九年五月五日に、天皇がウダ野に行幸なされ、始めて薬狩りをなされた。之に従ふ群臣は皆衣冠美しく、ことさら美事であつたといふことである。これは支那で五月五日に薬草を採る風習があるのをまねたもので、我が國では同じく薬獵りと呼んで鹿を狩りすることがあつたが、佛教が盛んとなるに及んで、殺生をいみ、とう／＼百草を摘んで鳥獸を狩るに代へたわ



けである。

平安時代に至つては、この節會はもつとも盛なものであつた。宮中におかせられては、天皇が武徳殿に出御あつて宴會を行はせられて、群臣に御馳走を賜つた。又家々では軒に菖蒲や蓬をさしたり、薬玉といつて、五色の糸をもつて花束の形をつくり、その中に薬をこめたものをかけたりした。これは九月九日重陽の日までそのままにして、この日に菊と取りかへるのである。菖蒲は災厄邪氣を取りのぞき、薬玉は悪魔をはらふものとして用ひられたやうである。

又この日に粽をつくる習慣がある。これは昔支那の高辛氏の惡子が、五月五日に舟に乗つて海を渡つたとき、暴風がにはかに起つて、船は沈み惡子は溺死し、その後惡鬼となつて常に人をなやました。そこである人は五色の糸で粽をして、海中に投げ入れたところが、五色の龍となつて天に登つた。それ以來海人は人をなやますことがなくなり、漕ぎ行く船も災難にあはないやうになつたと言ひ傳へられてゐる。ところが一方かういふ言ひ傳へもある。支那の楚の國の屈原といふ忠臣が、汨羅

といふ河に身を投じて死んだのが五月五日であつた。人々はこの忠臣の最後をあらはれみ、五月五日の來る毎に、竹筒に米を入れ、水中に投じてその靈を祭り、又屈原の姉は粽をつくつてその靈に供へたといふ故事があるので、五月の節句に粽をつくるやうになつたと。

わが國では何れのいはれによつたものかよく分らないが、屈原の話が廣く行きわたつてゐることだけは事實である。何れにせよ、五月五日に節會を行つたことは、前にも述べたやうにすでに推古天皇の時にもあり、又奈良朝の聖武天皇の詔にも、「昔は五月の節、常にあやめをもつてかつらとなしたるに、この頃すでにこの事やむ。今より後あやめのかつらにあらざる者は宮中に入ることなかれ。」といふ意味のことがある。

徳川時代となつては、男の節句として、すべて勇しい武ばつたものを飾る習慣になつた。今でも端午といへば、先づ第一に矢車がらゝの鯉の吹き流しを思ひ起す。田舎の森や林の間に、まばらに見える藁屋の軒から、この鯉が高く上つて、五月の



風に吹き流されてゐる風情は何ともいへない良い氣持だ。一體鯉といふ魚は雄々しい魚で、俗に「鯉の瀧登り」といふ如く、高い瀧でも飛びのぼるといふほど、威勢のよいものであるが、一たびとらへられて俎板に置かれたら死苦八苦することなく泰然として動かない。この性質はいかにも、男子らしく武士らしいので、武家時代の端午の飾りものとしても珍重せられたわけである。

飾り人形もことごとく武ばつたものばかりである。鎧、兜、太刀、弓、劍、えびらなどの如き武士の用具や、鐘馗さま、金時が熊と角力をとつてゐるもの、具足を着た武將など、どれを見ても三月の雛とは趣のちがつたものばかりである。

### 五 七夕祭と孟蘭盆

七夕祭といへば、われ／＼はさ／＼竹に五色の短冊をむすびつけたゆかしいありさ

まを思ひ浮べる。今は大都會に於ては、このさ／＼竹もほとんど見ることが出来ないが、田舎にいくとなほ盛にやつてるところがある。

昔からこの七月七日の七夕を星祭りとしてゐるが、之は支那の傳説から來たものである。その傳説にある織女星は、機を織ることが非常に上手で、どんな人でもこの星に及ぶものがない。かのあかつきの美しい紫の雲、夕空に照りかゞやくまつかな雲はもとより、大空を色どる美しい七色の虹も、皆この織女星の手によつて織り出されたものであるといはれてゐる。それで七月七日にこの星を祭つて、女子の技藝の上達せんことを祈るやうになつた。

支那では、この祭りは古く唐以前から行はれたものであるが、日本へこのことが傳つたのは奈良朝のことである。公事根源といふ朝廷の儀式のことを書いた本に、天平勝寶七年（孝謙天皇一四一五年）に、始めてこの七夕祭が行はれたことを記してある。乞巧奠といはれたのがこの祭りのことで、機を織る技能が巧になることを織女星に乞ふ祭りといふ意味である。その時の宮中におけるやうすを見るに、先づ



清涼殿の庭に荒蓆をしいて、その上に朱塗の低い机を四脚立て、黒塗りの燭臺九本に灯火をともし、机の上には色々の物をそなへ、御所から箏の琴を申し下し、琴柱を立て、同じく机の上に置く。わきの香爐には夜中香をくゆらし、盥には水を入れて大空の星をうつす。

そこへ多くの公卿が集つて、詩文を競ひ作る等の遊が行はれた、時には夜をあかすこともあつたらしい。ところが武家時代、戦國時代となつて朝廷の御威光が衰へるにつれ、この祭りも他の儀式と同様にだん／＼衰へて來たが、徳川時代になると幕府並に民間に於て、五節句の一つとしてまた盛に行はれるやうになつた。

「たなばた」といふことは我が國に傳つてから呼ばれた名前、之はわが神代に天棚織姫命といふ機織りの上手な女神が居られたが、支那から渡つて來た傳説の織女星がちやうどこの神さまに似てゐるところから、織女星を祭ることを「たなばた」祭といふやうになつた。

この外この日に、牽牛星と織女星が天の川で、一年にたゞ一度出あふといふ傳説もある。

七夕祭がすむとむぎに孟蘭盆が來る。孟蘭盆は七月十五日であるが、一般には十三日の夜から十六日の晩に至るまで、色々の祭が行はれた。これは祖先の靈を祭る儀式であるが、その起りは佛教から來たものである。孟蘭盆經といふお經の中に、「目蓮といふ佛弟子が神通力を得たので、父母のために恩返しをしたいと思つた。ところが自分の靈眼を開いて見ると、亡き母は餓鬼の中にあつて飢渴に苦しんでゐた。そこで鉢にご飯を盛つて、その母に上げようとしたのに、その飯はまだ母の口に入らない中に火となつて燃えてしまつた。目蓮はとても自分の力で救ふことが出來ないので、佛に教を乞うた。ところが佛の言はれるには、目蓮の母は罪が深くても一人の力では救ふことが出來ないから、七月十五日に多くの僧と共に法要をいとなめよと仰せられた。目蓮はさつそく、佛の仰せの如くした。すると母が餓鬼道の苦しみをのがれて善所に生れ代つた。」といふことが書いてある。

これが孟蘭盆に於ける祖先祭りの起りであるが、わが國は大昔から祖先を祭るこ



との厚い國であつたから、孟蘭盆の行事も早く我が國に渡つて行はれ、齋明天皇の三年（一二一七年）七月には、飛鳥寺で須彌山の形をつくつて盛な孟蘭盆會が行はれたといふことである。

民間に於てもだん／＼盛になつて來た。今室町、徳川時代の祭りのやうすを書いて見るに、十三日の夕方、門前にをがらを焚いて聖靈を迎へる。この火を「迎へ火」とよぶ。迎へた聖靈は色々な飾りをした聖靈棚に祭つて、さまざまの供物をなし、切子燈籠には火をともし、家々僧を招んでお經を上げて貫つて、祖先の聖靈をまつるのである。これが十四、十五日に及び、十六日の晩になると又門前にをがらを焚いて聖靈を送り歸すのである。この火が「送り火」である。

かくて盆中は親類は互に往來し、夜間は盆踊りが行はれる。地方によつては綱引をするところもある。盆踊はわれ／＼の祖先にとつては、一年中の楽しい遊びの一であつた。老若男女思ひ／＼の假装をして、笛、太鼓の拍子につれて踊りまはるのである。土地によつて歌も踊りも多少異つてゐるが、京都附近の岩倉、花園二村で





は、「燈籠踊」といふものを踊つた。之は頭に燈籠をいたゞいて踊るものである。今は風紀上、衛生上よくないといふので、この盆踊りを禁じたところも少くないやうだが、昔はどこでも盛に行はれたものである。次の文は近頃の盆踊りをうつしたものであるが、祖先の盆踊りをしのぶにもつとも都合よきものであるから、こゝに載せることにする。

盆踊

飯を食うてゐる中から盆踊の太鼓が聞える。太鼓の間遠い拍子につれて、絶えず笛の音もする。宿を出て見ると、町の真中に三ヶ所大箒を焚いて、その箒に照らされながら、踊子か踊つてゐる。笛と太鼓は箒の上に建てた高い櫓の上で音頭をとつてゐるのである。踊子の手振りばしなやかに曲げたり伸べたりする。調子はゆるやかなもので、風に柳のなびくやうぢや。

足の運びかたを見ても何れもキチン／＼と揃ふ。振袖の長いのもあれば、編笠のもある。中には當世の紫袴をはいたのもあるが何れも十二

三位の女の子ぢや。赤い帯や袖の動くのが火に映えて美しい。始めて繪になる盆踊を見た。

長圓形をした踊子は次第に火の側を廻つて行く。別に節の長い盆歌といふものはこゝにはない。時々拍子につれて囃す歌は、節のつまつた秋田音頭そのまゝぢや。この手振りの踊の外に、今一つ鹽釜甚句といふのがある。

今はまだ小さい子供ばかりであるが、追ひ追ひ大人も出て来る、など語してゐるうち、編笠を被つて同じやうな浴衣を着た女七八人連れが現はれた。すぐ拍子に乗つて踊り出す。編笠の耳で結んだ真紅の緒が一樣に左向いたり右向いたりする。場中に一異彩を放つと見る間に、黒い頭巾で頭から顔へかけて包んだ他の五六人連れも現はれる。

着る物は思ひ思ひであるが、赤と白とを染め分けた帯がはりのシゴキは房々と背ろに垂れてゐるのが目に立つ。双手を上げる時、腕から先きの白く見えるのも奇麗ぢや。菅笠を着た者、面を被つた者、追々人数も殖えて、見物人を拂つて今一箇處箒を焚き増した頃、踊り盛りの足拍子がゾ



ロツツロツと聞える程になつた。隅ない簾に彩色をした長蛇の陣が七夕竹が風に吹かれるやうに動いてゐる。(河東碧梧桐)

### 六 重陽の宴

九月九日は宮中に於ても昔から菊の花の宴が行はれた。之を重陽の宴といつて居る。この日天子が南殿に御幸になつて節會が行はれ、親王や高位の人々が詩文を作つて天皇に奉ること、雛祭りや七夕祭りなどと似てゐる。又群臣に菊酒を賜る。そのとき、玉座の御帳の左右にはグミの實を盛つた袋をかけ、御前には菊の花をさした瓶を置いた。この日にグミの房を折つて頭にさすと、悪氣を去るといふことが信ぜられ、つひに一般の習俗となつたものであるが、そのもとは支那の故事から來たものである。

昔支那の汝南に恒景といふ人があつて、費長房といふ仙人について學問を修めてゐた。ところがある年、この仙人が恒景にいふには、『九月九日は汝の家にならず災禍がある。之は當然受けなければならぬ運命ではあるが、こゝにこれをさける一つの方法がある。汝早く家に歸つて袋をつくり、それにグミの實を入れて家人各々これを臂にかけ、家を去つてどこか高い山に登り、菊酒を飲んでその日を過せば、この災禍を免れることが出來よう。』と。

恒景は大に驚き、仙人に禮もそこゝにして急ぎ家に歸り、教へられたとほりにして、九日の朝早く家人一同と共に家を出で、近くの高い山に登り、菊の酒を飲んで一日を過したが何等の災難も來なかつた。

そこで一同無事を祝し、夜家に歸つて見ると、牛羊鶏犬等の家畜家禽がことごとく死んでゐた。恒景之を見て、『師の言神の如し、家人變をのがれたるが故に牛羊鶏犬之に代つたのだ。』と、早速師のもとに行つて事の由を告げ、厚く謝したといふことがある。これから一般の人菊酒を用ひることになつたと言はれてゐる。



しかし一般に我が國では他の節句ほど賑やでない。

この月は諸國に祭禮の多い時である。朔日の奈良東大寺の八幡祭を始め、九日は山城の伏見、鞍馬、醍醐の諸社、十日は京の五條天神祭、攝津の高津祭、十二日は有名なる大秦廣隆寺の牛祭、十五日は江戸神田明神の祭禮、二十一日は同じく江戸の白山権現及び根津権現の祭禮等何れも盛なものであつた。

澄みわたつた空、錦を飾れる山「御祭禮」の提灯、この時ならでは味ふことの出來ない景色である。

七年の暮

十三日の煤拂に始まる。この日は曆で鬼宿といつて吉日に當つてゐるからだといふので、今でも官中では十三日から御煤拂が始まるといふことである。この煤拂は

古く陽成天皇（五十七代一五四〇年頃）の時からあつたさうで、その後引きつづいて年中行事の一とせられてゐた。新しい年を迎へるために、一年中の煤やほこりを拂ふのである。今も煤拂はあるが、昔のやうに日は定つて居ない。

暮が近づくときこの家でも餅搗きが始まる。まだ夜のあけぬ間に起きて糯米を蒸し、蒸し上つたものを臼に入れて搗く。歌をうたひながら。歌の聲、餅つく音とが相應じて一そう餅の甘さを増すやうな氣がする。

大晦日の夜のことを除夜といふ。泣くも笑ふも今宵限りで、商賣人は一年中の決算に忙しく、商家以外の家でも何やかや仕事があつて、さすがに年末の氣分がする。やうやく仕事を片付け、一家そろつて過ぎし一年のことを語り合ひ、又來年の幸福を願うて居る中に、夜はだん／＼ふけて十二時になると、寺々から除夜の鐘がきこえる。百八の煩惱（たたくさんのわづらひやなやみ）を拂ふといふことから、百八度之をつくさうである。

かうして舊年を送り新年を迎へる。

嬉しいお祝と楽しいお祭り



以上主として室町、徳川時代に於ける年中行事の重なるものだけをあげたのであるが、この外節分の豆まき、春秋の彼岸祭、灌佛會、田植、豊年祭、その他加茂祭、稻荷祭、天王祭、山王祭をはじめ各國諸社の祭禮等今よりもつと盛に行はれた。一書くと繁雜になるから之で止めて置く。くはしいことを知りたい人は、「公事根源」、「日本風俗志」、「國民年中行事」等を見るがよい。

とむらひ

一 太古のとむらひと墓

昔の人は大分長生をしたやうであるが、それでも「死」はのがれることの出来なものであつた。しかし元來が樂天的であつた我々の祖先は、死といふことについて、それほど深く頭をなやまさなかつた。またそれほどこはがりもしなかつたやうである。死んだ人の行くところを「夜見の國」といつてゐるが、その國は、われわれの住んでゐる國のちきとなりにあつて、いつでも往來が出来る位に思つてゐた。かのイザナギノ尊の神話にも、尊が夜見の國に、なくなられたイザナミノ尊をたづねて行かれたことがのせてある。